

2021 年度
長崎外国語大学
自己点検・評価報告書

学校法人長崎学院
長崎外国語大学

2022（令和4）年6月

目次

I はじめに

1. 新たなビジョン、及び中期計画 2
2. 大学機関別認証評価の受審と本学の内部質保証 3
3. 本報告書の体裁 5
4. その他の自己点検・評価 6

II 本文

1. 自己点検・評価シート①（当該年度事業計画ベース） 7
2. 自己点検・評価シート②（ルーティンワークベース） 12

III おわりに

1. 本報告書から見える課題 16
2. 課題の解決に向けて 17

付 録

1. 長崎外国語大学 学修成果・教育成果の把握と評価に関する
方針（アセスメント・プラン） 20
2. 2021（令和3）年度アセスメント・プラン実施報告 26

I はじめに

1. 新たなビジョン、及び中期計画

学校法人長崎学院は、2020（令和 2）年度末に以後 10 年間の長期ビジョン「長崎外大ビジョン 2030」と 5 年スパンの中期計画「学校法人長崎学院長崎外国語大学中期計画(2021-2025)」を策定した。「ビジョン 2030」において本学は、「多言語多文化グローバル人材の育成」を標榜し、今後 10 年のうちに不可逆的に進展する情報通信技術の更なる高度化、グローバル化とローカル化を飛躍への契機と捉え、教育研究、国際、社会貢献、経営・運営の 4 つの基軸ごとに「2030 年の本学の在るべき姿」を規定している。

●付表 1：「長崎外大ビジョン 2030」

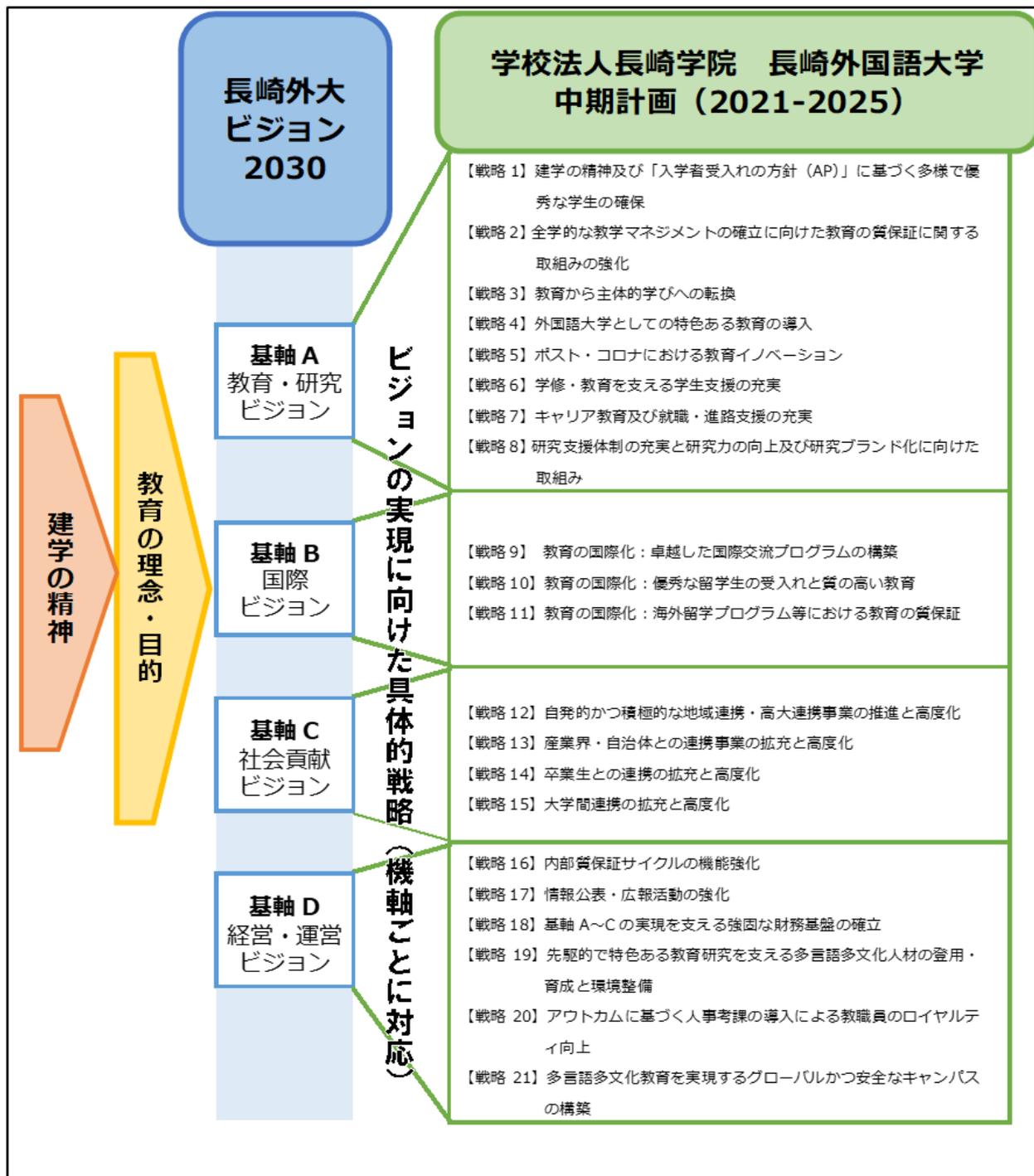
基軸 A 教育研究ビジョン 【教育】日本及び諸外国から集まった長崎外大の学生は、教室内外（留学を含む。）での学生及び教職員との知的文化的交流の中で、卓越した語学力、幅広い教養、深い専門性、並びに課題解決力等コンピテンシーを身につけ、多言語多文化グローバル人材として地域社会並びにグローバル社会の発展に寄与する高い志を持ち、社会に踏み出す準備ができています。 【研究】長崎外大の研究は、「世界平和と人類の共存共栄の理想を実現する」ために、情報言語コミュニケーションの基盤を開発整備し、その教授法が熟成され、グローバル化の進展と多文化共生における諸課題や地域社会の課題を指し示し、その解決に寄与することができています。
基軸 B 国際ビジョン 長崎外大の教職員は、多文化共生の理念に賛同し、自ら優れたグローバル人材としての力を持っている。これらの意欲あふれる教職員によって、研究を踏まえた教授法の改善により優れた多言語多文化教育、キャンパスのグローバル化への取り組みや海外の大学や機関との教育研究上の連携・交流等、国際戦略の展開が活発に行われている。
基軸 C 社会貢献ビジョン 【卒業生】長崎外大の卒業生は、どのような職業についているにせよ、世界各国で、また日本やそれぞれの地域で多言語運用力と多文化共生の視野をもった人材として社会や地域の発展に貢献している。多くの卒業生が母校で再び学び、また他の同窓生や地域社会と深くつながり、社会の持続的な発展に寄与している。 【大学】長崎外大は、その人的資源、知的財産を活用して、卒業生・同窓会、保護者会と連携し、自治体、学校、産業界、地域コミュニティ等と交流を図るとともに、様々な社会的ニーズや課題解決に対応できている。情報技術によるコミュニケーション技術の基盤を備えたグローバル・キャンパスとしての環境が整備され、地域の国際交流拠点として地域の発展に寄与している。また、社会をフィールドとする研究を通して社会貢献が行われている。
基軸 D 経営・運営ビジョン 長崎外大では、多言語・多文化教育をはじめ、先駆的で特色ある教育・研究と社会貢献活動が活発に展開されている。それを持続的に支える組織体制と強固な財務基盤並びに大学を取り巻く様々な社会変化に対応できるリスクマネジメントが確立されている。教育の質保証と経営の透明性並びにエビデンスに基づく意思決定が確保され、積極的な情報の公表・発信により、社会から厚い信頼を得ている。

「中期計画(2021-2025)」は、これら 4 つの「在るべき姿」の実現に向け、基軸ごとに KGI(Key Goal Indicator)を設定し、その達成に向けた戦略を合計 21 項目規定している。更に各戦略には具体的な実施施策としてのアクション・プランと KPI(Key Performance Indicator)を設けている。

本報告書が対象とする 2021（令和 3）年度は、「中期計画(2021-2025)」による事業運営の開始初年度に当たっている。本書（以下、本章において「2021 年度報告書」という。）は、当該計画の完遂に向けた第一歩としての学内体制の整備、制度設計及び改編等の動きや、新型コロナウイルス

感染症に対応したニュー・ノーマル構築に向けた取組みについて概略を記載し、その進捗・達成度についての自己評価を行ったものである。

●付表2：「ビジョン 2030」及び「中期計画(2021-2025)」の関係



※「ビジョン 2030」及び「中期計画(2021-2025)」の詳細は、本学ホームページ（以下 URL）を参照のこと
http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2021/06/midiumtermplan_2021_2025.pdf

2. 大学機関別認証評価の受審と本学の内部質保証

一方、2021（令和 3）年度は本学にとって学校教育法第 109 条第 2 項に規定する大学機関別認証評価の受審年度でもあった。今回も前回 2014（平成 26）年度に引き続き、公益財団法人日本高等教育評価機構（Japan Institution for Higher Education Evaluation : JIHEE）を評価機関として受審し、2022（令和 4）年 3 月 16 日に「適合」判定を受けた。今般の JIHEE による評価報告書

(以下、『JIHEE 評価報告書』という。)では、改善に向けた提言として2件の「参考意見」を付された一方、既往の取組みを更に進化させた社会連携活動や、2016(平成28)年の発足後本学の教育研究の特長を尖鋭化させる役割を担ってきた新長崎学研究センターの運営等とともに、自己点検・評価活動を含む本学の内部質保証の機能性に対して以下のとおり高い評価を受けた。

○基準項目6-2(内部質保証のための自己点検・評価) 優れた点

「大学は毎年度自己点検・評価を行い、その結果を次年度の事業計画及び予算策定などに反映させている仕組みは評価できる。」

○基準項目6-3「内部質保証の機能性」 優れた点

「三つのポリシーに基づく教育の質保証に関わる具体的な項目について、三つの階層(大学全体・学位プログラム・授業科目)ごとに、アセスメント及び点検・評価を行い、その結果を教育の改善に反映するなど、教育の内部質保証が機能していることは評価できる。」

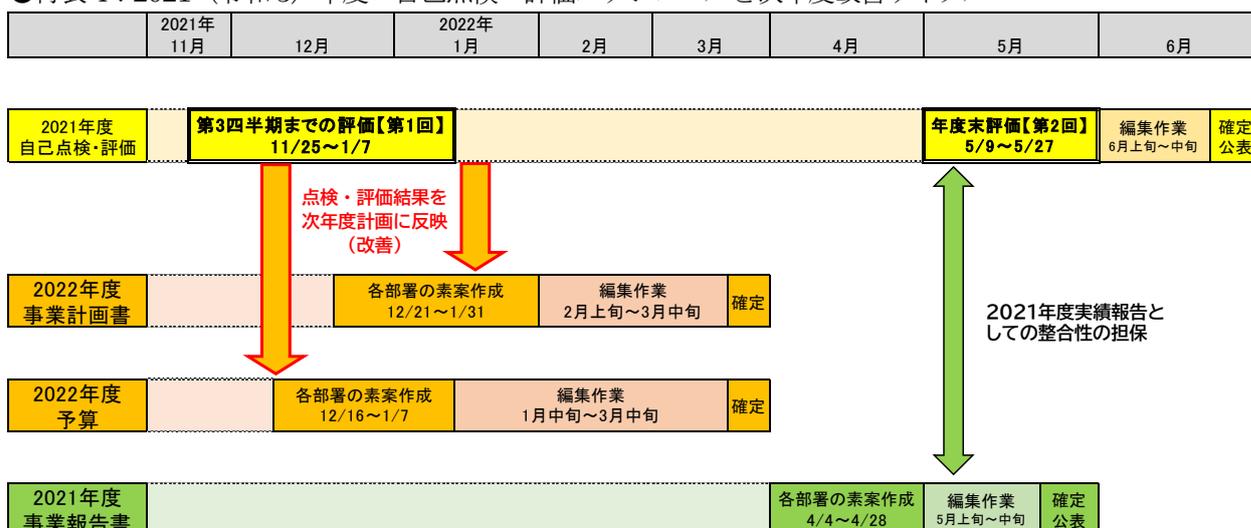
(ともに『JIHEE 評価報告書』15ページ所載)

1点目は、本学が2017(平成29)年度に大学協議会にて自己点検・評価の年間スケジュールを定め、そのなかで単年度実施の自己点検・評価における点検・評価結果を次年度の事業計画・予算策定に反映させるため、自己点検・評価を当該年度10月頃より着手のうえ12月中に概ねの検証を終了させること、そして1月以降に本格化する次年度事業計画案及び予算案策定時にこれらの成果を踏まえて計画の修正を施すこととしている点についての評価であり、本「2021年度報告書」作成プロセスにおいてもこの原則は遵守された。具体的には直下の付表3・4のとおり、次年度の改善サイクルの担保のため【第1回自己点検・評価】を2021(令和3)年11月から2022(令和4)年1月初旬に実施し、ここで本年度の第3四半期までの取組みに係る各部署の自己評価を確定させたうえ、結果に基づく改善策を2022(令和4)年度事業計画案及び予算案に盛り込んだ。更に本年度終了後の2022(令和4)年4月から5月にかけて、第4四半期の取組みと各事業の年度最終結果を踏まえた【第2回自己点検・評価】を実施し、本「2021年度報告書」の内容を確定させている。

●付表3:2021(令和3)年度 自己点検・評価 学内スケジュール

実施主体	事項	時期
内部質保証推進協議会	・2021年度自己点検・評価の基本方針の決定	2021/11/8
自己点検・評価委員会	・2021年度自己点検・評価項目の決定 ・各自己点検・評価小委員会への指示の発信	2021/11/24
各部・センター・学科 (自己点検・評価小委員会)	シートの記入【第1回自己点検・評価】 ※第3四半期までの点検・評価のみ実施 (年度末点検項目は空欄)	2021/11/25 ～ 2022/1/7
【参考】外部評価委員会	【参考】2020年度自己点検・評価に対する外部評価の実施	2022/1/24
各部・センター・学科 (自己点検・評価小委員会)	シートの記入【第2回自己点検・評価】 ※年度末点検項目の点検・評価を実施 ※第1回の第3四半期までの点検・評価を適宜修正	2022/5/9 ～ 2022/5/27
自己点検・評価委員会	・2021年度自己点検・評価報告書案の執筆・完成 (改善方策を除く)	2022/6/7
内部質保証推進協議会	・2021年度自己点検・評価報告書案に基づく改善方策の策定 (2021年度自己点検・評価報告書の完成)	2022/6/13
大学協議会	・2021年度自己点検・評価報告書の確認	2022/6/20
学院理事会	・2021年度自己点検・評価報告書の報告	2022年6月
総務課	・2021年度自己点検・評価報告書の外部公表(本学HP)	2022年6月

●付表4：2021（令和3）年度 自己点検・評価スケジュールと次年度改善サイクル



2点目は、当該アセスメント及び点検・評価に係り、本学が「学修成果・教育成果の把握と評価に関する方針（アセスメント・プラン）」（以下、「アセスメント・プラン」という。）を施行し、その中で本学「内部質保証に関する基本方針」に規定する教育の内部質保証の3つの階層における点検・評価の手法、各アセスメントの実施者（データ作成担当）、点検・評価実施者（改善案策定担当者）及び実施時期を詳細に規定のうえ、運用していることによる。2021（令和3）年度には、アセスメント・プランに基づき2020（令和2）年度の各種データに対する検証分析と改善策の策定を行っており、これらは本「2021年度報告書」の末尾に付録として添付した。

3. 本報告書の体裁

既往の本学の自己点検・評価報告書は、2014（平成26）年度以降全て、公益財団法人日本高等教育評価機構の第3期評価システムの評価項目に準拠した構成としていた。しかし本「2021年度報告書」については、上記2.にあるとおり、同システムに基づく大学機関別認証評価を既に受審したこと、本学が次回受審する第4期評価システム（仮称）の概要が未公表であること等に鑑み、大学機関別認証評価の評価項目に拠らず、以下2種類の「自己点検・評価シート」により公表することとした。

自己点検・評価シート①（当該年度事業計画ベース）

本シートは2021（令和3）年度の学院事業計画に所載の事業項目に対する取組達成度を自己評価したものである。当該事業計画は、「中期計画(2021-2025)」に基づき21の戦略項目に区分されており、「中期計画(2021-2025)」と直接関連しないものの当該年度に取り組む項目は「戦略外事業」として別途記載している。

本シートの点検・評価は全て本年度【第1回自己点検・評価】として実施されており、基本的に第3四半期までの取組み状況に基づく記載である点に注意を要する。本年度第4四半期以降に進捗した取組みについては、別途本学ホームページに掲載の本年度学院事業報告を参照されたい。

※「学校法人長崎学院 2021（令和3）年度 事業報告」

https://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/cms/wp-content/uploads/2016/10/2021_jigyou01.pdf

自己点検・評価シート②（ルーティンワークベース）

本シートは、本学の自己点検・評価における既往の問題点の解消のため、本年度自己点検・評価より新たに導入した様式である。本学における自己点検・評価はこれまで、シート①に代表される学院中期計画及び当該年度事業計画に基づく点検・評価が主流（でありほとんど全て）であった。中期計画や事業計画がその性質上、新規に着手すべき項目や制度改善・改編を企図した項目立てである以上、これに基づく点検・評価のみを実施した場合、各部署における主要業務の点検・評価が

不十分となってしまう可能性が夙に指摘されていた。この問題を解決するため、本年度第7回内部質保証推進協議会（2021（令和3）年11月8日開催）において、シート①とは別に各部署の日常業務（ルーティンワーク）に係るシートを用いて以後の自己点検・評価を実施する方針を機関決定した。上記方針に基づき、各部署に紐づく学内の各委員会規程・センター規程及び「アセスメント・プラン」の記載項目に依拠して自己点検・評価委員会が作成したものである。

本シートの点検・評価は、その項目の内容により【第1回自己点検・評価】と【第2回自己点検・評価】に実施時期が分かれている。「点検・評価結果に基づく次年度改善サイクル」を最重要視する本学の自己点検・評価に係る基本方針に鑑み、可能な限り第1回（第3四半期までを対象、本年度1月初旬完了）のうちに点検・評価を完了するよう努めているが、入学者数、就職・進学実績等、本年度の終了（厳密には次年度5月1日）を待たなければ最終数値が確定しない事業項目については第2回に実施し、本「2021年度報告書」では当該項目に【第2回評価項目】と朱書することで読者の便宜を図った。

4. その他の自己点検・評価

改正教育職員免許法施行規則が2022（令和4）年4月1日付で施行され、同規則の第22条の8にて「認定課程を有する大学は、当該大学における認定課程の教育課程、教員組織、教育実習並びに施設及び設備の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表するものとする」と規定された。本学では上記改正を受けて、自己点検・評価委員会及び内部質保証推進協議会において、本学における教職課程自己点検・評価の取扱いを検討し、その結果、本書とは別途に「2021（令和3）年度 長崎外国語大学の教員の免許状授与の所要資格を得させるための課程に係る自己点検・評価報告書」を2022（令和4）年度上半期中に策定のうえ、外部公表することとしている。

Ⅱ 本文

1. 自己点検・評価シート①（当該年度事業計画ベース）

※達成状況 5：達成済 4：部分的達成 3：着手中 2：検討中 1：未着手	事業計画の項目		自己点検・評価結果		中期計画 該当項目
	記述	数値目標	達成 状況 (1～5)	取組み内容の記述	
＜戦略1＞ 建学の精神及び「入学者受入れの方針（AP）」に基づく多様で優秀な学生の確保					
	総合型選抜の入学者比率を、一般選抜とのバランスを見ながら可能な限り募集定員に近づけます。（入試広報部）	総合型選抜経由入学者比率 20.6%以下	5	定員充足を見据えて、総合選抜型入試において必要と思われる入学者数は十分に確保できた。	A-1-1
	入試結果・入学前課題・プレイズメントテスト等の結果を踏まえ、本学での学修に適応可能な能力・意欲を有した者が入学しているかの検証を行います。（入試広報部）	入学委員会における検討回数 2回以上	5	IR課の協力のもと、当該項目について入学委員会において検討を実施した。	A-1-2
	入学者の蓄積された各種データに関連づけて分析を行い、多角的観点からアドミッション・ポリシーと選抜方法の妥当性を検証します。（入試広報部）	入学委員会における検討回数 2回以上	5	IR課の協力のもと、当該項目について入学委員会において検討を実施した。	A-1-3
	外国人留学生について、入試広報部が国際交流センターや長崎外国語大学上海事務所等、学内各部署の他、国内日本語学校との連携を強化し、受入れの方針をよりよいものにします。（入試広報部）	入学委員会における検討回数 2回以上	3	当該項目における検討を1回のみ入学委員会にて協議した。	A-1-4
	社会人学生の獲得に向けて、購読者層に合わせた広告媒体の活用により引き続き募集を促進します。（入試広報部）	入学委員会における検討回数 2回以上	3	当該項目における検討を1回のみ入学委員会にて協議した。	A-1-4
	留学生とともに学ぶ教育プログラムの開発と導入し、「カンパセーションパートナー」の単位化を検討します。（国際交流センター）	留学生との共修科目数（1科目以上）、日本人学生の留学生との共修科目への参加率 (20%以上)	5	「カンパセーションパートナーの単位化」に代えて2021年度はKOREAプログラム（交流プロジェクト、教養、日本語で構成）を実施し共修科目とした。 (参加人数) 春：韓国人10名、日本人21名（参加率達成） 秋：韓国人19名、日本人27名（参加率達成）	A-1-4
＜戦略2＞ 全学的な教学マネジメントの確立に向けた教育の質保証に関する取組みの強化					
	「アセスメント・プラン」に基づく自己点検・評価を着実に実施します（内部質保証推進協議会における全体の進捗管理を含む）。（IR課）	アセスメント・プラン所載の項目に基づく自己点検・評価実施率100%	4	「アセスメント・プラン」は全体の6割程度進捗。当年度自己点検・評価シート（シート②）に落とし込み、着実な実施を担保している。今後は分析結果の公表手法を検討していく。	A-2-5
＜戦略3＞ 教育から主体的学びへの転換					
	学習成果可視化システム（Assesmentor）を活用して教育目標やDPに即した人材育成を進めます。情報を共有し効果的な育成方法を検討するための情報を収集します。（教育支援部）	ポートフォリオの活用による学生指導（年2回以上）、指導上の注意に係る指示の確定（定性目標）	4	Assesmentor導入により、DPに基づく指導はルーティン化した。指導上の注意についても随時行っている。しかし今後のあり方についてはさらなる議論が必要。	A-3-1
＜戦略4＞ 外国語大学としての特色ある教育の導入					
	外国語大学としてのブランド力向上を図るため、特に現代英語学科学生のTOEICスコア数値目標の達成に引き続き取り組みます。（大学協議会）	学部学生のTOEIC受験率80%、現代英語学科3年次生の平均スコア650	2	春（2・4年次）・秋（1・3年次）の年2回実施。春実施209名、秋実施201名、延べ410名が受験し、これを5/1時点総在籍者数（773名）で除した受験率は53.0%と目標未達であった。過年度の実績（2019年度73.5%、2020年度69.3%）と比較しても減少傾向に拍車がかかっている。また、現代英語学科3年次生平均スコアは464.5と目標未達であった。こちらも前年度（478.6）比14.1ポイントの減少となっており、抜本的な対策が待たれる。	A-4-1
	オナーズ・プログラムを実施するための英語力の基盤（大学での学修による保証）の確立を目指して計画を実施します。（教育支援部）	TOEIC600以上の学生の割合45%以上、TOEIC700以上の学生の割合5%以上	2	TOEICの得点情報の管理を継続して行っているが、オナーズ・プログラム実施のための協議は行っていない。	A-4-2
	2022年度に向けて「Gaidaiプログラム」における「Gaidaiプロジェクト」科目に関連し、プロジェクト数を1～2増やすほか、効果的な運営を目指します。また、当該科目のコンピテンシー育成目的を明確化し、多くの教員の関与を目指します。（教育支援部）	プログラム実施件数（7件以上）	5	プロジェクト数を増加させることができ、また運営も問題なく進めることができた。さらに、報告会における外部審査員の参加も、コロナ禍にあり中断していたが、今年度は復活できた。	A-4-4
	教職センターがキャリアセンターと連携しつつ、過去に就職した学生の情報を収集・精選し、春学期・秋学期のオリエンテーションで紹介し、日本語教員の魅力を伝えます。（教職センター）	日本語教員養成課程の履修者数各学年30名以上	4	春学期のオリエンテーションを効果的に行うことができず、日本語教員養成課程の魅力十分に伝えることができなかった。しかしながら、1～4年次生の各学期の科目履修者を合計・平均で見ると、日本語教員養成課程の履修者数各学年30名の目標はほぼ達成している。なお、キャリアセンターと連携した学生情報を収集・精選は今後の課題である。	A-4-5
	教職センターがキャリアセンターと連携しつつ、実際に就職した学生を招き、就職を成功に導く情報交換会を開催します。（教職センター）	日本語教員への就職者数3名以上	2	コロナ感染症等の影響で、情報交換会そのものを実施することができなかった。日本語教員関係への就職の目標人数は達成できていない（1月7日現在0名）。	A-4-5
＜戦略5＞ ポスト・コロナにおける教育イノベーション					
	数理・データサイエンス・AI関連科目の実施状況を点検するとともに、本学における所謂「リテラシーレベル」の教育の在り方について検討します。（大学協議会）		1	検討していない。	A-5-3
	Society5.0社会に対応する数理・データサイエンス・AI教育の充実（可能性・実効性の検討と教育課程等への反映）へ向けた科目の設定と学則への反映を検討します（将来な学則変更の届出とそれまでの経過措置を含む）。（教育支援部）	数理・データサイエンス・AI教育に係る開講科目数（2科目以上）	3	現行のカリキュラムにおいて当該内容への変更ができるかどうかについて協議を行った。併せて、今度のカリキュラム改編に向けて教育支援委員会内で協議を開始した。	A-5-3
	ハイブリッド型（オンラインによる事前・事後学習）授業の推進について文科省からの通知を待ちつつ、今後の対応を検討します。また、新しい教授法についてどのように周知するかについての方法を検討します。（教育支援部）		4	遠隔授業の実施については随時協議を行っている。また、遠隔授業の報告書の提出を義務化しているため、この結果をまとめ、今後のあり方について協議を行っていく予定である。	A-5-4

COIL (Collaborative Online International Learning) 型国際教育の推進に向けて、海外の協定大学等の学生と本学学生がICT ツールを用いてバーチャルに連携しながら様々な分野のプロジェクト・国際会議等を実施し、主体的に学びを深める事業を実施し、既存科目のシラバスの中で協定校との共同開講の可能性を探ります。(国際交流センター)	先導的プロジェクトの創出件数1件	5	(戦略1に同じ) KOREA プログラムでは本学と協定校の学生同士が「交流プロジェクト」を通じて調査、発表を行う内容とした。それによって主体的な学びが深まった。	A-5-5
《戦略6》 学修・教育を支える学生支援の充実				
学生支援体制の変革：多領域対応型組織への転換に向け、これまで部署ごとに分けられていた情報を整理し、一元管理システムの構築を開始します。(学生支援部)		3	教育支援課・国際交流センター・キャリア支援課・経理課・学修支援センターに跨って管理されている学生情報を一元管理するシステムの再構築が学内で検討されている。その準備段階として組織規程や事務分掌規程の改定と、システム更新のための予算確保、業務が増えた分を担当する職員の増員が必要であるが、それらは未着手である。	A-6-1
学生支援部が、学生アドバイザー、学修支援センター、カウンセリングルーム、及び担当課室と密に連携し、教職員協働による包括的な支援体制を強化します。(学生支援部)		5	既に現在でも学生支援部は、学生アドバイザー、学修支援センター、カウンセリングルーム、及び担当課室と密に連携し、教職員協働による包括的な支援を提供しているが、それ以上の質の支援を提供するため、学生カルテシステムのアップデートを待っている段階である。	A-6-1
ZOOM を活用した遠隔カウンセリング等、新たな方法を実践し、カウンセリングルームをより機能的に運用します。(学生支援部)	遠隔カウンセリング各学期10件以上	4	遠隔カウンセリングを実施できる環境及びルールを設定し、いつでも運用できる体制は整えた。しかし、本学はほとんどの授業を対面で実施できたことから、対面でのカウンセリングを希望する学生が多く、また、自宅の通信環境や静穏保持の問題等から、対面以外は電話やメールによる相談が主である。遠隔カウンセリングは結果的に実施していない。なお、カウンセラーからはZoomのほか、支援が必要な学生と繋がる多様なツールを準備していることが望ましいことであるとして、本学の対応には満足と答えている。	A-6-1
コロナ禍に柔軟に対応した学生指導を実施します。(学生支援部)		5	本学はコロナ禍においても対面授業と対面指導をできる限り維持してきた。コロナ禍に対応した奨学金プログラムの紹介などの業務も行っている。	A-6-1
GPA 等を参照した学生指導プログラムの開発に着手します。(学生支援部)		3	これまではGPAによって学生を選び、学生支援部長と教育支援部長が学生を指導する形をとっていたが、学生カルテシステムを利用したEBPMとして学業不振に至る学生生活を発見し指導する方法を開発することを、2021年度12月の学生支援委員会で協議した。	A-6-2
スチューデント・リーダーズ・プログラム (SLP) 学生を語学村運営等に積極的に登用し、学年を越えたピアサポートを実施します。また、社会人学生の活用によるピアサポートプログラムを開発し、試行します。(学生支援部)	SLP 学生数各学期15名以上、社会人学生生活用2021年度秋学期1件以上	4	COVID-19の感染拡大防止の観点から、学内外での集会の開催に制限を設けていたため、語学村やSA制度の運用もその影響を受けていた。2021年度秋学期より再開できることとなり、担当学生が見つからなかった現代英語を除いて語学村を再開した。しかしながら、社会人学生を活用したピアサポートプログラムは未だ検討中である。	A-6-3
経年変化を分析するための設問と新しい中期計画に基づく設問による学生意識調査を行うほか、学生代表との意見交換を行います。(学生支援部)	学生意識調査1回、意見交換会2回以上	5	学生意識調査は毎年継続実施しているが、設問は次の認証評価の基準項目を考慮に入れて2021年度のものから大幅に変更して2021年7月に実施し、講評を学生支援委員会で確認している。学生代表との意見交換は、学部長、学生支援部長によるものを2021年10月に一度行ったほか、学友会定例会議には学生支援課員が毎回参加し、学生からのニーズを聞き取り、適宜指導も行っている。	A-6-3
高等教育段階における修学支援制度と本学の既往の奨学金制度の整合性を検証し、原資に対する効果の最大化を目指した制度の再構築を目指します。(大学協議会)		1	検討していない。	A-6-3
学長賞対象者等、学業及び学外活動で成果を上げた学生の情報を積極的に発信します。(学生支援部)	学長表彰1件以上	5	今年度はコロナ禍において学生が積極的に周辺社会で活動する機会が乏しく、今のところ正課外活動で学生表彰規程の対象となる学生はいないが、県内のスピーチコンテストや各種コンテストで優秀な成績を修めた学生をHP等で発信した。	A-6-3
《戦略7》 キャリア教育及び就職・進路支援の充実				
キャリア支援教育の質的充実を図るため、PROG テスト、アセスメント・プランの指標を活用し、PDCA サイクルを確立します。(キャリアセンター)		3	キャリアプランニングⅢ(3年生)履修者全員を対象としたPROG テストを実施し、今後どのようにPDCA サイクルに反映させるかが課題である。	A-7-1
キャリアセンターが主導し、教育支援部、学生支援部、国際交流センター等との連携を図るべく、情報共有の会議を定期的実施します。(キャリアセンター)	連携に基づく事業実施件数(月1回)	3	毎月1回程度定期的に各課室との情報共有会議の実施を目標としていたが、実施目標回数には至っていない。	A-7-2
インターンシップ受入先(企業、地方公共団体、教育組織)の新規開拓を行い、学生へ社会人基礎力や汎用的能力の向上、職業意識の醸成、多様な業界・企業・仕事への理解を促します。(キャリアセンター)	インターンシップ先受入れ企業数15件	5	本年度は学内開拓企業23社、長崎インターンシップ推進協議会16社へ延べ82名を派遣し、業種・仕事理解が促進できた。	A-7-3
近隣の教育機関(特に、横尾中学校)との連携を強化し、新カリキュラム開講科目「学校インターンシップ」が実施できるように提携を結びます。(教職センター)		4	横尾中学校において、新カリキュラム開講科目「学校インターンシップ」を実施できる体制を整え、実際に稼働できるまで来たが、コロナの影響で実施できなかった。	A-7-3
地方自治体、就職支援企業などと連携し、多種多様な業界への理解を深めさせ、就業先となる企業の新規開拓を行います。また日本貿易振興機構などと情報共有し、海外での就業を活性化させます。(キャリアセンター)	新規開拓企業とのマッチング数50件以上	4	長崎県、長崎労働局、時津町、及び就職支援企業等と連携し、キャリアプランニング授業内で業界研究セミナーの実施、NAGASAKI しごとみらい博への参加を促し、様々な業界への理解を深めた。就職希望者に対しては新規開拓企業50社以上をマッチングさせ採用選考に進ませた。しかし、日本貿易振興機構などと情報共有はできていない。	A-7-4
エアライン、ホスピタリティ、語学を活用する公共団体専門職等への就業に向けてのプログラムの充実を行い、就業モチベーションを維持させ、各関連企業・団体への就業者の増加を図ります。(キャリアセンター)	外大ブランドの確立に資する就職先への就業者数10名以上	4	エアライン・ホスピタリティに関するセミナーを毎週開催し、関連業種への就業モチベーションを維持するように図っている。関連企業への就業者は新型コロナウイルスの影響により、採用枠を絞られており厳しい状況である。	A-7-5
《戦略8》 研究支援体制の充実と研究力の向上及び研究ブランド化に向けた取組み				
「長崎学にかかわるひとり一研究」の実現に向けた諸施策に着手します。(新長崎学研究センター)	教員の割合15%以上	4	年3回開催した研究集会及び紀要発行により下地作りをした。	A-8-1
長崎学に係る貴重資料の収集・公開展示を行うほか、展示会を開催します。(新長崎学研究センター)	貴重資料年20冊以上、展示会開催年1回以上	5	文部科学省補助金の採択を受け、貴重資料(図書)として「長崎の伝統文化と宗教宣教・語学コレクション」全20点を購入した。また学外で「フルベッキ展」、「フランス海軍墓地120周年記念古写真展」を開催し一般に公開した。また、「写真に見る115年前の長崎―日露戦争時代―」と題し新聞記事に連載した。	A-8-1

長崎外国語大学史にかかわる資料の収集に努めます。(新長崎学研究センター)		5	「和蘭字彙 AB・LMN・O・UVWXYZ」、「キリシタン文化研究会会報復刻 1〜99 号内」、「キリスト教史学第 1〜55 集揃」、「長崎港精図」「新訳和蘭国全図」、「長崎県千名鑑」を購入した。	A-8-1
新長崎学研究にかかわる研究集会を実施します。(新長崎学研究センター)	年 3 回以上	5	計画通り研究集会を年 3 回実施し延べ 80 名が参加した。なお、第 2 回の研修集会については動画配信も行った。	A-8-2
新長崎学研究にかかわる研究プロジェクトを組織化させます。(新長崎学研究センター)	2 グループ以上	5	当該研究を学長裁量経費で実施した。	A-8-2
『新長崎学研究センター紀要』を発行します。(新長崎学研究センター)	年 1 回以上	5	今年度内に創刊号を発行した。	A-8-2
新長崎学研究叢書第 3 巻を刊行します。(新長崎学研究センター)	1 冊	2	予算の関係で第 3 巻刊行は来年度以降に延期した。	A-8-2
市民公開講座、読書会を開催します。(新長崎学研究センター)	市民公開講座年 2 回以上、読書会年 3 回以上	4	読書会を全 5 回開催したが、市民公開講座は開講できなかった。	A-8-2
《戦略 9》 教育の国際化：卓越した国際交流プログラムの構築				
オーストラリアのスインバン大学と、学生の派遣及び受入れについて協議を開始します。(国際交流センター)		5	協定締結に向けて協議を継続中。	B-9-1
国際交流協定校とオンラインによる学生交流を実施し、2022 年度以降正課科目の中の一部に取り入れることを目指します(フランス、韓国を中心に)。(国際交流センター)		4	2021 年度は学生交流を取り入れた KOREA プログラムを実施した。正課科目に取り入れるかどうかは今後検討する。	B-9-2
中国の協定校と共同授業の実施に向けて協議を開始します(大連東軟信息大学、中南財経政法大学)。(国際交流センター)		5	12 月に大連東軟信息大学主催のスピーチ大会に学生 2 名が参加し、本学も審査員を務めた。今後も継続する予定。	B-9-2
UMAP で実施している学修プログラム(特にオンラインによるもの)を検証し、本学においても参加可能であるものについて検討を開始します。(国際交流センター)		1	検討に至らなかった。	B-9-3
《戦略 10》 教育の国際化：優秀な留学生の受入れと質の高い教育				
短期留学生の受入れ方針/計画(募集方法、規模、教員組織、カリキュラム、財務等)を策定し、今後 5 年の受入方針を検討します。(国際交流センター)	方針/計画の策定件数 1 件	5	コロナによる入国制限や解除など状況に応じた対応をすることとした。	B-10-2
留学生の正課科目「基礎演習」の中でキャリア日本語プログラムを設け、日本語能力と社会人基礎力を高めるための話し方・聴き方の指導に取り組みます。就職希望者は日本語能力試験の受験(N1 レベル以上の取得)を促します。(キャリアセンター)	留学生の進路決定率 75%以上	4	キャリア日本語プログラムについては「キャリア日本語」内で日本での就職活動への取り組み方を周知し、話し方・聴き方、社会人基礎力の向上を指導し日本語能力試験の受験を促した。現時点で進路決定率は 100%である。	B-10-3
ICT 活用による留学生プログラムの広報(日本語授業やプログラム案内の動画配信等)に係り、ICT を活用して大学説明会(ミニ模擬授業含む)を実施します。(国際交流センター)	ICT を用いた広報件数(年 3 回)	5	オンラインで大学説明会を 3 回実施した。	B-10-4
《戦略 11》 教育の国際化：海外留学プログラム等における教育の質保証				
留学前・留学後の適切な指導による外国語力の向上に向けて、留学前後の語学検定スコアの伸び率(KPI)を測るため、1)「留学前研究」(留学前に提出)、2)「留学事後研究」(履修時提出)の 2 度のタイミングでのスコア(留学先言語)提出が単位認定の条件とできるか等を検討します。(国際交流センター)	留学前後における語学検定スコアの提出率(前・後 2 回ともに 70%以上)	5	単位認定の条件とはしないが、検定受験と結果提出を派遣留学の募集要項に示した。	B-11-3
《戦略 12》 自発的かつ積極的な地域連携・高大連携事業の推進と高度化				
初中等教育機関における語学教育の実証実験を実施します。(社会連携センター)	実施件数 1 件以上	5	10 月 30 日に新上五島町にて英語イマージョンデイキャンプを実施。参加者(24 名)満足度(100%)とも事前の目標数値を達成。連携先からも高評価を得た。	C-12-1
定期的協議を行う高等学校を開拓し、複数の高等学校と情報交換可能な体制を整えます。また現在、定期協議を行っている諫早商業高等学校との連携強化を図ります。外国語課程を有する壱岐高等学校や対馬高等学校との共同教職員研修の複数回実施を目指します。(入試広報部)	定期的協議を実施する本学ターゲット校数 2 校以上、外国語課程を有する高校との協議回数 2 回以上	5	定期的に協議を行ってきた諫早商業高等学校とは 2 回の協議を行った。外国語課程を有する高校との協議については、対馬高等学校とはあらたな形での連携協力の実施について協議を行った。これ以外に、国際科創設に伴う新たな連携について複数の高校(長崎北陽台高等学校、神田女学園)と協議を開始した。	C-12-2
本学教員が高等学校へ出向いて行う出張講義、本学において実施する語学研修をさらに充実させ、高等学校では得ることのできない教育内容を提供し、生徒の語学運用能力を高めることに寄与します。(入試広報部)	高大連携モデル校における模擬授業実施件数 2 回以上	5	諫早商業高校での授業提供を 3 回実施した(担当教員：崔講師)。	C-12-3
本学と協定関係にある初中等教育機関との各事業前後に聴き取り調査(アンケート)等実施し、本学の社会貢献度及び社会連携ニーズの把握に努めます。(社会連携センター)	聴き取り(アンケート)実施(年 1 回)	5	年度の計画には挙がっていないが急遽協定先である時津町や横尾小学校区コミュニティ連絡協議会に NASA アジア支部代表による英語での講演を受入れてもらったところ、反響が大きかったことに加えて、英語での講演に学生の通訳を付けたことで語学教育にも繋がった。また、今後も同講演の要望を受ける等、ニーズの把握もできた。	C-12-5
近隣の初中等教育機関への留学生派遣事業を実施します。(社会連携センター)	15 回以上	4	新型コロナ感染拡大の影響で留学生は来日できておらず留学生を派遣する事業は実施できなかったが、オンデマンド配信にて、協定先の時津町内の小学校(2 校)の児童が英語で作成した長崎紹介パンフレットを留学生が見て感想を述べ、併せて留学生が児童に対して自国の紹介をした。	C-12-5
《戦略 13》 産業界・自治体との連携事業の拡充と高度化				
QSP 事業としての社会人リカレント講座の実施に係り、社会連携センターと大学総務課が連携し、事業企画立案及び調整を図ります。(社会連携センター、大学総務課)	社会人リカレント講座への参加者数 100 名以上	4	本年度は鎮西学院大学の文科省委託事業への参画により実施中。参加者 33 名に止まり数値目標未達。次年度以降は独自実施に向けて早期に検討開始予定。	C-13-2
「外国語地域サービスポータルセンター(仮称)」の設置に係り、地域ニーズ・予算他を検討し、地域ニーズに沿った協力体制を構築します。(社会連携センター)	ニーズ調査及び協議 1 回以上	1	本年度は未実施。	C-13-3
本学と協定関係にある自治体・産業界との各事業前後に聴き取り調査(アンケート)等実施し、本学の社会貢献度及び社会連携ニーズの把握に努めます。(社会連携センター)	聴き取り(アンケート)実施(年 1 回)	4	例年、時津町と連携して開講していた語学講座はコロナのために中止となったが、定例の時津町との連絡推進会議では今後の講座は「歴史や文化の内容に変更したい」との要望を受ける等ニーズの把握ができた。	C-13-4
《戦略 14》 卒業生との連携の拡充と高度化				
卒業生及び就業した企業を対象にアンケート調査を実施し、卒業後のキャリアについての意識調査を行い、大学のキャリア教育の効果を明らかにします。(キャリアセンター)	卒業後、卒業生と企業に意識調査を実施(各 1 回)	4	2021 年 11 月 1 日〜22 日に 2017 年以降に卒業した本学学生を採用している日本国内の企業 339 社、及び 2021 年 10 月 26 日〜11 月 5 日に 2018〜20 年度卒業生 447 名へキャリアについての意識調査を行った。	C-14-1

〈戦略15〉 大学間連携の拡充と高度化				
初中等教育機関における語学教育支援事業として QSP 事業展開（地域産業の活性化専門委員会事業）を推進します。（大学総務課）	英語イマージョンデイキャンプ及びシンポジウム開催各1回	5	（戦略12に同じ） 10月30日に新上五島町にて英語イマージョンデイキャンプを実施。参加者（24名）満足度（100%）とも事前の目標数値を達成。連携先からも高評価を得た。	C-15-1
入試広報部と大学総務課が連携し、QSP 共同枠入試の事業効果の検証と、より実効性を高めるためのスキーム作りを行います。（入試広報部、大学総務課）		3	事業効果の検証は QSP の枠組みの中で実施済。実効性を高めるスキームの検討は入試広報課の広報強化（高校訪問）で実施している。	C-15-3
キャリアセンターと大学総務課が連携し、QSP 学生支援ワーキンググループ事業（地域への就職促進事業）の着実な実施を図ります。（キャリアセンター、大学総務課）		5	12月11日に左記事業として「合同グループ面接講座」をオンラインで実施。本学キャリア支援課が事務局となり企画運営を主導し、企業6社、学生22名の参加を得た。事業効果検証を実施中（大学総務課） 12月11日13:00～16:30に長崎・佐賀・福岡県下10大学・短期大学の22名、6企業が参加しビデオ会議システムを活用し、合同グループ面接講座を実施した。（キャリアセンター）	C-15-3
教育支援部と大学総務課が連携し、本学 e-learning 科目の QSP 単位互換科目としての開放を進めます。（教育支援部、大学総務課）		1	検討していない。	C-15-4
その他、共同 FD・SD、共同研究、共同施設利用についても活発化を図ります。（大学総務課）		5	9月16日実施の共同 FD・SD の企画に参画。鎮西学院大学と共同研究「長崎県の地域活性化に向けた分野横断・学際的共同研究」を実施中。共同施設利用は本年度の他大学等からの利用申請はなかった。	C-15-4
〈戦略16〉 内部質保証サイクルの機能強化				
IR 課職員の職能育成、特に統計学・データ処理分野に係る研修に取り組みます（学内研修の企画実施・外部研修派遣のいずれか）。（大学総務課、IR 課）	年1回	3	8月28日に IR 課職員を外部研修に派遣予定であったが、当日急遽別業務（コロナ関連の体調不良職員の代替業務）のため欠席。一方、10月22日に当該職員を鎮西学院大学の IR 研修に講師として派遣した。	D-16-1
「アセスメント・プラン」に基づく自己点検・評価の進捗状況確認を行うとともに、点検評価結果に基づく改善策の策定による内部質保証の機能性担保を図ります。（内部質保証推進協議会）		4	2021年度の自己点検・評価に着手中（本シート）。改善策の策定は本年度1～3月に未達成項目の洗い出しと年度内改善可否を検討のうえ実施予定。	D-16-2
「アセスメント・プラン」に基づく自己点検・評価結果を内部質保証推進協議会・経営企画協議会に定時に報告するとともに、学生募集関連分野の法人 IR にも着手します。（IR 課）		3	アセスメント・プランと自己点検・評価の連関性は既に担保しており（戦略2参照）、今後は「内部質保証に関する規程」に基づく報告を遺漏なく行う。法人 IR については未着手。	D-16-3
各センターの基本方針（全7機関）の基本方針（設置目的、分掌、内部質保証・教学マネジメントとの関係性、年度末のセンター年報作成義務等を盛り込む）の策定に向けたマニュアルを策定します。（大学協議会）	センター基本方針策定（件数7件、率100%）	1	検討していない。	D-16-4
〈戦略17〉 情報公表・広報活動の強化				
大学総務課と入試広報部による、本学の広報・ブランディングに係る総合戦略の策定に向けた検討会議を実施し、年度内に具体的なブランディング広報事業に着手します。（大学総務課）	検討会議年3回以上	3	検討会議は未実施ながら本学ブランディングのための広報着手時に担当者間の協議検討を行っている。今後は来年度の広報に係る戦略会議を年度末までに1回実施予定	D-17-1
既存の長崎市との平和発信・国際交流事業イベントに、SDGs の視点を加え、本学の建学の精神を踏まえた事業・取組について検討・開催します。（社会連携センター、新長崎学研究センター）	年1回以上	5	8月9日に長崎市の事業として開催された長崎平和祈念式典に参列する外国人大使の随行通訳者として学生を派遣し平和発信に協力した。11月20日、公開シンポジウム「SDGs の達成に向けた教育・行政・企業の取り組み」を開催し、本学教員・学生に加え、県内団体・企業から講師を招いて、本学・行政・企業の取り組みについて討議し、SDGs の視点による社会連携事業として、成果を公表することができた。（社会連携センター） 学外の施設で「フランス海軍墓地120周年記念古写真展」を開催し一般に公開した。（新長崎学研究センター）	D-17-3
「教育情報の公表に関するガイドライン」に基づく IR データの遺漏ない収集と分析結果の遅滞ない公表に努めます。（IR 課）	左記ガイドラインの求める情報公表率100%	4	自主的公表項目を除く部分については完了。年度末までの100%実施を目指す。教員免許法施行規則の改正（教職課程自己点検・評価の結果公表義務化）に伴い「ガイドライン」の改定施行を実施済。	D-17-4
〈戦略18〉 基軸A～Cの実現を支える強固な財務基盤の確立				
中期計画（2021-2025）の目指す将来的な入学定員拡大に向けた予備的検討に着手します。そのための情報収集に努めます。（大学協議会）		1	検討していない。	D-18-1
アドミッションオフィサーの継続配置を図るとともに、個々のオフィサーの分掌の更なる明確化を図ります。（法人総務課）		4	本年度アドミッションオフィサーを事務職員9名に発令済。今後これらの入学委員会への陪席等を検討し、機能性を高めていく予定。	D-18-2
現金預金、特定資産等の運用資産及び純資産を増強し、財務基盤を確立するために、収入面では授業料の納期管理を徹底し、経常費補助金、競争的資金、採択制補助金、寄付金の獲得は外部資金委員会による全学的な取組み体制を強化し増収を図るとともに、支出面では予算内であっても適正性の検証を行い、予算外、予算超においてはその実効性、妥当性について精査を行い、無駄のない予算執行を行います。（法人財務課）		3	授業料の納期管理の強化により12月末時点の未納状況は前年同月比▲9件▲3,153千円となっている。外部資金委員会は毎月定例開催し競争的資金獲得について進捗を管理しており、「教育の質に係る客観的指標」は昨年度比増減率1%増、「改革総合支援事業」は前年比同程度の補助額の獲得見込みである。支出面においては予算外、予算超の執行についてその妥当性の検証を行い無駄のない執行を行っている。	D-18-3
〈戦略19〉 先駆的で特色ある教育研究を支える多言語多文化人材の登用・育成と環境整備				
多言語・多文化人材の確保に向けた教員国際公募の拡大を図ります。（大学協議会）	教員公募件数における国際公募の比率30%以上	3	2022年度採用に向けた教員公募5件実施中。うち国際公募（外国媒体への求人掲載）は1件（20%）である。今後必要に応じて母語話者教員以外の公募についても国際公募拡大を検討する。	D-19-1
女性・若手・外国人研究者の積極的な採用を目指します。（大学協議会）	本務教員に占める女性研究者比率35%以上、若手研究者比率25%以上、外国人研究者比率20%以上	5	2021年5月1日現在の各数値は以下の通りでありいずれも数値目標を達成している。 女性研究者比率：39.5% 若手研究者比率：39.5% 外国人研究者比率：31.6%	D-19-2
女性研究者のライフイベント後の復帰支援制度の拡充を検討します。（大学協議会）		1	検討していない。	D-19-2

リサーチ・アドミニストレーター (URA) の配置について検討します。(法人事務局)		3	配置の要否について法人事務局にて予備的な協議を実施しており、現状その必要性は希薄であると評価している。今後の必要性が生じた場合、文科省科学技術・学術政策局が毎年度実施している「研究開発評価人材育成研修」への研究支援課事務職員の派遣を検討する。	D-19-2
他大学や他機関との人事交流による組織活性化推進の検討を行い、他大学等との協議に着手します(人事交流が有効かつ可能な分野について検討)。(法人事務局)	他大学・他機関との協議(年2回程度)	5	本年度人事交流3件(鎮西学院大学への事務職員の派遣、同大学教員の研究員受入れ、長崎県庁職員の研究員受入れ)を実施。派遣においては法人事務局が出向先での成果管理を帳票により行い人事交流の有効性を高めている。	D-19-3
他大学と共同実施が可能な大学事務の検討を行い、共同実施に向けた他大学との協議に着手します。(法人事務局)	他大学との協議(年2回程度)	1	QSPの枠組みの活用を想定していたところ、QSP自体が共同事務の着手検討を控えたため現状未着手となっている。	D-19-3
自然科学系教員、実務家教員、AI・数理・データサイエンス関連教員等、多様な人材の確保によるダイバーシティの向上に取り組みます。(大学協議会)	自然科学系教員の人数1名、実務家教員の人数2名、教養教育推進委員会の開催件数年2~4回	1	自然科学系教員の確保については検討しておらず、AI・数理・データサイエンスを盛り込んだ教育課程の再編制の方が先決。教養教育推進委員会は年度末に向けて教育支援部が開催日程を調整中。	D-19-4
中期計画(2021-2025)の各種戦略の実現に向けた教員組織編制、特に教員組織のダイバーシティ向上に向けた諸施策の検討を行います。(大学協議会)		1	検討していない。	D-19-4
FD・SDの高度化に向けて教育支援部にて他の部署・機関との連携を図り、適切な部署で適当なSDを実施します。(教育支援部)	教育の質保証に係るFDの実施件数1回以上、SDGs関連FD・SDの実施件数1回以上、教授法に係る教員SD(FD)の実施3回以上	3	数値目標に記載されているFDは実施計画に折り込まれていなかったため、可能な限り実施をできるように対応したが、教員からの要望が強かった教授法に係るFDの開催を優先したため、それ以外のFDは実施していない。	D-19-5
長崎外国語大学「求められる教職員像」を実現するためのSD実施年間計画を大学総務課が教員SD(FD)委員会と連携のうえ策定し、計画の遅滞ない実施を目指します。(大学総務課)		5	本年度のSD実施年間計画は2020年度末の第35回大学協議会で協議・決定済。年間計画に基づき着実な実施がなされている。	D-19-5
《戦略20》アウトカムに基づく人事考課の導入による教職員のロイヤルティ向上				
教員の人事考課制度導入に向けた基本的な内容検討を開始します(評価項目検討(研究・教育・社会貢献・管理運営等)、評価方法検討(定量・定性・目標達成度等)、評価結果を処遇面にどう反映するか検討(給与・賞与・昇任等))。(大学協議会)	教員向け人事考課制度設計案の作成1件	1	検討していない。	D-20-1
教員の人事考課制度の導入目的・意義の理解(認識の共有化)(大学協議会)	教員向け説明会実施1回	1	検討していない。	D-20-1
事務職員の人事考課制度を試行実施し、課題の洗い出しを行います。(法人事務局)	人事考課(試行)実施1回、賞与考課(試行)実施2回	5	事務職員人事考課は予定通り実施。課題の洗い出しとして、2020年度実施結果を踏まえ制度における級の見直し、2次考課者の見直し、考課表におけるポイント合計とランクの見直し等を行った。	D-20-2
《戦略21》多言語多文化教育を実現するグローバルかつ安全なキャンパスの構築				
体育館の一時避難施設としての機能を充実させるため、地元関係者と協議を行います。(管財課)		5	11月27日に、横尾連合自治会並びに横尾北部自治会との協議を実施した。	D-21-2
本学照明のLED化を推進するため、本年は411ホールの照明を改修します。(管財課)		5	8月に411ホールの照明を全面LED化した。	—
毎年度継続して行っているタイル壁の剥落防止工事を継続実施します。(管財課)		1	本年度は、支出抑制のため実施見送りとなった。	—
その他老朽化対策として、教室を中心にメンテナンスに注力します。(管財課)		5	123件、約500万円の修繕を実施した。	—
《その他》戦略外事業				
学内無線LAN設備を一新し、同時接続数の増加と回線速度を向上させて学修成果可視化システムの円滑な運用を支援します。(ICT教育支援室)	アクセスポイント61台	5	文科省の補助金を受けて実施するにあたり、補助金採用通知文書が本学に届いてから着工する必要があったが、補助金の採択通知が予定より遅れたため8月着工予定が11月となったが、年内に一部分を除き学内無線LAN設備の増強が完了した。	—
コンピュータ教室(M202)のPCを更新し、学内の全てのPCのOSをWindows10に統一させます。(ICT教育支援室)	PC56台	5	8月にM202教室のPC更新作業を行った。これをもって、一部特殊な使い方をしているPC(ホールのPA機器操作専用PC等)を除き、本学教職員・学生が利用するPCは全てWindows10に更新された。	—
大学ホームページの情報公開ページを「教育情報の公表に関するガイドライン」に沿って整備します。(ICT教育支援室)		5	IR課の協力のもと、大学ホームページで公開する情報を集約し、随時更新して「教育情報の公表に関するガイドライン」に即した内容に変更した。	—
「多読コーナー」書架へのクリアラック設置及びレベル表示等の改善による整備を行い、より利用しやすく且つ管理しやすい書架にします。(マルチメディアライブラリー事務室)	クリアラック50個設置	5	「多読コーナー」の書架へのクリアラック設置及びレベル表示等の改善による整備を行い、より利用しやすく且つ管理しやすい書架にした。現代英語学科教員を中心に案内済。	—
集密書架内のNDC分類で著しく過密な分類の図書を中心に仮移動させ、移動書架増設が可能になるまでの期間の集密書架の狭隘化を改善します。(マルチメディアライブラリー事務室)		5	集密書架内のNDC分類で著しく過密な分類の図書を中心に仮移動させ、移動書架増設が可能になるまでの期間の集密書架の狭隘化を改善済み。	—
「文庫コーナー」の整備計画を策定します。(マルチメディアライブラリー事務室)		4	教員からの推薦図書として要望のあった未所蔵分の岩波文庫の受入れを継続中で、照明不足の文庫コーナーにLED照明を増設する計画を策定(管財課に相談済み)。	—
授業内で文献検索演習(OPACやデータベースの使い方説明等)を実施し、学修のために必要な資料検索の技術を学生に身につけさせます。(マルチメディアライブラリー事務室)	前年比50%以上増加	5	学修のために必要な資料検索の技術を学生に身につけさせるために、授業内で文献検索演習(OPACやデータベースの使い方説明等)を実施した。受講済み学生数は、前年比455%増加。	—

以上

2. 自己点検・評価シート② (ルーティンワークベース)

※達成状況 5: 達成済 4: 部分的達成 3: 着手中 2: 検討中 1: 未着手	自己点検・評価項目 (自己点検・評価委員会)		自己点検・評価結果	
	項目	備考 (項目の根拠等) ※ AsP=アセスメント・プラン	達成 状況 (1~5)	取組み内容の記述
大学協議会 (AsP 関連事項を除くルーティンワーク)				
	(1) 教育研究に係る重要な規程の制定又は改廃に関する取組みは適切であったか	協議会規程 2-3	5	本年度大学協議会では、2022 年度に向けた学則改定の協議のほか、学長裁量経費取扱要項、教員資格審査基準、教員資格審査基準に関する内規、教育情報の公表に関するガイドラインの改定を行った。関連法令の改正や既存法令との整合性を取るための改定であり、適切且つ適時に取組みがなされたものと自己評価する。
	(2) DP・CP に基づく教員組織の編制状況は適切であったか (必要教員数、ST 比、年齢・性別・職位構成、国際化への配慮、役割分担、授業科目担当状況、募集・任用・昇任)	協議会規程 2-4 教員組織編制方針 2-1~2-7	5	本学の教員編制は大学設置基準が規定する教員数・教授数を満たしており、ST 比は 20.3 とここ数年の実績から横這いである。年齢・性別・国際化の実績についてはシート①の戦略 19 の通り、「研究体制の整備に関する指針」の目標数値を満たしている。職位構成、役割分担、授業科目担当状況については今年度教育課程編成にあたり昨年度の大学協議会で検討を加えており、適切であると自己評価する。
	(3) 教育研究力の向上のため、教員 SD(FD)委員会及び大学総務課と連携のうえ、組織的・多面的・継続的な SD・FD 研修等を実施し、教員・事務職員の資質向上を図っているか	協議会規程 2-4 教員組織編制方針 2-8 教学マネ基本方針 7-1~7-2	5	本年度の SD 実施年間計画は 2020 年度末の第 35 回大学協議会で協議・決定済。年間計画に基づき教員 SD 委員会と大学総務課が有機的な連携を保ちつつ着実な実施がなされている。
教育支援部				
	(1) 成績不振 (出席状況不良を含む) の学生に対する指導状況について、その件数は適当な数値内であったか。また指導の効果は充分であったか ※AsP では学生支援部担当項目：経過措置として教育支援部担当項目としている	AsP2-A (両学科にも同項目を設定)	4	指導回数は両学科とも十分なものであり、またその効果もかなり出ているのではないかと考える。ただしシステム的問題もあり、一部教員に負担がかかっているという指摘については真摯に受け止め、改善をする必要があると考える。
	(2) 全学生の単位取得状況・GPA・GPT・成績分布の状況に鑑みて、全学的な教育課程の機能性は適切であったか ※AsP では学生支援部担当項目：経過措置として教育支援部担当項目としている	AsP2-A (両学科にも同項目を設定)	4	全学的に機能性は担保できていると判断できるが、Assesmentor による分析では一部の科目に改善の余地があると思われるものもあり、今後の検討課題としたい。
	(3) 2021 年度卒業生数 (学位授与数) 及び最低在学年限卒業率は適当であったか【第 2 回評価項目】 ※AsP では学生支援部担当項目：経過措置として教育支援部担当項目としている	AsP3-A	5	いずれの数値もかなり高い数値であると思われる。
	(4) 授業評価アンケート・卒業時満足度調査・PROG テスト等の各種アセスメントの実施状況は適切であったか	任意設定項目	5	いずれも問題なく実施できている。
学生支援部				
	(1) 学生規則及び学生の賞罰に係る規定を適切に整備・運用したか	委員会規程 2-1-1	5	学生の非違行為に関して、学生懲戒規程と過去の処分履歴を参照して、学生を指導した。また、学生表彰規程に該当する事案がないか積極的に情報を収集し、規程に照らして適宜対応した。
	(2) 学生指導・支援、特にアドバイザー担当教員が処理できない学生からの生活相談の件数・効果は充分であったか	委員会規程 2-1-2 委員会規程 2-1-3	5	学生自ら、あるいは保護者やアドバイザー、カウンセラー経由の相談は、基本的に学生支援課長が対応し、内容に応じて関係各署と連携のうえ対応した。対応内容は、アドバイザー教員にも可能な範囲で情報を共有した。
	(3) (学外のものも含めた) 奨学金の運用・支給の状況は適切であったか	委員会規程 2-1-4	5	本学奨学金授与規程、JASSO 奨学金規程等に基づき、適正・適切に対応した。
	(4) 課外活動の運営 (課外活動加入者・活動団体数等) は適切であったか	委員会規程 2-1-5	5	コロナ禍において学生団体の活動は通常通りとは言えない。流行拡大期には活動を停止するという指導をし、活動再開後は感染拡大を防止する方針に沿って適正・適切に指導をしている。
	(5) 休退学防止の取組みは適切であったか。またその結果、2021 年度における退学者数 (退学率) 及び休学者数 (休学率) は適当な数値内であったか	AsP2-A (両学科にも同項目を設定)	3	休退学防止の取組みは、大学の教職員と学生が触れ合い意見を聞き取る機会を増やすことを目的として、学生カルテシステムを利用した学生支援のワンストップサービスを構築中である。その要である学生カルテシステムの仕様変更を具申し、対応を待っている段階である。
	(6) 学生生活実態調査の実施状況は適切であったか (サンプル数等)。また、分析結果を改善に繋がったか	AsP2-A	4	学生意識調査は、学生動向調査・学生行動調査・学生意識調査・学修意識調査・教育施設利用に跨る設問を作り、2021 年 7 月より実施したが、回答者は想定した人数に届かなかったため、別の方法での実施を模索しているが、その結果は学生支援委員会で分析後に公表している。
入試広報部				
	(1) 2022 年度入学者選抜試験の運営は適切且つ遺漏ないものであったか	委員会規程 2-1-1	5	全ての試験において問題なく運営することができた。
	(2) 2022 年度入学者選抜実施要項及び募集要項の作成は適切且つ遺漏ないものであったか	委員会規程 2-1-2	5	作成作業のみならず、発行時期に関しても予定どおりに実施することができた。
	(3) 広報の方法及び実施 ① 高校訪問の件数・効果は充分であったか	委員会規程 2-1-3	5	コロナ禍にあり以前と比べると回数そのものは減少しているが、可能な限り最大限の訪問回数を数えることができた。
	(3) 広報の方法及び実施 ② 進学説明会の件数・効果は充分であったか	委員会規程 2-1-3	5	説明会の数自体がコロナ禍にあって以前と比較すると減少しているが、他部署の協力を得て、可能な限り十分な回数を確保することができた。
	(3) 広報の方法及び実施 ③ オープンキャンパス (学校見学会) の参加者数は充分であったか。また、参加者が入試に出願する等の効果は充分であったか	委員会規程 2-1-3	5	感染拡大防止の観点から、参加人数を限定した学校見学会を実施した。参加者の多くが入学につながっていることから、コロナ禍以前と同様の効果があったと考える。
	(6) 2021 年度入学者における AP が求める学修成果の状況は適切であり、入学者選抜方法は妥当であったか	AsP1-1・1-2	5	教学 IR 委員会の尽力により分析が行われ、本委員会でも妥当性が高いとの見解に至っている。
	(7) 2022 年度入学者数は適当であったか【第 2 回評価項目】	任意設定項目	4	入学定員を満たすことができなかったが、早期入学者数は 99 名であり、これは入学定員到達時の数に匹敵するものであった。
法人宗教部				
	(1) チャペル・アワー、及びその他宗教関連行事の件数・効果は充分であったか	委員会規程 2-1-1	5	チャペル・アワー及びその他宗教関連行事は、前年度に作成され、大学協議会で承認された年間行事予定に基づいて、計画的に実施されている。今年度はコロナ禍に見舞われたが、現在のところ全て予定通りに実施されている。また春学期末時点でのキリスト教履修生のチャペル・アワー出席率は春 83.9%で、数値目標 (75%以上) をクリアしており、

(2) 正課内のキリスト教教育、並びに学生の宗教生活指導の件数・効果は充分であったか	委員会規程 2-1-2	5	効果は充分であったと考えられる。 本学のカリキュラムには「キリスト教 I・II」が必修科目として設置されており、シラバスに公表されている授業計画に基づいて実施されている。春学期はすべて計画通りに実施され、また春学期のキリスト教 I 履修生の単位取得率は 95.0% で、正課内のキリスト教教育、並びに学生の宗教生活指導の件数・効果は充分であったと考えられる。
国際交流センター			
(1) 外国の大学等との交流事業、及び国際交流協定の（新規）締結の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-1	5	春と秋にオンラインで KOREA プログラムを実施した。プログラムの構成を「交流プロジェクト」、「日本語」、「教養」とし、春秋 2 回の実施で韓国からの延べ 29 名が参加した。コロナ禍でも良好な事業ができた。また新たに 8 大学（韓国 5、アメリカ 1、中国 2）と協定を締結した。このうち韓国の済州大学校とは二重学位で交換留学を可能とした。
(2) 協定に基づく派遣・受入れ ① 本学学生の留学派遣の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2	5	コロナ禍下の派遣を実施した。8 月から派遣した韓国の学生からは、語学力、コミュニケーション力の向上が報告されており留学の効果が表れているといえる。なお、欧米への派遣が半年に短縮され、中国・台湾への派遣ができなかった。
(2) 協定に基づく派遣・受入れ ② 外国人留学生の本学への受入れの件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2	5	春は協定校向けにサービス授業を実施し、秋は JASIN7 名、NICS11 名をオンライン授業で受け入れた。2021 秋学期終了までに渡日できる見込みはない。出席率が徐々にさかかっていく傾向はあるが授業は問題なく実施できた。コミュニケーションや異文化理解はカンパセーションパートナーなどオンライン授業以外の場で提供した。
(3) 協定に基づく本学研究者の派遣、及び外国人研究者の受入れの件数・効果は充分であったか	センター規程 3-3	2	2021 年度はコロナによる入国制限のため行き来がなかった。
(4) 外国人留学生に対する日本語及び日本文化等の教育は適切であったか	センター規程 3-4	5	日本語は指導が行き渡るようオンラインでもレベルごとに実施した。日本文化等は限られた選択肢の中でできるだけ幅広い分野を履修できるよう科目を組み立てた。
(5) 外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導助言の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-5	5	修学上、生活上ともに日々助言をしたり、注意を促したりすることで大きなことには発展せずに済んでいる。
(6) 外国人学生短期留学プログラムの参加者数は充分であったか。また、参加者の学修効果は充分であったか	センター規程 3-6	4	春はプログラムを中止し、秋はオンラインで実施した。秋のオンラインでは学習の効果はあったといえるがコミュニケーションや異文化理解の感覚を養うのは難しかった。
教育研究メディアセンター (ライブラリー部門)			
(1) 教育研究及び学習に必要なライブラリー資料の収集、整理、保存は適切かつ遺漏ないものであったか	センター規程 3-1-1	5	シラバス掲載の参考文献、教員からの推薦図書、学生からのリクエスト図書は、入手可能なものは全て受入れており、かつ本学の教育内容に沿って新刊本及び利用の多い分野の既刊本も予算の範囲内で受入れている。所蔵資料の遡及、書架の整備も進めており、本年度のライブラリー資料の収集、整理、保存は適切かつ遺漏ないものであったといえる。
(2) 教職員及び学生に対するライブラリー資料の閲覧・貸出並びに学術情報の提供の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-1-2	5	教職員及び学生に対するライブラリー資料の閲覧・貸出について、学生への貸出冊数は前年度比 105% で増加している。新型コロナウイルス感染拡大防止のための遠隔授業実施や来館予約制による影響は、教職員への貸出数の減少に現れている。遠隔授業時にも利用できる電子ブック・電子ジャーナル・データベース等の導入についての提案は却下されたため、現状で対応できる限りの学術情報の提供は行ったといえる。
(3) 教育研究及び学習に必要な学術情報の収集件数・効果は充分であったか。またその管理は適切であったか	センター規程 3-1-3	5	教育研究及び学習に必要な学術情報の収集件数・効果は充分であり適切であったといえる。
(4) 学外諸機関及び図書館間の情報・資料の交換並びに相互利用の支援の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-1-4	5	学外諸機関及び図書館間の情報・資料の交換並びに相互利用の支援の件数・効果は充分であったといえる。貸借・複写提供ともに本学からの依頼よりも、本学の受付数が増加しており、北海道から沖縄まで全国の国立大学等からの貸借・複写受付件数の増加が顕著である。
(5) 本学教員の長崎外大論叢の刊行に関する支援は適切かつ遺漏ないものであったか	センター規程 3-1-5	5	本学教員等への長崎外大論叢の刊行に関する支援は、適切かつ遺漏ないものであったといえる。
(情報・視聴覚部門)			
(1) GAIN の管理・運用は適切かつ遺漏ないものであったか	センター規程 3-2-1	5	利用者数が増えるお昼休み等は、回線が混み合い、一時的に速度低下が発生することがあったが、今年度の無線 LAN 増強工事により、改善される見込みである。
(2) コンピュータ等を利用した情報処理教育の支援の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2-2	5	PC の老朽化に伴い、M202 教室の学生用 PC と、一般教室に設置している教育用 PC を更新した。また、学生の学習サポートとして、個人が所有している PC やスマートフォンが快適にインターネットに接続できるよう、学内 Wi-Fi の機器更新及び回線速度増強も行った。
(3) マルチメディア装置を利用した視聴覚教育の支援の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2-3	5	装置等の使用方法を説明したほか、装置に不具合があった場合は職員が対応できるものは早急に対応し、職員対応不可の際は速やかに業者に依頼するなど、極力授業に支障が出ないように支援した。
(4) 教育研究のための情報・資料に関するデータベースの構築と管理・運用は適切であったか	センター規程 3-2-4	3	教育研究に関するデータの管理・運用は、全て担当教職員に一任しているため、ICT 教育支援室では管理はしていないが、そのデータを保存するためのファイルサーバやバックアップ等は管理しており、これに関するトラブルは発生しなかった。今後はセキュリティポリシー制定に伴い、セキュリティ面に考慮したファイルサーバの利用を検討している。
(5) 教育研究のためのマルチメディア装置の利用に関する調査・研究を行い、改善に繋がったか。またこれら装置の導入・運営は適切であったか	センター規程 3-2-5	1	現状では利用に関する調査・研究は行っていない。
(6) コンピュータ処理等、メディアセンター全般の利用に関する指導、相談、研修会、講習会の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2-6	4	学生への指導に関しては、入学時に本学 PC の使い方、メールの使い方を指導しており、窓口相談に来た学生に対しては適宜対応している。今後は教職員・学生に対する情報セキュリティ対策に関する講習会を随時行う予定である。
(7) マルチメディア教室及び教育機器、設備の保守・管理は適切であったか	センター規程 3-2-7	5	機器に不具合があった場合、職員が対応できるものは早急に対応し、職員対応不可の際は速やかに保守業者に依頼し極力授業に支障が出ないように対応した。
(8) 本学の事務部門の情報化・OA 化の推進・支援は適切であったか	センター規程 3-2-8	3	ペーパーレス化の第一歩としてタブレットを準備し、対面会議で使用する資料等をタブレットで閲覧した。しかし、資料の属性（回収資料か否か）や、会議のオンライン化が増えたことにより、タブレットの利用頻度は想定したより少なかった。
キャリアセンター			
(1) キャリア形成支援のための正課内外の教育の運営及び手法は適切であったか。また授業の効果は充分であったか	センター規程 3-1	5	各年次に応じた正課授業を実施している。インターンシップ科目の履修や各就職・企業イベントの参加を促し、業種・職種への理解を深めさせた。授業の効果は充分であったと考えられる。
(2) 進路・就職決定に向けた学生支援の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2	5	日常的にキャリアカウンセラーが就職・進路に関する相談・支援を本年度 4～12 月まで約 500 件の就職相談を実施しており効果を挙げている。
(3) 進路・就職に係る渉外・広報等の件数・回数・効果は充分	センター規程 3-3	2	就職・進路に渉外、広報は充分行われていない。

であったか			
(4) インターンシッププログラムの派遣人数・効果は充分であったか	センター規程 3-4	5	本年度は学内開拓企業 23 社、長崎インターンシップ推進協議会 16 社へ延べ 82 名の派遣を行ない、業種・職種理解を深めることができた。また、インターンシップ派遣をきっかけに内定獲得に繋がった。
(5) キャリア形成及び進路・就職に係るデータ収集、及び分析を行い、改善に繋がったか	センター規程 3-5	3	3 年生に卒業後の進路アンケートを実施し、志望業種・職種への就活支援、及び求人票の案内を行なっている。
(6) 2021 年度卒業生の就職率及び就職先（専門領域への就職率）は適当であったか【第 2 回評価項目】	AsP3-A	3	就職率 2020 年度 92.5%、2021 年度 95.5%。専門領域就職率 2020 年度 40.1%、2021 年度 19.5% 前年度比▲20.6%。主な減少要因としては、専門領域においてネパール人留学生の日本国内就職者が前年度比▲17 名と大幅な減少。また、業種別においても、宿泊業就職者数が前年度比▲16 名と大幅な減少等がある。以上により、専門領域への就職率ダウンは適当とは言えないが、社会状況に鑑み、やむを得ないと判断する。
(7) 卒業生及び卒業生就職先からの情報収集を行い、教育改善に生かしているか	AsP3-A	3	卒業生、企業アンケートを行い情報収集し、今後のキャリア関連授業やキャリアセンター主体のセミナーの実施に活かしている。
社会連携センター			
(1) 本学の人的資源、知的財産等を活用した様々な社会的ニーズに対応する事業の件数・効果は充分であったか	センター規程 4-1-1	5	新型コロナ感染拡大の影響で短期留学生が来日できず、例年実施している交流事業や講師派遣事業も中止となる等、件数は伸び悩んだが、本学教員による講演講師、本学学生による小・中・高生対象の講話の通訳の他、翻訳も行った。
(2) 社会をフィールドとする本学の教育・研究プログラムに関する事業の件数・効果は充分であったか	センター規程 4-1-2	4	新型コロナ感染拡大の影響で語学セミナーはオンライン開催としたが開講人数に満たず開講できなかったが、公開講座は予定していた 3 回全て実施した。公開講座の講師も韓国語専修、フランス語専修の教員の他、本学教員と学生が SGD の達成に向けた取組みについての発表も行った。
(3) 自治体、産業界、地域コミュニティ等、社会との人的交流に係る事業の件数・効果は充分であったか	センター規程 4-1-3	4	新型コロナ感染拡大の影響で、例年行っている交流事業の殆どが実施できなかったが、自治体から「小学生が英語に翻訳した紹介データを留学生に見てもらい感想がほしい」という依頼に対し、感想に加えて自国紹介の動画を撮影しオンデマンド配信する等の工夫を凝らして行った。
(4) 学生の外部語学力テストの実施状況は適切であったか。	任意設定項目	5	年間の語学検定試験の受験計画が立て易いように各言語（英・独・仏・中・韓・日）の語学検定試験と学内模試（TOEIC L&R IP テスト）の試験日や申込方法・締切日等を一覧に纏めた「語学検定試験情報」を年度はじめに学生全員へ配布しホームページの「在学生の方へ」のページにも掲載した。学内模試については、春学期（主に 2・4 年生対象）と秋学期（主に 1・3 年生対象）の 5・6 限目に試験日を設定し実施したが授業との重複、就職活動等で受験ができない学生に対しては「受験時期変更」を認める等、柔軟に対応した。学内模試の受検率平均が 62.7%であったことから試験日や学内模試として適切な試験であるのか、試験結果をどのように教育に活用するか結果分析や検証が必要である。
教職センター			
(1) 教育職員免許法施行規則第 22 条の 8 に基づく教職課程の自己点検・評価を行い、自己点検・評価報告書を外部に公表したか	任意項目	3	教職の 4 つの基準領域に関して自己点検・評価を行うことを決定し、その結果を「教職課程自己点検評価報告書」として纏めることとしている。完成後は、「教員養成の状況についての情報公表」の一環として大学 HP 等に公表する。
(2) 日本語教員養成プログラムの運営は適切であったか【第 2 回評価項目】	センター規程 3-11	4	シラバスに基づき授業を行い、授業アンケートなどの情報を生かし、きめ細かく学生指導を行うことができ、日本語教員の養成は成功している。ただ、学習成果と就職活動の有機的結びつきに関してはさらなる研究が必要であろう。
(3) 2021 年度の日本語教員基礎資格取得者数及び日本簿教員としての就職者数は適当であったか【第 2 回評価項目】	AsP3-A	3	2021 年度の日本語教員基礎資格取得者数は 6 名で、また、日本語教員養成課程の履修者数は各学年 30 名であった。目標はほぼ達成している、と言えよう。しかしながら、日本語教員関係への就職の目標人数は達成できていない（3 月 31 日現在 0 名）。
新長崎学研究センター			
(1) 建学の精神を礎としたプロテスタントキリスト教全人教育のあり方に関する研究を推進したか	センター規程 3-1	4	長崎発のプロテスタント布教の初期歴史資料を収集するとともに、本学の創設者青山武雄学長および松本汎元理事長寄贈の長崎プロテスタント資料のアーカイブを整備した。青山武雄年譜およびその解説とフルベッキ研究について『新長崎学研究センター紀要』（3 月刊行）に掲載した。研究のさらなる推進については大学協議会、研究推進委員会および研究支援課との連携が必要である。
(2) 外国語、母語（主として日本語）を含む言語教育に関する研究を推進したか	センター規程 3-2	5	研究集会の第 1 回では「長崎外大における多言語性・複言語性」をテーマとして現代英語学科、国際コミュニケーション学科（ドイツ語専修、中国語専修）の教員による発表、第 3 回では「長崎で日本語を教えるということ」と題して国際コミュニケーション学科日本語専修の教員による発表を行った。
(3) 長崎発の平和学及び平和教育に関する研究を推進したか	センター規程 3-3	2	上記 (2) の研究集会や下記 (4) の研究叢書の刊行により国際平和の基礎となる長崎における異文化共生の歴史を掘り起こすことはできたが、平和学及び平和教育に関する研究には取り組めなかった。
(4) グローバル人材輩出の土台を成す国際教養学とその関連分野に関する研究を推進したか	センター規程 3-4	4	長崎発の英語教育の発生および語学教授法を検証した新長崎学研究叢書第 2 巻『外国語教授法のフリンティア』（長崎外国語大学・長崎文献社・2021.3.31）を公表した。また本学の個性的な教授法に関する研究集会を実施し、これを通じて本学における国際教養学についてグローバルな「新長崎学」研究との関連を深めることができた。
(5) 「人間の安全保障」に基づく国際協力学に関する研究を推進したか	センター規程 3-5	3	SDGS に取り組む本学の試みを新聞に公表し、また JICA の OB と交流するなど、国際協力に関する研究のシーズへの取り組みはあったが、研究員の研究成果として十分に推進できなかった。
学修支援センター			
(1) 学修支援窓口の運営は適切であったか	センター規程 3-1	5	一年間で約 400 名の利用希望者に対応した。その大半は対面指導であったが、コロナ禍のため入構制限が行われた際はメール等のオンライン指導も柔軟に取り入れ併用した。帰省やインターンシップ・ボランティア活動により県外にいる学生に対しては zoom 等を使用した双方向型オンライン指導を取り入れ、大変好評を得た。各種制限がある中だからこそ学生のニーズに合わせた指導スタイルを模索し、構築することができた。
(2) 学修指導の件数・効果は充分であったか	センター規程 3-2	5	毎月 30～50 名ほどの学生の利用があった。本年は留学生も英語学習目的で来室するようになり、多様な学生の学習拠点として役割を果たした。アドバイザーや関係部署との連携を年々強化できており、自主的な来室だけでなく要注意学生の情報を共有し学修支援センターからも声かけができるようになった。その結果、授業の出席や課題提出状況の改善や、学生の抱える問題の早期発見にも繋がった。
(3) 学修時間・学修の成果等に関する情報の収集・分析を行い、	センター規程 3-4	5	特に履修に問題がある学生の単位取得情報を分析し、アドバイザーと学

改善に繋がったか			習状況の確認・学習計画の指導を行った。学生の出欠や学習状況を確認するためにも定期的に面談を行い、継続した指導を実施した。その結果、卒業延期の可能性が高かった学生や無計画に単位を履修していた学生をピックアップすることができ、該当学生の単位取得状況も大きく改善した。コロナ禍により学習のリズムが整いづらいとの学生の声に応え、学習時間表を作成した。目標達成のため長期的な学習計画を立て、定期的に成果を確認した。これらの指導により、独学ではモチベーションが上がりづらかった学生も新たな目標を定めて本学での学びを継続することができた。
(5) 学生の主体的・能動的な学びを推進するための新しい教育システムの開発を行ったか	センター規程 3-5	5	学修支援センターに来室した学生のニーズに応え、授業外学習を充実させるための語学検定対策を行った。結果として英検準1級～2級、TOEIC500以上取得する学生を多数輩出した。英検・TOEIC等各種検定の受験を積極的に推進し、自身で主体的・能動的な学習が継続できるよう、学習計画を含めた指導システムを構築した。このような発展的学習の指導は学修支援センターの柱の一つとして定着した。加えて学生の抱える学習問題の分析を行うため、学長裁量経費に応募を行った。申請が採択され、現在調査実施のための準備を行っている。本学の学生の抱える学修に関連する問題を可視化することで、主体的、能動的学びを推進できるような仕組みづくりに繋げることができると考えている。
現代英語学科			
(1) 成績不振（出席状況不良を含む）の学生に対する指導状況について、その件数は適当な数値内であったか。また指導の効果は充分であったか	AsP2-A	3	科目毎の成績不良学生の指導は、科目担当者と学生生活アドバイザーによって行われており、教育支援委員会または学生支援委員会の監督下にある。そこで学科会議を適宜開いて学生の成績不良などの情報を交換し、効果の出る対応を開始した。
(2) 2021年度における退学者数（退学率）及び休学者数（休学率）は適当な数値内であったか	AsP2-A	3	退学・除籍の学生の目標値は両学科で合算され、各学科に配分はない。2022年5月1日付の退学者は42名（うち現代英語学科23名）であり、学部としての目標（30名以内）は達成できていない。修学意欲の低下と進路変更、経済的事由が主な理由である。現代英語学科の2021年度休学者累計は26名で、主な理由は健康上の事由と経済的事由である。本学科としては修学意欲低下による退学者の未然防止を重要施策と位置付け、学生支援委員会と協働して学生指導を行っている。
(3) 学科学生の単位取得状況・GPA・GPT・成績分布の状況に鑑みて、学位プログラムの機能性は適切であったか	AsP2-B	3	JIHEEの認証を受け、学位プログラムの整備は適切であると結論付けられたので、一旦終了する。次は本学のブランドとして、英語学習者のTOEIC L&Rスコアの向上に取り組む。
(4) 学科の各科目の開講状況（履修者数等）・単位取得状況は適切であったか	AsP2-B	3	現代英語学科の収容定員充足率は125.0%で、昨年よりも2.4%上昇しているが、1年次はコロナ禍の影響を受け96.5%である。初年次教育及び語学科目のクラスについては正常な開講状況であり、その他講義の履修登録者数も適切であると推察する。単位の履修状況は、1年間の標準履修単位数31単位を超えて履修した学生が、1年次83.9%、2年次85.9%、3年次79.2%であり、最終学年において負担のない履修である20単位までの履修ができているのが75.3%である。適切であったと判断する。
(5) 2021年度卒業生の卒業時における語学力テストの到達度は適切であったか（数値目標：卒業生におけるCEFR B2レベル到達率10%以上）【第2回評価項目】	AsP2-B・3-B 中期計画A-4-2	3	2020年度より2021年度までに受験したTOEIC L&Rで測定すると、TOEIC L&Rのスコアが600を超えたものが受験者ベースで20.3%、在籍者ベースで11.4%と、目標をクリアしている。英検は追跡できていないので、学科にて集計の方法を再考する。
(6) Assessorにより計測した学科学生のDP到達度は適当であったか	AsP2-B・3-B	3	学生のDP達成度の指導と管理は教育支援委員会の監督下にある。そのため本学科は新しく整備された学科会議の中でアドバイザー教員から学生のDP達成状況の報告を受ける必要がある。
国際コミュニケーション学科			
(1) 成績不振（出席状況不良を含む）の学生に対する指導状況について、その件数は適当な数値内であったか。また指導の効果は充分であったか	AsP2-A	4	アドバイザーによる指導は十分に行われており、回数という観点からすると充実していると言える。あわせて、指導の効果も十分に出ていると思われる。
(2) 2021年度における退学者数（退学率）及び休学者数（休学率）は適当な数値内であったか	AsP2-A	3	経済的問題による退学者が増えている。また、進路変更による退学者も出ている点については、入学者の満足度を充足できていないことに一部起因していると思われる。
(3) 学科学生の単位取得状況・GPA・GPT・成績分布の状況に鑑みて、学位プログラムの機能性は適切であったか	AsP2-B	4	いずれの数値もよい傾向を示していることから、機能性は十分に担保できていると思われる。
(4) 学科の各科目の開講状況（履修者数等）・単位取得状況は適切であったか	AsP2-B	4	開講状況については概ね適切であると思われるが、一部科目に履修者数が偏る傾向にあることからこれを平準化する努力が必要であると思われる。単位取得状況については特に問題はないと考える。
(5) 2021年度卒業生の卒業時における語学力テストの到達度は適切であったか（数値目標：卒業生におけるCEFR B1レベル到達率15%以上）【第2回評価項目】	AsP2-B・3-B 中期計画A-4-2	4	特に韓国語の検定取得率が高く、全体の数値を押し上げてくれているが、それ以外の言語の取得率を上げていくことが求められる。
(6) Assessorにより計測した学科学生のDP到達度は適当であったか	AsP2-B・3-B	4	あくまでの学生の自己分析であるものの、一定数の数値に至っていると思われる。ただ、学生自身のDPそのものの理解度をさらに高めることで、より精度の高い結果を得ることができるのではないかとと思われる。

以上

I おわりに

1. 本報告書から見える課題

以上、本文において「ビジョン2030」及び「中期計画(2021-2025)」に基づく事業年度の初年度に当たる2021(令和3)年度の事業進捗状況・達成度を概観した。当該年度事業計画ベースの点検評価(シート①)においては5段階評価による「達成状況」が「1」(未着手)または「2」(検討中)に終わった項目が散見され、事業計画及び中期計画全体の進捗管理に課題が残った感は否めない。これらの事業項目については既に大学協議会で改善方を策定の上一部実施済みであり、その結果は2021(令和3)年度事業報告にも反映されているが、改善未対応項目については大学協議会にて引き続き改善に向けた対応協議を実施していくこととしたい。

一方、ルーティンワークベースの点検評価(シート②)にあつては、一部コロナ禍の影響で遅滞した事業があったものの、全体的に各部署における取組みは満足できるものであったと考える。

これらの前提を踏まえたうえで、2022(令和4)年度以降に向けて重点的に改善に取り組むべき課題として自己点検・評価委員会では以下の課題に着目した。

課題1：中期計画の推進に向けた入学定員の確保(シート②入試広報部(7))

本年度入試広報活動の最終結果となる2022(令和4)年5月1日時点の当該年度1年次入学者数は定員170名に対して142名(入学定員充足率83.5%)に止まった(「シート①」の「戦略1」の記載は第3四半期までの評価(2022年度入学者数最終確定前の段階)であるため、上記最終結果は反映されていない)。これに伴い、同日時点の学生数は700名となり、当該年度5月1日ベースでは2016(平成28)年度以来6年ぶりに収容定員未充足となっている。

2020(令和2)年度以来のコロナ禍による海外からの入学者の減少が響いたものと考えられるが、「中期計画(2021-2025)」において基軸AのKGIに「2026年度入学試験における一般型選抜競争倍率3.0倍以上」、基軸DのKGIに「2025年度までに入学定員185名に規模拡大」を掲げ、今後5年のうちに量的拡大を企図しているなか、2021(令和3)年度に続き2年連続の入学定員未充足となった事態は、学院の中長期施策の推進に多大な支障を与えることとなりかねず、本書が敢えて指摘するまでもなく、教職員一同、事態の深刻さを重く受け止めている。

既に本書を執筆している2022(令和4)年5月時点において、これらの危機感は等しく学内にも共有されており、大学協議会等において、法人と大学が一体となった入試広報施策の推進に向けた検討が開始されている状況である。

課題2：外国語大学としてのブランド確立に向けた学生の英語力の向上(シート①戦略4ほか)

本学では中長期計画「長崎外大ビジョン21(204-2020)」の該当期間中から、継続して学生のTOEIC受検率・取得スコアに係る数値目標を設定し、外国語大学としてのブランド確立に向けた向上施策に取り組んできた。しかし、本文にも明らかな通り、2021(令和3)年度においても所定の数値目標を達成するには至らず、過去3か年度で比較してみても改善の傾向は看取されない。

●付表5：過去3年間のTOEIC受検率及び現代英語学科3年次学生平均スコア等

	目標	2019年度		2020年度		2021年度	
		実績	目標比	実績	目標比	実績	目標比
受検率	80.0%	73.5%	△6.5%	69.3%	△10.7%	53.0%	△27.0%
平均スコア(3年次)	650	494.7	△155.3	478.6	△171.4	464.5	△185.5

本課題は、ひとりブランド確立に支障を来すのみならず、学修動機付けや自己肯定感の不足による休・退学者の増加、英語教員免許取得者・教員就職者数や、これ以外の学部学生の就職・進学実績等、多方面に影響を与えることが危惧される。また外大ブランドの確立に向けて、ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語等、所謂「初修外国語」における語学能力伸長度評価の結果とも対比させつつ、現代英語学科のみならず外国語学部全体で取り組むべきであると思料される。

課題3：教員の人事考課(人事評価)制度の導入(シート①戦略20)

教員の人事考課制度の導入については、2019(平成31/令和元)年度の学院事業計画において「2021年度のシステム導入を目指して教職員の意見を広聴しつつシステム研究と基盤整備を行う」旨が初めて謳われ、以降、2020(令和2)年度、2021(令和3)年度の事業計画にも継続して制度導入に向けた検討が戦略として盛り込まれていたが、シート①の該当部分にもある通り、本年度においても具体的な検討の開始は遅滞し、第3四半期まで未着手の状況であった。本年度第4四半期によりやく担当部署の大学協議会において素案の作成がなされたものの、本書執筆時点において、その後の検討が進捗しているとは言い難い。

教育の質保証の更なる推進に向けて、学生の学修を最前線でサポートする教育職員の勤務態様の把握とたるべき評価の実施、及び評価結果の処遇への反映が必要不可欠であることはここで敢えて

論ずるまでもないものと思う。前2項にて挙げた課題に対しても、本施策の推進が長期的にはその解決の一助となる蓋然性は高いものと考えられ、2022（令和4）年度中の教員人事考課の試行実施に向けた取組みの進展を切に希求する次第である。

2. 課題の解決に向けて

自己点検・評価委員会より報告された上記の課題に対して、本学「内部質保証に関する規程」に規定する通り、内部質保証推進協議会においてその改善方案を以下の通り策定のうえ、学長に報告した。

「課題1：中期計画の推進に向けた入学定員の確保」の改善方案

2023（令和5）年度入学者選抜における入学定員確保は是が非でも達成しなければならない目標であり、法人・大学が一体となって教職協働のもと入試広報体制の強化を図っていく必要がある。具体的には以下3点の取組みを推進していく。

- 1) 本学の特色である異文化多様性をもたらす存在である外国人留学生の獲得を最重要施策と位置付け、本邦内、特に長崎県内の留学生教育機関に係る情報収集を図り、当該機関等との連携による新規獲得を模索する（将来的なグローバル高大連携プログラムの活性化施策の検討を含む）
- 2) コロナ禍の収束を見込んで今後期待される海外からの入学者の増加を重要な契機と捉え、国際交流協定締結校をはじめとする海外教育機関に対する働きかけを強化する
- 3) 既往施策である、九州内を中心とした高校への訪問、学校説明会への出展等の機会増強を図るため、必要に応じて担当部署以外の教職員（アドミッション・オフィサー等）の動員を行う

「課題2：外国語大学としてのブランド確立に向けた学生の英語力の向上」の改善方案

本課題の解決に向けては、今後教育支援部（教育支援委員会）において以下の施策の実施に係る検討を行うべきである。

- 1) TOEIC IP の在り方の改善の検討（受検者数の増加、及びカリキュラムとのより緊密な連動を目的として、授業内でのTOEIC IPの実施を検討する）
- 2) 入学者に対して行っている英語プレースメントテストの見直し
- 3) 英語の語学検定の受検対策のための科目（「EPT Credits」）の増強
- 4) 英語 CORE 科目から英語 ACE 科目への移行の円滑化、そのための各クラスにおける授業内容の精査
- 5) 個別の学生の入学後から卒業時までの語学力伸長度を測定できるデータ収集・管理体制の構築とこれに基づく語学力伸長度の数値目標の設定
- 6) 初修外国語（ドイツ語・フランス語・中国語・韓国語）の語学力評価と連動させた包括的対策の策定と実施
- 7) 英語科目担当教員間の緊密な連携（担当教員間の定期的な協議回数を増加させる、等）

以上に係る同委員会の検討結果に基づき、大学協議会において対応方針を正式決定のうえ、現代英語学科教員の積極的な参画を得て早急に着手がなされることを望む。

「課題3：教員の人事考課（人事評価）制度の導入」の改善方案

前掲「課題」にて指摘した通り、本件は数年前から実施が提唱されているにもかかわらず現在に至るまで具体的な動きがない状況である。この閉塞的な現状を打破するため、2022（令和4）年度中の試行実施をまずは大学協議会において機関決定することが必要と考える。そのうえで、本年度策定された制度素案を現実に即したかたちで早急に修正のうえ、試行実施に踏み切り、その結果を受けて不断の改善を図っていくことが必要であろう。その際に留意すべき事項として、教員が人事考課関連業務に忙殺されることの無いよう、客観的なデータに基づく簡易的な手法を用いるべきであり、試行実施、問題点の洗い出し、改善策策定、といったPDCAサイクルを繰り返していく中で制度のブラッシュアップを図ること、またそれが完了しないうちには人事考課結果の処遇への反映には慎重であるべきことを挙げておく。

上記を前提としたうえで、内部質保証推進協議会による制度試案を以下に掲げる。

- 1) 教員評価の目的が「各教員の研鑽に基づく資質の向上である」旨を明確化すること
- 2) そのための教員のミッションの可視化が先決であり、既に策定済の「長崎外国語大学 求める教員像及び教員組織の編制方針」に依拠した評価体系とすべきこと
- 3) 評価体系として「教育」「研究」「学務」「社会貢献」といった基軸を設定したうえ、それぞれの基軸に5項目程度の客観的且つ簡易的な評価項目を設定すること
- 4) 評価手法は既存のアカデミック・ポートフォリオ様式やティーチング・ポートフォリオ様式を活用し、業務の効率化を図ること
- 5) 各教員が項目ごとの年度目標・実績・自己評価等を記入することとし、教員個々人の自己省察

- と PDCA サイクルの循環を企図すること
- 6) 評価項目に用いる客観的な指標についても、既存のアセスメント（一例として各学期授業評価アンケートを基軸「教育」の評価項目に加える等）を最大限活用すること

以 上

付 録

1. 長崎外国語大学 学修成果・教育成果の把握と評価に関する方針（アセスメント・プラン）

2020年9月28日大学協議会
2020年10月14日教授会
2021年1月21日教授会（一部修正）

長崎外国語大学（以下「本学」という。）は、「建学の精神」及び「教育の目的」を実現するために、教学上の「3つの方針」である「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」及び「入学者受入れの方針（AP）」の達成状況、並びに学修成果・教育成果を把握・可視化する。また、それを教育の質保証に向けた改善に活かすために次の方針に基づき、教学上の成果について測定・評価（以下「アセスメント」という。）を行う。

1. アセスメントは、「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」及び「入学者受入れの方針（AP）」の3つの方針について行う。

(1) 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」に関して、以下のアセスメントを行う。

- ア. 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果が、卒業時に学生によってどの程度達成されているのか。
- イ. 社会の大学に対する期待やニーズを踏まえ、「卒業認定・学位授与の方針（DP）」自体が建学の精神、大学の教育目的及び人材育成目標に照らして妥当かどうか。

(2) 「教育課程編成・実施の方針」に関して、以下のアセスメントを行う。

- ア. 教育や学修が「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って適切に進められているか。
- イ. 学年進行に従って「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果・教育成果が達成されているか。
- ウ. 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果を達成するために、教育課程編成・実施方法等は適切かつ有効か。

(3) 「入学者受入れの方針（AP）」に関して、以下のアセスメントを行う。

- ア. 建学の精神・学部学科の教育目的並びに「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」を踏まえ、「入学者受入れの方針（AP）」で受け入れる学生に求めている学修成果（「学力の3要素」を含む。）が新入生においてどの程度達成されているかについてのアセスメントを中心に行う。
- イ. 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」に照らして「入学者受入れの方針（AP）」が妥当であるかどうかを「入学者受入れの方針（AP）」の達成度から検証する。

- 2. アセスメントは、大学全体（機関）のレベル、学部学科（学位プログラム）のレベル、授業科目及授業のレベルの3つのレベルで行う。
- 3. アセスメントは、質保証に向けたPDCAサイクルによる改革・改善プロセスのC（Check）として実施する。また、学修成果の点検・評価の結果は、教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックする。
- 4. アセスメントは、内部質保証推進協議会の基本方針並びに自己点検・評価委員会の実施方針により、自己点検・評価小委員会が点検・評価活動の一環として行う。自己点検・点検・評価活動の体制、手続き等は、「長崎外国語大学 内部質保証に関する規程」の定めるところによる。
- 5. 学修成果・教育成果の把握と評価を実施するに先立って、以下の6項目について点検・評価を行い、必要な改善を行う。

(1) 学位プログラムの「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」において、卒業生が「何ができるようになるのか」が、専門分野に係る能力も含め、適切な観点から「～できる」という記述により定められていること。

(2) カリキュラムマップ・ツリーの作成やナンバリングの実施等により、「卒業認定・学位授与の方針（DP）」に設定された各観点を満たす上で必要な授業科目が過不足なく体系的に編成されていること。

(3) 学生の主体的な学修の前提として、個々の授業科目のシラバスにおいて、到達目標及び「卒業認定・学位授与の方針（DP）」との対応関係、成績評価基準並びに事前・事後学修の内容が学生に対し適切に示されていること。

(4) 成績評価の方針が大学全体で統一され、学位プログラムにおいては各授業科目の授業内容や到達目標に応じた適切な成績評価手法が選択され、これに基づき個々の授業科目において厳格な成績評価が実施されていること。

(5) 教育の成果に対し、学位プログラム共通の考え方や尺度に則った点検・評価が、点検・評価の目的、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについてあらかじめ定められた方針に基づき行われること。

(6) 学生が「卒業認定・学位授与の方針（DP）」そのもの、及びシラバスに示された各科目の到達目標と「卒業認定・学位授与の方針（DP）」との対応関係や、単位制度の趣旨を理解していること。

■具体的なアセスメントの方法（第1版）

学修成果の把握と評価において使用する指標及び具体的な検証方法等は、次の表の通りである。

	入学時・入学後	在学中	卒業時（卒業後）
	●「入学者受入れの方針（AP）」で受け入れる学生に求めている学修成果（「学力の3要素」を含む。）が新入生においてどの程度達成されているかについての検証	●「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って学修が進められているかどうかの検証	●「卒業認定・学位授与の方針（DP）」を満たす人材になったかどうかの検証
大学全体レベル 特に、社会の大学に対する期待やニーズを踏まえ、「卒業認定・学位授与の方針（DP）」が大学の教育目的、人材育成目標に照らして妥当かどうかを学生の志望進路（就職率、専門領域へ就業率及び進学率、等）や「卒業認定・学位授与の方針（DP）」の達成状況から検証します。	1. 学生に求めている学修成果の検証 A. 総合型選抜 ○面接の結果 ○志願理由書、調査書、本人の記載する資料の内容 B. 学校推薦型選抜 ○小論文、面接の成績 ○調査書等の内容 ○資格・検定試験 C. 一般選抜 ○入学試験結果 ○資格・検定試験 D. その他の検証資料 ○英語等の検定・資格の取得状況 ○留学生日本語能力試験証明書 ○英語プレイスメントテストの成績 ○入学前教育プログラムの学修成果	1. 全学的、俯瞰的視点から「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って学修が進められているかどうかの検証 ○成績不振による指導学生数・その割合 ○退学者数・退学率 ○休学者数・休学率 ○全学生の単位修得状況 ○全学生の成績評価（GPA・GPT） ○全学生の成績分布 ○学修行動調査（学生生活実態調査）	○卒業生数・卒業率 ○学位授与数・授与率 ○大学院進学者数・進学率 ○就職状況・就職率 ○専門領域へ就業率 ○資格取得・国家試験合格実績 ○教員・公務員採用状況 ○卒業時満足度調査 ○卒業生アンケート ○就職・採用先アンケート
学位プログラムレベル （学部・学科レベル） 特に、学部・学科の教育課程の有効性（「卒業認定・学位授与の方針（DP）」に照らした教育効果）を学年進行に応じて卒業要件達成状況（単位取得状況・GPA）等から検証します。また外大力（DP2 汎用的能力）の獲得状況を学修成果として査定します。	2. 入学時において学生に求めている学修成果及び入学後の学修状況の検証に基づく入学者選抜方法の妥当性の検証 ○学修成績、成績以外の学修成果、留年・中退率、卒業後の進路等の調査結果とのクロス分析等	1. 教育や学修が「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って適切に進められているかの検証 ○科目の開講状況、履修者数等 ○学生の単位取得状況 ○授業評価アンケートの結果 2. 学年進行に従って「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果・教育成果が達成されているかの検証 【DPの各学修成果の達成度の検証】 ○GPA、GPT ○成績分布等の資料	1. 卒業時において「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果・教育成果が達成されているかの検証 ○GPA、GPT ○学生の自己評価、教員の評価 ○成績分布等 外大プログラム（留学、インターンシップ、ボランティア、卒業研究等）の学修成果 ○外部語学力テスト ○汎用的能力テスト（PROG等） ○資格取得状況

	<p>3.「卒業認定・学位授与の方針(DP)」、 「教育課程編成・実施の方針(CP)」 に照らして「入学者受入れの方針 (AP)」の妥当性の検証</p>	<p>○学生の自己評価、教員の評価 ○DP(学修成果2)5つの汎用的能力 の獲得状況 ○外大プログラム(留学、インターン シップ、ボランティア、卒業研究等) の学修成果 ○外部語学力テスト ○外部汎用的能力テスト(PROG等) ○資格取得状況</p> <p>3.「卒業認定・学位授与の方針(DP)」 で求められている学修成果を達成する ために、教育課程編成・実施方法等は 適切かつ有効かの検証 ○DPの各学修成果の達成度</p>	
<p>授業科目レベル</p> <p>「教育課程編成・実施の方針(CP)」を 踏まえ、個々の授業科目についてシラバ スで提示された授業設計・教授法の妥当 性・有効性を検証します。また、授業等 科目の学修目標に対する評価の妥当性 (客観的かつ厳格な成績評価の検証)と 学修成果の達成状況を査定します。</p>		<p>1. シラバスで提示された授業設計・教 授法の妥当性・有効性の検証 ○DPとの整合性 ○シラバス記載内容 ○ティーチング・ポートフォリオ ○授業評価アンケート</p> <p>2. 授業科目の学修目標に対する評価の 妥当性(客観的かつ厳格な成績評価) の検証 ○科目合格率・科目GPA・当該授業科 目における成績分布を成績評価ガイド ラインに照らして検証</p>	

【凡例】

- : アセスメント…各アセスメントの実施、及びデータ作成を担当する部署、及びその実施時期
- : 点検・評価 …各アセスメントの結果を点検・評価（検証＋問題点抽出＋改善策立案）を担当する部署、及びその実施時期
- : 最終評価 …上記点検・評価の結果、及び改善策の妥当性を検証（自己点検・評価委員会が担当、必要に応じて大学協議会で協議）
- : 改善 …学長の最終判断の後、内部質保証推進協議会を通じて各担当部署に改善指示がなされ改善に取り組む（その実施時期）

- ASM : 「Assessor」による測定・分析の可否
- : 「Assessor」による測定・分析が可能な項目
- △ : 「Assessor」による測定・分析が一部手入力等を経れば可能な項目

【フェーズ1 入学時・入学後】

「入学者受入れの方針（AP）」で受け入れる学生に求めている学修成果（「学力の3要素」を含む。）が新入生においてどの程度達成されているかについての検証

項目	ASM	アセスメント実施者 (データ作成担当)	点検・評価実施者 (改善立案含む)	実施時期															
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
1. 学生に求めている学修成果の検証																			
A.総合型選抜（当年度入試） ○面接の結果		入試広報部	入学委員会	データ作成 (当年度入学者)	点検・評価	最終評価 (自己点検・評価委員会) ↓ 改善 (次々年度入試要項に反映)													
A.総合型選抜 ○志願理由書、調査書、本人の記載する資料の内容	○																		
B 学校推薦型選抜 ○小論文、面接の成績																			
B 学校推薦型選抜 ○調査書等の内容																			
B 学校推薦型選抜 ○資格・検定試験	○																		
C 一般選抜 ○入学試験結果																			
C 一般選抜 ○資格・検定試験	○																		
D その他の検証資料 ○英語等の検定・資格の取得状況	○																		
D その他の検証資料 ○留学生日本語能力試験証明書	○						入試広報部 (国際交流センター)												
D その他の検証資料 ○英語プレイスメントテストの成績	○						教育支援部 (現代英語学科)												
D その他の検証資料 ○入学前教育プログラムの学修成果	○	入試広報部																	
2. 入学時において学生に求めている学修成果及び入学後の学修状況の検証に基づく入学者選抜方法の妥当性の検証																			
○学修成績、成績以外の学修成果、留年・中退率、卒業後の進路等の調査結果とのクロス分析等		入試広報部 学生支援部 キャリアセンター	教学 IR 委員会 ※大学全体レベル	データ作成 (前年度卒業生)	点検・評価	同上													
3. 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」に照らして「入学者受入れの方針（AP）」の妥当性の検証																			
○「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」に照らして「入学者受入れの方針（AP）」の妥当性の検証		入試広報部 教育支援部	教学 IR 委員会 ※大学全体レベル	データ作成 (前年度卒業生)	点検・評価	同上													

【フェーズ2 在学中】

「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って学修が進められているかどうかの検証

《フェーズ2-A 大学全体レベル》

特に、社会の大学に対する期待やニーズを踏まえ、「卒業認定・学位授与の方針（DP）」が大学の教育目的、人材育成目標に照らして妥当かどうかを学生の志望進路（就職率、専門領域へ就業率及び進学率、等）や「卒業認定・学位授与の方針（DP）」の達成状況から検証します。

項目	ASM	アセスメント実施者 (データ作成担当)	点検・評価実施者 (改善立案含む)	実施時期										
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
1. 全学的、俯瞰的視点から「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って学修が進められているかどうかの検証														
○成績不振による指導学生数・その割合		学生支援部	教学 IR 委員会	(前年度及び当年度5月1日) データ作成	点検・評価	最終評価	(当年度秋学期に反映) (次年度に反映) 改善					データ作成(当年度)		
○退学者数・退学率														
○休学者数・休学率														
○全学生の単位修得状況	△													
○全学生の成績評価 (GPA・GPT)	△													
○全学生の成績分布	△													
○学修行動調査 (学生生活実態調査)		学生支援部	教学 IR 委員会	(前年度) データ作成	点検・評価	最終評価	(当年度秋学期) 改善					データ作成(当年度)		
														(当年度春) アセスメント

《フェーズ2-B 学位プログラムレベル（学部・学科レベル）》

特に、学部・学科の教育課程の有効性（「卒業認定・学位授与の方針（DP）」に照らした教育効果）を学年進行に応じて卒業要件達成状況（単位取得状況・GPA）等から検証します。また外大力（DP2 汎用的能力）の獲得状況を学修成果として査定します。

項目	ASM	アセスメント実施者 (データ作成担当)	点検・評価実施者 (改善立案含む)	実施時期											
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1. 教育や学修が「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って適切に進められているかの検証															
○科目の開講状況、履修者数等	○	教育支援部	教育支援委員会						(当年度) データ作成	点検・評価	最終評価	カリキュラムに反映 改善(次年度の)			
○学生の単位取得状況	○														(前年度) データ作成
○授業評価アンケートの結果		教育支援部	教育支援委員会	(前年度) データ作成	アセスメント (当年度春)						アセスメント (当年度秋)	データ作成 改善			
														点検・評価	最終評価
2. 学年進行に従って「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果・教育成果が達成されているかの検証【DPの各学修成果の達成度の検証】															
○GPA、GPT	○	教育支援部	教学 IR 委員会 (現代英語学科) (国際コミュニケーション学科)	(前年度) データ作成	点検・評価	最終評価	(当年度秋学期の施策に反映) (次年度のカリキュラムに反映) 改善					データ作成(当年度)			
○成績分布等の資料	○														
○学生の自己評価、教員の評価	○														
○DP(学修成果2)5つの汎用的能力の獲得状況	○														
○外大プログラム(留学、インターンシップ、ボランティア、卒業研究等)の学修成果	○														
○外部語学力テスト	○														社会連携センター (学修支援センター)
○外部汎用的能力テスト(PROG等)	○														教育支援部
○資格取得状況	○														旅程管理研修機関事務局 キャリアセンター
3. 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果を達成するために、教育課程編成・実施方法等は適切かつ有効かの検証															
○DPの各学修成果の達成度	○	教育支援部	教学 IR 委員会 (現代英語学科) (国際コミュニケーション学科)	同上	同上	同上	同上					同上			

《フェーズ 3-B 学位プログラムレベル（学部・学科レベル）》

特に、学部・学科の教育課程の有効性（「卒業認定・学位授与の方針（DP）」に照らした教育効果）を学年進行に応じて卒業要件達成状況（単位取得状況・GPA）等から検証します。また外大力（DP2：汎用的能力）の獲得状況を学修成果として査定します。

項目	ASM	アセスメント実施者 (データ作成担当)	点検・評価実施者 (改善立案含む)	実施時期											
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
1. 学年進行に従って「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で求められている学修成果・教育成果が達成されているかの検証															
○GPA、GPT	○	教育支援部	教学 IR 委員会 (現代英語学科) (国際コミュニケーション学科)	データ作成 (前年度)	点検・評価	最終評価	改善 (次年度施策に反映)								
○学生の自己評価、教員の評価	○	教育支援部													
○成績分布等外大プログラム（留学、インターンシップ、ボランティア、卒業研究等）の学修成果	○	教育支援部													
○外部語学力テスト	○	社会連携センター (学修支援センター)													
○汎用的能力テスト（PROG 等）	○	教育支援部 (→キャリアセンター?)													
○資格取得状況	○	旅程管理研修機関事務局 キャリアセンター													

2. 2021（令和3）年度アセスメント・プラン実施報告

「長崎外国語大学 学修成果・教育成果の把握と評価に関する方針（アセスメント・プラン）」（以下、「アセスメント・プラン」という。）は、既存のアセスメント・ポリシーを発展解消したかたちで2020（令和2）年度に制定された。アセスメント・プランは、「内部質保証に関する基本方針」が規定する教育の内部質保証の3つの階層、即ち「機関（大学）レベル」「学位プログラム（学部・学科）レベル」「個々の授業レベル」における点検・評価の手法を規定したものであり、各アセスメント項目別に「実施者（データ作成担当）」、「点検・評価実施者（改善案策定者）」、「その実施時期」を規定しているところ、上記1. に所掲のとおりである。

アセスメント・プランに基づき、2021（令和3）年度には、2020（令和2）年度の各種データに対する検証分析と改善策の策定を行い、同年11月の大学機関別認証評価の受審対応のために当初予定からは遅延したものの、本「2021年度報告書」の完成とほぼ時を同じくして分析が完了した。分析に用いたデータの多くが2020（令和2）年度のものである点については注意を要するが、その分析結果をここに添付する。

実施報告は、アセスメント・プラン付表のアセスメント項目別に付した通番の順に当該分析結果を掲載し、これに係る分析担当部署の「分析結果の概要」「分析結果から見える問題点」「問題点に対する改善方案」を記載している。

なお、アセスメント・プランにおいては最終分析結果の確認は自己点検・評価委員会が行うこととなっているが、2021（令和3）年度は当該委員会が上記大学機関別認証評価の対応に多くの時間を費やしたために、分析結果のうち一部を当該委員会の上位機関である大学協議会及び内部質保証推進協議会において確認した。これ以外にも2021（令和3）年度はアセスメント・プランに基づく分析の実施初年度であり、実際に分析に着手したことによって規定と運用の齟齬や、既存制度との整合性不備等が散見された部分もある。この問題について自己点検・評価委員会、内部質保証推進協議会及び大学協議会において検討し、2022（令和4）年度上半期のうちにアセスメント・プランの改定作業に着手することとしたい。

【フェーズ1 入学時・入学後】進捗状況表

項目	ASM	アセスメント実施者	点検・評価実施者	最終評価実施日 ・実施機関	
		(データ作成担当)	(改善立案含む)		
1. 学生に求めている学修成果の検証					
A総合型選抜（当年度入試） ○面接の結果		入試広報部	入学委員会	11/24自己点検・ 評価委員会 【1-1-1】	
A総合型選抜 ○志願理由書、調査書、本人の記載する資料の内容	○				
B学校推薦型選抜 ○小論文、面接の成績					
B学校推薦型選抜 ○調査書等の内容					
B学校推薦型選抜 ○資格・検定試験	○				
C一般選抜 ○入学試験結果					
C一般選抜 ○資格・検定試験	○				
Dその他の検証資料 ○英語等の検定・資格の取得状況	○				
Dその他の検証資料 ○留学生日本語能力試験証明書	○				入試広報部 (国際交流センター)
Dその他の検証資料 ○英語プレイスメントテストの成績	○				教育支援部 (現代英語学科)
Dその他の検証資料 ○入学前教育プログラムの学修成果		入試広報部	2021年度入学者を 2022年度以降分析 【1-1-3(2021欠)】		

2. 入学時において学生に求めている学修成果及び入学後の学修状況の検証に基づく入学者選抜方法の妥当性の検証				
○学修成績、成績以外の学修成果、留年・中退率、卒業後の進路等の調査結果とのクロス分析等		入試広報部 学生支援部 キャリアセンター	教学IR委員会 ※大学全体レベル	5/24大学協議会 【1-2-1】
				11/24自己点検・ 評価委員会 【1-2-2】
3. 「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」に照らして「入学者受入れの方針（AP）」の妥当性の検証				
○「卒業認定・学位授与の方針（DP）」、「教育課程編成・実施の方針（CP）」に照らして「入学者受入れの方針（AP）」の妥当性の検証		入試広報部 教育支援部	教学IR委員会 ※大学全体レベル	11/24自己点検・ 評価委員会 【1-3】

【1-1-1】2021年度 入学者選抜に係る分析

アセスメント結果の概要
【入学者選抜結果につき外部非公表】
アセスメント結果から見える問題点
アセスメント・プランの定義に基づき、入学者選抜の全ての段階において、入学試験におけるAP到達度の測定を行っている。 今年度のアセスメントは、アセスメント結果に基づく教育改善の提言を結論として導き出すために入学者選抜に係る結果分析の指標設定、認識共有を行えたものと考えており、以下にその案を示す。
問題点に対する改善方策
1) 英語等の資格検定の取得状況について、2021年度以降を画期として資格取得者とそれ以外の区分によるクロス分析を行い、DP到達度（特に、汎用的能力E-13「外国語を用いたコミュニケーション」の学年次進行に伴う伸長度及び卒業時到達度）を注視していく必要がある 2) 上記1)以外の項目について、例えば面接結果・小論文採点結果等については、採点の段階でAPに基づく能力判定を各採点担当者が行えるようなスキームが必要ではないか。入学者のAP到達度を入学試験実施段階で測定する手法は極めて限られており、当該目的達成のためには、後掲【1-2】、【1-3】で行う入学後のGPA等とのクロス分析に頼らざるを得ないのではないかと考える。

【1-1-2】 【1-2-1】 SS 奨学金受給者と英語プレイスメントテストの相関関係分析

英語プレイスメントテストのクラス分けを以下の通りポイント換算し、属性ごとにその平均点を算出している

2018年度まで		2019年度以降	
クラス分け	ポイント	クラス分け	ポイント
FD(Foundation)	1	1	1.5
Pre A1	2		
A1	3	2	3
A2	4	3	4
B1	5	4	5

※各クラスに (-)、 (+) が付されている場合これに応じて0.5ポイントを加減している

※英語プレイスメントテストは2018年度まで「Reading」等の5区分であったところ、2019年度より2区分減じて3区分となった。よって合計点の経年比較のため、2019年度以降の合計点には1.67を乗じている

2018年度入学生 (現4年次)	Reading	Grammar	Composition	Listening	Conversation	合計
SS奨学金受給者 (n=13)	3.38	3.38	4.35	3.19	3.19	17.50
SS試験不合格者 (n=86)	2.98	2.98	3.23	2.55	2.54	14.28
SS奨学金未受検者 (n=76)	3.69	3.69	3.98	3.10	3.09	17.31

2019年度入学生 (現3年次)	Reading	Writing	Communication	合計(※)
SS奨学金受給者 (n=14)	3.86	2.79	3.32	16.64
SS試験不合格者 (n=81)	3.10	1.91	2.27	11.96
SS奨学金未受検者 (n=81)	3.68	2.14	2.64	13.90

2020年度入学生 (現2年次)	Reading	Writing	Speaking	合計(※)
SS奨学金受給者 (n=6)	3.83	4.00	3.83	19.48
SS試験不合格者 (n=110)	2.97	2.51	2.33	13.05
SS奨学金未受検者 (n=85)	3.43	3.10	2.98	15.68

2021年度入学生 (現1年次)	Reading	Writing	Communication	合計(※)
SS奨学金受給者 (n=28)	3.21	3.86	3.68	17.95
SS試験不合格者 (n=67)	2.83	3.26	2.94	15.08
SS奨学金未受検者 (n=54)	3.10	3.28	3.37	16.28

アセスメント結果の概要
2018~2021 年度までの4カ年度にわたる、英語プレイスメントテストにおけるSS奨学金(SS-1・SS-2)受給者とそれ以外の属性の学生との平均点との比較を行った。 その結果、SS奨学金受給者はその他の属性の学生に比して英語プレイスメントテストの平均点が有意に高いとの結果が得られた。
アセスメント結果から見える問題点
本調査は、SS奨学金事業がその投資効果に見合った良質な学生の獲得と本学の募集広報上のメリットに繋がっているか否かを検討するために実施したものである。 上記の結果は、ひとまずその妥当性を担保しているものと言える。
問題点に対する改善方策
本調査から見てくる改善点は特段見当たらない。但し、2021年度入学生においてSS奨学金受給者が急増しており、その投資効果の妥当性を検証するためには引き続き本調査を継続し、SS奨学金受給者とそれ以外の属性の学生について以下の項目の比較分析を行っていくこととしたい。 なお、本調査結果は一応の途中経過として、入学委員会及びアドミッションズ・オフィス等の関連部署にフィードバックすることとする。
1) 累積GPAの比較 2) 退学率の比較 3) 就職実績の比較

【1-2-2】2017年度入学者（2020年度卒業生） 入試区分別学修状況分析

調査対象者：2017年4月入学者169名（入学時現英98名、入学時国コミ71名）

調査項目（入学時学科別）：

- 1) 入試区分（総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、その他）
- 2) 在学状況（退学・除籍率、最低在学年限卒業率）
- 3) 成績状況（GPA）

●入試区分別

	入試区分	入試種別	入学者数	退学除籍	退学率	留年者	※4年間	※休学含む	※f-strict
							最低在学年限卒業率	累積GPA	
現英	総合型	AO	26	4	15%	6	62%	2.85	
		自己推薦	3	1	33%	0	67%	1.91	
	学校推薦型	指定校等	38	4	11%	3	82%	2.66	
	一般型	スカラ	9	0	0%	1	89%	2.82	
		一般入試	9	2	22%	1	67%	2.71	
		センター	11	1	9%	0	91%	2.80	
	その他	社会人・外国人等	2	1	50%	0	50%	3.46	
合計			98	13	13%	11	76%	2.73	
国コミ	総合型	AO	11	3	27%	2	55%	2.77	
		自己推薦	5	1	20%	1	60%	2.06	
	学校推薦型	指定校等	21	4	19%	0	81%	2.69	
	一般型	スカラ	5	0	0%	0	100%	2.64	
		一般入試	10	3	30%	0	70%	2.67	
		センター	1	0	0%	0	100%	2.10	
	その他	社会人・外国人等	16	2	13%	2	75%	1.70	
合計			69	13	19%	5	74%	2.41	
学部計	総合型	AO	37	7	19%	8	59%	2.83	
		自己推薦	8	2	25%	1	63%	2.00	
	学校推薦型	指定校等	59	8	14%	3	81%	2.67	
	一般型	スカラ	14	0	0%	1	93%	2.75	
		一般入試	19	5	26%	1	68%	2.69	
		センター	12	1	8%	0	92%	2.74	
	その他	社会人・外国人等	18	3	17%	2	72%	1.84	
総合計			167	26	16%	16	75%	2.60	

●入試得点率別

	入試区分	入試得点率 (%)	入学者数	退学除籍	退学率	留年者	※4年間	※休学含む	※f-strict
							最低在学年限卒業率	累積GPA	
学部計	総合型	85以上	33	6	18%	4	70%	2.73	
		70～84	61	8	13%	6	77%	2.69	
		70%未満	10	3	30%	2	50%	2.23	
	合計			104	17	16%	12	72%	2.67
学部計	一般型	60以上	17	2	12%	0	88%	2.86	
		50～59	15	2	13%	2	73%	2.54	
		50未満	13	2	15%	0	85%	2.73	
	合計			45	6	13%	2	82%	2.73

以上

アセスメント結果の概要
上表のとおり

<p>アセスメント結果から見える問題点</p> <p>A 入試区分別</p> <p>(1) AO：現英・国コミともに卒業率と GPA の乖離が最も大きい。留年数が最大。学力・学習意欲の高い学生とそうでない退学・留年リスクが高い学生が混在している。入試段階で両者を分ける要因は何かを調査する必要がある。結果によっては、選考方法の改善が必要。</p> <p>(2) 自己推薦：退学率が高く、GPA は最も低い。選考方法等を再検討すべき。</p> <p>(3) 学校推薦型：卒業率は一般入試より高い。GPA は一般入試と同等。本データだけを見ると「推薦は学力が低く、一般は高い」という仮説は成り立っていない。従って早期入試の割合を減じることには慎重にならざるを得ない。</p> <p>(4) スカラ：退学率は最も低く、卒業率も非常に高い。しかし GPA は伸びていない。入学時の学力は高く、奨学金を受給しているにもかかわらず、学力が伸びておらず、平凡である。</p> <p>(5) 一般入試：GPA は平均的であるが、退学率が最も高く、卒業率も最低に近い。不本意入学による学習意欲の低下がその原因なのか。</p> <p>(6) センター：退学率は最低で卒業率は最高。GPA は高い。(国コミは 1 名で評価不能)</p> <p>B 入試得点率別</p> <p>(1) 推薦：得点率 70%未滿は、退学率が非常に高く、卒業率も低い。また GPA も低い。得点率 70%未滿は、高校や課程の違いによるものなのかのさらなる調査が必要。</p> <p>(2) 一般：得点率による退学率、卒業率、GPA の違いはない。</p>
<p>問題点に対する改善方策</p> <p>A の(5)に関連して、一般入試を不本意入学者が多いと定義する場合、センターにも同様のことが言えるのではないかと。総合型・学校推薦型は 2021 年度より学力審査を課しており、当該年度入学生についてより詳細な分析が可能となるであろう。</p> <p>全体として、学修成果の尺度として高校の評定平均値や就業力アンケートにおける DP 達成度自己評価等の指標が考えられ、今後の分析に活用する。このほか、入学試験面接時の所見や基礎演習内の面談記録も適宜活用する(定量化不能のデータについても保存・整理のうえ分析に供することが必要)。</p>

【1-3】2017 年度入学者選抜/2020 年度卒業生アンケートのクロス分析

<p>アセスメント結果の概要</p> <p>2017 年度 4 月入学者を入学者選抜区分・当該試験の成績別にグルーピングし、各属性における卒業時アンケートの DP 達成度自己評価の点数平均を割り出した。卒業時アンケートは全体母数(2017 年度 4 月入学者ベース)のうち約 65%の回答率となっているため、分析の結果の取扱いにはやや制約がある。</p>
<p>アセスメント結果から見える問題点</p> <p>上記分析の結果、概ね以下のことが言える。</p> <p>1) DP 達成度は早期入試(総合型・学校推薦型)よりも一般型選抜が全体的に高い</p> <p>2) 一般型選抜の方が顕著に高い項目として A-3(進路との接続)、B-5(論理的思考力)、E-13(外国語でのコミュニケーション)がある</p> <p>3) 一般型選抜の到達度が低い項目として B-5、E-13、A-2(専門分野の知識)がある(いずれも 5 点満点中の 3.8)。うち、B-5 と E-13 は入学試験成績と到達度が比例しているが、A-2 については入学試験成績と DP 到達度は比例していない</p> <p>4) 一方で、C-8「異文化への理解・共感」は早期入試の方が一般型選抜より高い</p>
<p>問題点に対する改善方策</p> <p>今回の調査対象は 2017 年度入学者であり、旧カリキュラム適用、且つ高大接続改革以前の入試を経由した入学者となる。問題点の多くは新カリ及び高大接続改革によって対応中と思料されるが、以上の前提のもと敢えて改善方策案を列記すれば以下の通り。</p> <p>1), 2)：一般型選抜の妥当性についての継続的な検証(A-3、B-5、E-13 への対応)</p> <p>3)：一般型選抜における A-2 の低迷要因については進路選択行動や就職先とリンクした分析を行う</p> <p>4)：C-8 について早期入試の方が高くなるのは試験内容等に鑑みて妥当。一方で一般型選抜においても全体平均が低いわけではない(5 点満点中の 4.5)。C-8 は建学の精神の要諦となる項目と思われるため、この結果から本学の入学者選抜手法はある程度妥当であると評価できるのではないかと</p>

【1-3】2017年度入学者（2020年度卒業者） 入試区分・成績別のDP達成度自己評価分析

調査対象者：2017年4月入学者（169名）のうち2021年3月卒業時DPアンケート提出者（98名）

調査項目（入学時学科別）：

- 1) 入試区分（総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜、その他）
- 2) 入学者選抜試験の成績（得点率）
- 3) 卒業時DPアンケートにおける自己評価（A-1～E-14まで14区分）

※数値について

選択肢1	何の指導がなくてもできる	→5PT
選択肢2	簡単な助言があればできる	→4PT
選択肢3	綿密な指導があればできる	→3PT
選択肢4	どちらともいえない	→2PT
選択肢5	全くできない	→1PT

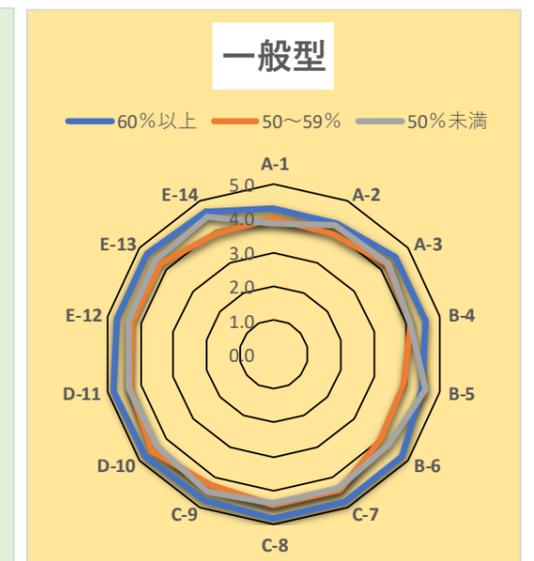
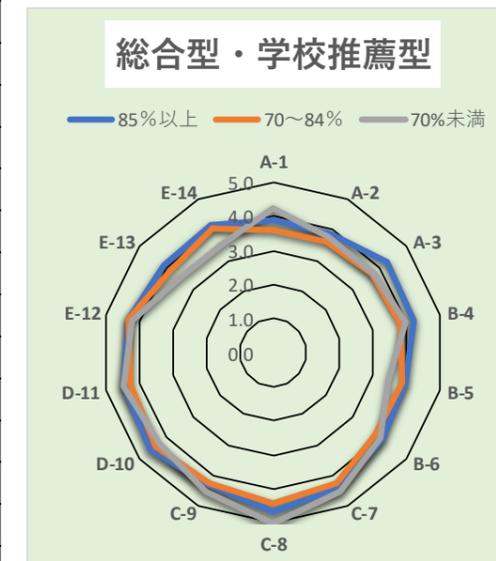
●入試得点率別

学部計	入試区分	入試得点率 (%)	入学者数	サンプル (n)	A-1	A-2	A-3	B-4	B-5	B-6	C-7	C-8	C-9	D-10	D-11	E-12	E-13	E-14	全体平均	【参考】 累積GPA
					総合型 学校推薦型	85%以上	33	18	3.9	3.9	4.3	4.2	4.0	4.1	4.4	4.7	4.3	4.6	4.5	4.3
70～84%	61	42	3.6	3.6		3.7	3.8	3.9	3.9	4.3	4.4	4.3	4.4	4.3	4.3	3.9	4.0	4.0	2.69	
70%未満	10	4	4.3	3.8		3.8	4.0	3.5	4.0	4.5	5.0	4.5	4.3	4.5	4.3	3.5	3.5	4.1	2.23	
合計／平均			104	64	3.9	3.8	3.9	4.0	3.8	4.0	4.4	4.7	4.3	4.4	4.4	4.3	3.8	3.9	4.1	2.67

学部計	一般型	60%以上	17	11	4.3	4.3	4.5	4.5	4.5	4.8	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.7	4.7	4.6	4.6	2.86	
		50～59%	15	12	4.0	3.9	4.3	4.1	3.9	4.0	4.4	4.4	4.3	4.6	4.3	4.3	4.3	4.3	3.9	4.2	2.54
		50%未満	13	11	3.8	4.2	4.3	4.1	4.5	4.3	4.4	4.4	4.5	4.4	4.4	4.4	4.4	4.5	4.5	4.3	2.73
	合計／平均		45	34	4.0	4.1	4.4	4.2	4.3	4.4	4.5	4.5	4.5	4.6	4.5	4.4	4.5	4.3	4.4	2.73	

※調査項目

カテゴリA [理解し、知識を取り込む力]	A-1	歴史・社会・自然を自らと関連付けて理解し、説明することができる。
	A-2	専門分野における知識を体系的に理解し、実践に応用することができる。
	A-3	進路の多様性や特質について理解し、自らの進路選択に効果的に活用することができる。
カテゴリB [論理的思考力・問題解決力]	B-4	情報や知識を多角的な視点から論理的に分析し表現できる。
	B-5	論理的思考に基づき、様々な状況に応じた的確な判断を下すことができる。
	B-6	問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を解決に導くことができる。
カテゴリC [態度・意欲]	C-7	自らを律し、自立して積極的に行動できる。
	C-8	異なる文化に対して、深い認識と共感を持って接することができる。
	C-9	社会の一員としての意識を持ち、社会の発展のために積極的に関与できる。
カテゴリD [コラボレーションとリーダーシップ]	D-10	目標達成のために他者と協調・協働して行動できる。
	D-11	目標達成のために他者に方向性を示し、協力を得ることができる。
カテゴリE [効果的なコミュニケーション力]	E-12	日本語で正確に意思の疎通を図ることができる。また、理論的に記述し、的確に発表し、討議を行うことができる。
	E-13	少なくとも一つの外国語を用い、正確にコミュニケーションを図ることができる。
	E-14	情報通信技術を用いて多様な情報を収集分析し、効果的に活用することができる。



【フェーズ2 在学中】進捗状況表
 ≪フェーズ2-A 大学全体レベル≫

項目	ASM	アセスメント実施者	点検・評価実施者	最終評価実施日 ・実施機関
		(データ作成担当)	(改善立案含む)	
1. 全学的、俯瞰的視点から「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って学修が進められているかどうかの検証				
○成績不振による指導学生数・その割合		学生支援部	教学IR委員会	3/14大学協議会 【2-A-1-1】
○退学者数・退学率				
○休学者数・休学率				
○全学生の単位修得状況	△			
○全学生の成績評価 (GPA・GPT)	△			
○全学生の成績分布	△			
○学生意識調査		学生支援部	教学IR委員会	2/28大学協議会 【2-A-1-2】

【2-A-1-1】2016～2020 年度成績不振による指導学生数・退学者数・休学者数の比較分析、
 2020 年度全学生の単位取得状況、2020 年度全学生の GPA・成績分布

GPA面談者数（成績不振による指導学生数：2016年度～2020年度）

年度	2016		2017		2018		2019		2020		2021	
	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋
1年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
2年	0	4	0	3	4	1	2	1	0	1		
3年	0	0	4	3	3	3	4	3	5	4		
4年	5	0	4	1	4	3	1	3	5	5		
人数	5	4	8	7	11	7	7	7	10	10	0	0

2016年度～2020年度 学籍異動状況

学生数(5/1)	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
日本人学生	546		574		611		631		683	
留学生	134		171		155		157		155	
合計	680		745		766		788		838	

退学者数	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	春学期	秋学期								
日本人学生	4	16	7	24	12	14	11	13	8	11
留学生	1	1	3	3	3	1	1	3	0	1
学期計	5	17	10	27	15	15	12	16	8	12
年度計	22		37		30		28		20	
学生数比(学期)	0.8%	2.6%	1.3%	3.6%	2.0%	2.0%	1.6%	2.1%	1.0%	1.6%
学生数比(年度)	3.3%		5.0%		3.9%		3.7%		2.6%	

除籍者数	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	春学期	秋学期								
日本人学生	0	4	3	3	4	0	3	5	3	1
留学生	0	1	0	1	0	0	0	0	1	2
学期計	0	5	3	4	4	0	3	5	4	3
年度計	5		7		4		8		7	
学生数比(学期)	0.0%	0.8%	0.4%	0.5%	0.5%	0.0%	0.4%	0.7%	0.5%	0.4%
学生数比(年度)	0.8%		0.9%		0.5%		1.0%		0.9%	

中退者数 (退学・除籍計)	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	春学期	秋学期								
日本人学生	4	20	10	27	16	14	14	18	11	12
留学生	1	2	3	4	3	1	1	3	1	3
学期計	5	22	13	31	19	15	15	21	12	15
年度計	27		44		34		36		27	
学生数比(学期)	0.8%	3.3%	1.7%	4.2%	2.5%	2.0%	2.0%	2.7%	1.6%	2.0%
学生数比(年度)	4.1%		5.9%		4.4%		4.7%		3.5%	

※上記一覧数は、例えば5/1付の除籍・退学等について前年度秋学期に加算している

休学者数	2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		2020年度	
	春学期	秋学期								
日本人学生	25	20	18	24	24	25	15	17	19	16
留学生	5	8	11	13	9	6	5	6	18	19
学期計	30	28	29	37	33	31	20	23	37	35
年度計	58		66		64		43		72	
学生数比(学期)	4.5%	4.2%	3.9%	5.0%	4.3%	4.0%	2.6%	3.0%	4.8%	4.6%
学生数比(年度)	8.7%		10.0%		8.4%		5.6%		9.4%	

全学生単位修得状況

【1年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1～10単位		11～20単位		21～30単位		31～40単位		41～50単位		51単位以上		休学 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
外国語 学部	現代英語学科	118	1	0.8%	1	0.8%	5	4.2%	12	10.2%	86	72.9%	13	11.0%	0	0.0%	0
	国際コミュニケーション学科	88	0	0.0%	4	4.5%	7	8.0%	11	12.5%	63	71.6%	3	3.4%	0	0.0%	1
外国語学部計		206	1	0.5%	5	2.4%	12	5.8%	23	11.2%	149	72.3%	16	7.8%	0	0.0%	1
合計		206	1	0.5%	5	2.4%	12	5.8%	23	11.2%	149	72.3%	16	7.8%	0	0.0%	1

【2年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1～10単位		11～20単位		21～30単位		31～40単位		41～50単位		51単位以上		休学 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
外国語 学部	現代英語学科	106	2	1.9%	1	0.9%	7	6.6%	5	4.7%	55	51.9%	32	30.2%	4	3.8%	2
	国際コミュニケーション学科	78	6	7.7%	1	1.3%	3	3.8%	15	19.2%	31	39.7%	22	28.2%	0	0.0%	8
外国語学部計		184	8	4.3%	2	1.1%	10	5.4%	20	10.9%	86	46.7%	54	29.3%	4	2.2%	10
合計		184	8	4.3%	2	1.1%	10	5.4%	20	10.9%	86	46.7%	54	29.3%	4	2.2%	10

【3年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1～10単位		11～20単位		21～30単位		31～40単位		41～50単位		51単位以上		休学 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
外国語 学部	現代英語学科	103	3	2.9%	3	2.9%	4	3.9%	11	10.7%	64	62.1%	18	17.5%	0	0.0%	1
	国際コミュニケーション学科	74	9	12.2%	0	0.0%	4	5.4%	5	6.8%	43	58.1%	13	17.6%	0	0.0%	9
外国語学部計		177	12	6.8%	3	1.7%	8	4.5%	16	9.0%	107	60.5%	31	17.5%	0	0.0%	10
合計		177	12	6.8%	3	1.7%	8	4.5%	16	9.0%	107	60.5%	31	17.5%	0	0.0%	10

【4年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1～10単位		11～20単位		21～30単位		31～40単位		41～50単位		51単位以上		休学 人数	留年 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
外国語 学部	現代英語学科	81	10	12.3%	23	28.4%	28	34.6%	19	23.5%	1	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	8	6
	国際コミュニケーション学科	134	5	3.7%	19	14.2%	40	29.9%	27	20.1%	31	23.1%	12	9.0%	0	0.0%	4	12
外国語学部計		215	15	7.0%	42	19.5%	68	31.6%	46	21.4%	32	14.9%	12	5.6%	0	0.0%	12	18
合計		215	15	7.0%	42	19.5%	68	31.6%	46	21.4%	32	14.9%	12	5.6%	0	0.0%	12	18

長崎外国語大学 成績評価ガイドライン

判定	評点	評定	f - GP	成績評価内容の基準
合格	90～100	秀	3.5～4.5	授業科目の内容を修得し、その到達目標を優れて満たす。
	80～89	優	2.5～3.4	授業科目の内容を修得し、その到達目標を十分に満たす。 また、主体的学修の成果も認めることができる。
	70～79	良	1.5～2.4	授業科目の内容を修得し、その到達目標を概ね満たす。 また、主体的学修の成果も十分ではないが認めることができる。
	60～69	可	0.5～1.4	授業科目の内容を修得し、その到達目標を必要限度満たす。
不合格	59点以下	不可	0	授業科目の内容を修得したと認められず、到達目標の必要限度も満たさず。

2020年度学年別累積「f-GPA」人数表
(学部)

下位4分の1
GPA2.20以下

学年	0.0~0.4	0.5~0.9	1.0~1.4	1.5~1.9	2.0~2.4	2.5~2.9	3.0~3.4	3.5~3.9	4.0~4.4	4.5	計人数
1年次	3	4	16	16	36	51	63	18	0	0	207
	1.4%	1.9%	7.7%	7.7%	17.4%	24.6%	30.4%	8.7%	0.0%	0.0%	100.0%
2年次	4	5	12	23	39	50	42	14	0	0	189
	2.1%	2.6%	6.3%	12.2%	20.6%	26.5%	22.2%	7.4%	0.0%	0.0%	100.0%
3年次	4	4	7	21	42	68	52	13	0	0	211
	1.9%	1.9%	3.3%	10.0%	19.9%	32.2%	24.6%	6.2%	0.0%	0.0%	100.0%
4年次	3	6	26	24	39	65	51	10	0	0	224
	1.3%	2.7%	11.6%	10.7%	17.4%	29.0%	22.8%	4.5%	0.0%	0.0%	100.0%
計	14	19	61	84	157	235	209	55	0	0	834
	1.7%	2.3%	7.3%	10.1%	18.8%	28.2%	25.0%	6.6%	0.0%	0.0%	100.0%

アセスメント結果の概要

- 2020年度成績不振者数は延べ20名と前年度(14名)比で増加傾向。
- 2020年度中退者数(退学・除籍)は27名(中退率3.5%)と前年度(36名・4.7%)比で減少。
- 2020年度休学者数は延べ72名(休学率9.4%)と前年度(延べ43名・5.6%)から増加傾向。
- なお、成績不振者について過去3年間の該当者を抽出のうえ、その後の中退/卒業の別や進路、出身学校及び生活様態等の属性に係るクロス分析を実施したが、有意な結果は得られなかった。

アセスメント結果から見える問題点

- GPA分布について、学年次ごとにGPAの総平均帯であるGP2.5に満たない学生が占める割合を算出したところ、以下の通りとなった【1年次36.2%、2年次43.9%、3年次37.0%、4年次43.8%】。また、これに学科別を加味すると、国際コミュニケーション学科3年次が31.2%と有意に少なかった(対して現代英語学科3年次は43.1%と高い)。

問題点に対する改善方策

- アセスメント結果から導かれる問題点ではないが、本項【2-A-1-1】の所与のミッションは「全学的、俯瞰的視点からCPに則って学修が進められているかどうかの検証」を行うことであり、これらアセスメントの結果から有意な分析を導き出すため、DPに定める学修成果の各項に対応する科目群別の学修成果(単位取得状況・GPA)の分析を進めていくこととする。
- 成績不振者の属性分析については、休退学防止の要因の早期発見に繋がる可能性があることから今後も継続していく。

【2-A-1-2】2021年度学生意識調査結果から見るCPに則った学修進捗の状況検証

2021年度学生意識調査(抜粋) 教学IR委員会分析結果

Q. 受講している授業(予習・復習)以外で、資格取得など将来に備えた自主的な学習の時間は週にどれくらいですか?(択一)

	2020年度		2021年度	
	回答数	構成比	回答数	構成比
30分未満	40	22%	43	30%
30分~1時間未満	52	28%	34	23%
1時間~2時間未満	51	28%	35	24%
2時間~3時間未満	22	12%	20	14%
3時間~4時間未満	10	5%	1	1%
4時間以上	8	4%	12	8%
計	183	100%	145	100%

「30分未満」の割合が前年度比で8%増加し、全ての選択肢の中で最高となっている。
授業評価アンケートには授業外学修時間を問う設問があるが、学生の自主的な学習時間の総体的把握のために次年度に向けては、学修時間を多肢選択ではなく自由記述させることも学生支援部にて検討いただきたい。

Q. 本学のDPのカテゴリA（知識・理解）に関して、本学での学修において最も身につけたいと思う能力は次のどれですか？（択一）

	2021年度		回答① 構成比	①～② 構成比
	回答数	構成比		
1歴史・社会・自然	22	15%	20%	71%
2専門知識	70	48%	23%	72%
3進路選択への活用	53	37%	30%	76%
計	145	100%		

【2020年度春季卒業時観点別就業力アンケート】

選択肢：①何の指導がなくてもできる、②簡単な助言があればできる、③綿密な指導があればできる、④どちらともいえない、⑤全くできない

カテゴリA：志向性(左表)においては「2専門知識」の割合が大きい一方、実績(右表)では学生らの自己評価が全14能力中13番目とかなり低い

カテゴリB：志向性(左表)、実績(右表)ともに大きな差異がない

カテゴリC：「8異文化理解」が志向性・実績ともに取り分けて高い。学生らの自己評価は全14能力中最も高い。

カテゴリD：「11リーダーシップ」への志向性が極端に低い点が気かりだが、学生らの自己評価は全14能力中4番目と高い。

カテゴリE：「13外国語能力」への志向性が高いのは当然か。一方で学生らの自己評価は全14能力中7番目と、さほど伸びていない

Q. カテゴリB（論理・問題解決）

4情報分析	47	32%	30%	76%
5論理的思考	48	33%	28%	76%
6問題解決	50	34%	32%	77%
計	145	100%		

Q. カテゴリC（態度・意欲）

7自律・積極性	50	34%	53%	86%
8異文化理解	75	52%	55%	92%
9社会への関与	20	14%	46%	87%
計	145	100%		

Q. カテゴリD（コラボレーション・リーダーシップ）

10協調・協働	105	72%	53%	89%
11リーダーシップ	40	28%	51%	87%
計	145	100%		

Q. カテゴリE（コミュニケーション）

12日本語意思疎通	29	20%	47%	89%
13外国語能力	99	68%	40%	82%
14情報通信	17	12%	37%	78%
計	145	100%		

Q. 大学にどのような学修支援を求めていますか？（複数回答）

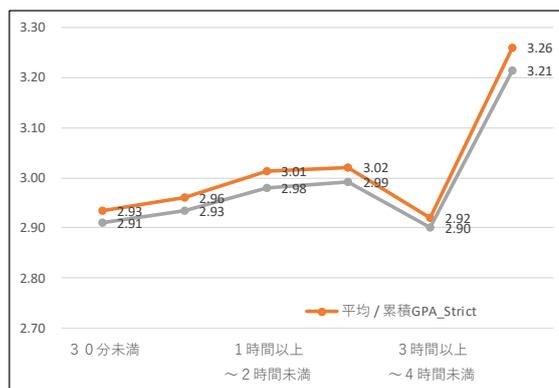
	2021年度	
	回答数	回答率
時間外でも外国語が使える環境の提供	77	53%
英語リメディアルに関する指導・練習	57	39%
大学での勉強の仕方についての説明・指導	36	25%
CEFRレベルとは何かについての説明	36	25%
自主学習に資する参考書の情報提供・相談	22	15%
学生同士で討論等ができる環境	20	14%
専門教育・基礎教養関連の図書の実充	19	13%
時間外でも教員に質問できる環境	16	11%

「時間外でも外国語が使える環境」が最も多い回答となり、対象者の半数を超えた。コロナ禍による外国人との接触機会の減少が要因と思われる、その対応として学生支援部において「語学村のオンラインでの再開について検討する」としている。
また、「英語リメディアル」の機会提供も学生の3人に1人以上が感じているということであり、然るべき対応が待たれる。

① 学習時間別GPA

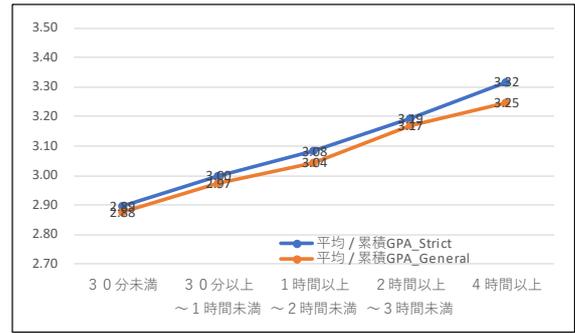
2021年度（全体）

	人数	平均 / 累積 GPA_Strict	平均 / 累積 GPA_General
30分未満	43	2.93	2.91
30分以上 ～1時間未満	31	2.96	2.93
1時間以上 ～2時間未満	35	3.01	2.98
2時間以上 ～3時間未満	21	3.02	2.99
3時間以上 ～4時間未満	1	2.92	2.90
4時間以上	12	3.26	3.21
総計	143	3.00	2.97



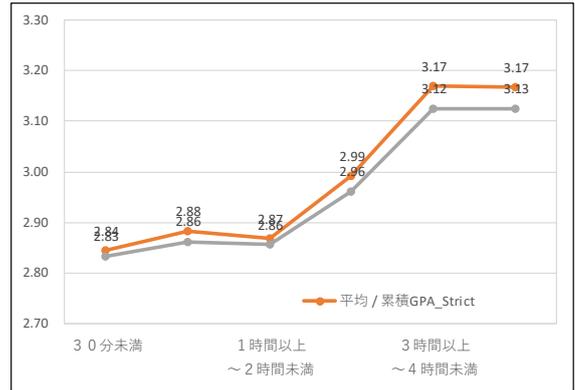
2021年度（うち1年次生）

	人数	平均 / 累積 GPA_Strict	平均 / 累積 GPA_General
30分未満	26	2.89	2.88
30分以上 ～1時間未満	9	3.00	2.97
1時間以上 ～2時間未満	11	3.08	3.04
2時間以上 ～3時間未満	5	3.19	3.17
4時間以上	3	3.32	3.25
総計	54	3.00	2.97



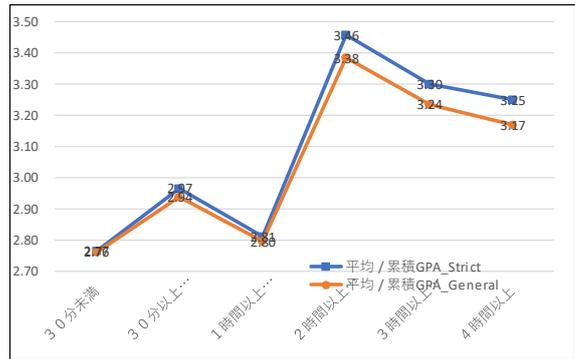
2020年度（全体）

	人数	平均 / 累積 GPA_Strict	平均 / 累積 GPA_General
30分未満	40	2.84	2.83
30分以上 ～1時間未満	52	2.88	2.86
1時間以上 ～2時間未満	51	2.87	2.86
2時間以上 ～3時間未満	22	2.99	2.96
3時間以上 ～4時間未満	10	3.17	3.12
4時間以上	8	3.17	3.13
総計	183	2.91	2.89



2020年度（うち1年次生）

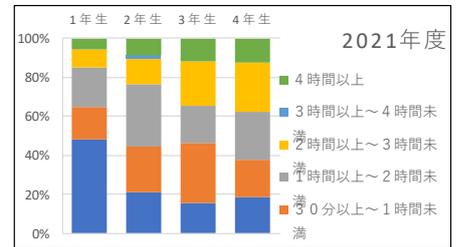
	人数	平均 / 累積 GPA_Strict	平均 / 累積 GPA_General
30分未満	20	2.77	2.76
30分以上 ～1時間未満	16	2.97	2.94
1時間以上 ～2時間未満	22	2.81	2.80
2時間以上 ～3時間未満	7	3.46	3.38
3時間以上 ～4時間未満	5	3.30	3.24
4時間以上	2	3.25	3.17
総計	72	2.94	2.92



② 学年別学習時間

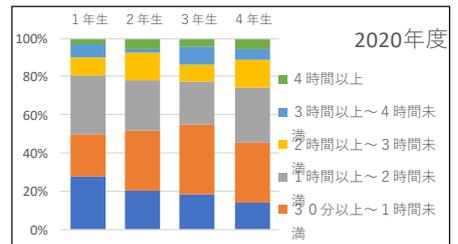
2021年度

	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
30分未満	26	10	4	3	43
30分以上～1時間未満	9	11	8	3	31
1時間以上～2時間未満	11	15	5	4	35
2時間以上～3時間未満	5	6	6	4	21
3時間以上～4時間未満	0	1	0	0	1
4時間以上	3	4	3	2	12
総計	54	47	26	16	143



2020年度

	1年生	2年生	3年生	4年生	総計
30分未満	20	11	4	5	40
30分以上～1時間未満	16	17	8	11	52
1時間以上～2時間未満	22	14	5	10	51
2時間以上～3時間未満	7	8	2	5	22
3時間以上～4時間未満	5	1	2	2	10
4時間以上	2	3	1	2	8
総計	72	54	22	35	183



アセスメント結果の概要
学生支援部が実施した 2021 年度学生意識調査は、Google フォームを用いて 2021 年度上半期に実施され、対象者（5/1 現在の在籍学生 773 名）のうち有効回答者数は 145 名（回答率 18.8%）であった。厚生補導に係る意見の吸い上げが主目的のため、CP に基づく学修進捗の状況を検証するデータは全体のごく一部に過ぎないが、上表の通りアセスメント結果に係る分析を行った。
アセスメント結果から見える問題点
1) （予習復習を含まない）自主的学修時間がゼロ又は限りなくそれに近い学生が、全体の 3 割に上る。 ※予習復習の時間については授業評価アンケートに設問があるが、授業 1 回当たりの平均授業外学修時間が 4 時間未満の割合は 2020 年度春学期において 76.0%、同秋学期 76.7%と由々しき状況。 2) DP が規定する能力への志向性については、専門知識（A-2）が相対的に高い反面、学生の自己評価による DP 到達度（後掲【2-B-3】「2021 年度春季卒業時観点別就業力アンケート」）に依拠、但し当該調査は 2020 年度卒業生対象であり、本調査対象者（2021 年度上半期在籍学生）と属性が異なるほか在籍生においても学年次進行によって適用される DP が異なる点は注意を要する）は低く、「希望と現実の乖離」が大きい。 3) 授業外での外国語活用の機会が奪われていることに対して改善を望む学生が半数以上に上る。
問題点に対する改善方策
1) （予習復習を含まない）自主的学修時間ほぼゼロの学生に対するクロス分析により当該指標が休退学の要因となっていないかを確認する（→休退学者は学生意識調査に回答していないことが多く困難が伴う、別のアセスメント手法を検討） 2) 経年的・継続的な分析を実施し、当該乖離が有意性を持つものである場合に対策を検討する 3) 学生支援部にて「語学村のオンラインでの再開について検討する」（学生支援部分析結果より）このほか、学生支援委員会においても、「Google フォームに代わる新たなツールの活用の模索」等のアセスメント手法の改善に係る検討がなされた旨付言しておく（第 9 回学生支援委員会議事録）。

【フェーズ2 在学中】進捗状況表

《フェーズ2-B 学位プログラムレベル（学部・学科レベル）》

項目	ASM	アセスメント実施者	点検・評価実施者	最終評価実施日 ・実施機関
		（データ作成担当）	（改善立案含む）	
1. 教育や学修が「教育課程編成・実施の方針（CP）」に則って適切に進められているかの検証				
○科目の開講状況、履修者数等	○	教育支援部	教育支援委員会	22/6/13内部質保証 推進協議会 【2-B-1-1】
○学生の単位取得状況	○			
○授業評価アンケート		教育支援部	教育支援委員会	21/3/22大学協議会 5/24大学協議会 【2-B-1-2】

2. 学年進行に従って「卒業認定・学位授与の方針 (DP)」で定められている学修成果・教育成果が達成されているかの検証【DPの各学修成果の達成度の検証】					
○GPA、GPT	○	教育支援部	教学IR委員会 (現代英語学科) (国際コミュニケーション学科)	22/6/13内部質保証 推進協議会 【2-B-2】	
○成績分布等の資料	○				
○学生の自己評価、教員の評価	○				
○ODP (学修成果2) 5つの汎用的能力の獲得状況	○				
○外大プログラム (留学、インターンシップ、ボランティア、卒業研究等) の学修成果	○				
○外部語学力テスト	○				社会連携センター (学修支援センター)
○外部汎用的能力テスト (PROG等)	○				教育支援部
○資格取得状況	○	旅程管理研修機関事務局 キャリアセンター			
3. 「卒業認定・学位授与の方針 (DP)」で定められている学修成果を達成するために、教育課程編成・実施方法等は適切かつ有効かの検証					
ODPの各学修成果の達成度 (卒業時観点別就業力アンケート)	○	教育支援部	教学IR委員会 (現代英語学科) (国際コミュニケーション学科)	5/24 大学協議会 【2-B-3】	
※2021年度以降は学年次データをASM抽出					

【2-B-1-1】2020年度科目開講状況、学科別単位取得状況に係る分析

【再掲】全学生単位修得状況

【1年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1~10単位		11~20単位		21~30単位		31~40単位		41~50単位		51単位以上		休学 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
外国語 学部	現代英語学科	118	1	0.8%	1	0.8%	5	4.2%	12	10.2%	86	72.9%	13	11.0%	0	0.0%	0
	国際コミュニケーション学科	88	0	0.0%	4	4.5%	7	8.0%	11	12.5%	63	71.6%	3	3.4%	0	0.0%	1
外国語学部計		206	1	0.5%	5	2.4%	12	5.8%	23	11.2%	149	72.3%	16	7.8%	0	0.0%	1
合計		206	1	0.5%	5	2.4%	12	5.8%	23	11.2%	149	72.3%	16	7.8%	0	0.0%	1

【2年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1~10単位		11~20単位		21~30単位		31~40単位		41~50単位		51単位以上		休学 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
外国語 学部	現代英語学科	106	2	1.9%	1	0.9%	7	6.6%	5	4.7%	55	51.9%	32	30.2%	4	3.8%	2
	国際コミュニケーション学科	78	6	7.7%	1	1.3%	3	3.8%	15	19.2%	31	39.7%	22	28.2%	0	0.0%	8
外国語学部計		184	8	4.3%	2	1.1%	10	5.4%	20	10.9%	86	46.7%	54	29.3%	4	2.2%	10
合計		184	8	4.3%	2	1.1%	10	5.4%	20	10.9%	86	46.7%	54	29.3%	4	2.2%	10

【3年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1~10単位		11~20単位		21~30単位		31~40単位		41~50単位		51単位以上		休学 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
外国語 学部	現代英語学科	103	3	2.9%	3	2.9%	4	3.9%	11	10.7%	64	62.1%	18	17.5%	0	0.0%	1
	国際コミュニケーション学科	74	9	12.2%	0	0.0%	4	5.4%	5	6.8%	43	58.1%	13	17.6%	0	0.0%	9
外国語学部計		177	12	6.8%	3	1.7%	8	4.5%	16	9.0%	107	60.5%	31	17.5%	0	0.0%	10
合計		177	12	6.8%	3	1.7%	8	4.5%	16	9.0%	107	60.5%	31	17.5%	0	0.0%	10

【4年次】

学部	学科	令和3年3月31日 現在の在籍者	0単位		1~10単位		11~20単位		21~30単位		31~40単位		41~50単位		51単位以上		休学 人数	留年 人数
			人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
外国語 学部	現代英語学科	81	10	12.3%	23	28.4%	28	34.6%	19	23.5%	1	1.2%	0	0.0%	0	0.0%	8	6
	国際コミュニケーション学科	134	5	3.7%	19	14.2%	40	29.9%	27	20.1%	31	23.1%	12	9.0%	0	0.0%	4	12
外国語学部計		215	15	7.0%	42	19.5%	68	31.6%	46	21.4%	32	14.9%	12	5.6%	0	0.0%	12	18
合計		215	15	7.0%	42	19.5%	68	31.6%	46	21.4%	32	14.9%	12	5.6%	0	0.0%	12	18

アセスメント結果の概要

上表のとおり

※「2020年度科目開講状況」に係る資料は大部なため掲載省略

アセスメント結果から見える問題点

2020年度の開講科目は、学則記載の全635科目のうち非開講が150科目に上るが、このうちに任意科目を多く含むこともあり、CPに則る教育が実施されているか否かについての判断は保留する。次年度以降の結果取り纏めを待っての経年比較分析を行うこととしたい。

単位修得状況に係る資料は2021(令和3)年度大学機関別認証評価受審時の提出資料を準用しているものであるが、今後は学年次進行に応じた累積修得単位の数値を用いてCPに基づく教育の進捗度を比較分析することとした。

なお両学科間の懸隔について、卒業に必要な単位数124を4で除した31単位が各学年次の修得単位数

の目安となるが、最終学年（4年次）においてなお31単位以上を修得した者が国際コミュニケーション学科の3割に上る点が目につく。但しこれは多くが留学からの帰国後の留学先既修得単位の読替え認定が4年次にすれ込んだためであり、これを除けば大きな問題は看取されない。

問題点に対する改善方策

学年次進行に応じた適切な修得単位数の担保は、教育機関としてこれを積極的に推奨するか否かについて判断の分かれるところである。米国の例を挙げるまでもなく、最低在学年限での卒業が即ち成功裏に教育がなされたことの証左とはなり得ないことは論を俟たないが、一方で学士課程在籍者の多くが卒業後就職する本学の場合、3年次3月から開始される学生の就職活動の円滑化と時宜を得た卒後の社会との接続の観点から、ある程度この点に注意を払う必要があることは否定できないであろう。既にアドバイザー等による個別の履修指導によって各学期の目安となる修得単位数の確保を行っているところであるが、今後も本施策の継続と各教員の本学単位制度への理解促進、及び個々人の指導手法の更なる向上が望まれる。

【2-B-1-2】2020年度授業評価アンケート結果から見る教育課程の適切性の検証

①授業満足度（問10）のうち回答1～3の構成比

1 強くそう思う

2 そう思う

3 どちらかといえばそう思う

4 どちらかといえばそう思わない

5 そう思わない

6 全くそう思わない

	2019 春	2019 秋	2020 春	2020 秋
教養教育科目	89.1%	94.7%	87.8%	94.2%
専門教育科目	—	—	93.7%	95.4%
言語教育科目	—	—	94.8%	96.7%
全体	92.2%	96.4%	92.7%	95.6%

②授業外学修時間（問11）のうち回答1～3（2時間以上）の構成比

1 4時間以上

2 3～4時間

3 2～3時間

4 1～2時間

5 30分～1時間

6 30分未満

	2019 春	2019 秋	2020 春	2020 秋
教養教育科目	20.3%	20.0%	18.6%	19.8%
専門教育科目	—	—	26.6%	23.1%
言語教育科目	—	—	25.4%	25.9%
全体	26.4%	25.9%	24.1%	23.4%

授業外学修時間（問11）のうち回答1のみ（4時間以上）の構成比

	2019 春	2019 秋	2020 春	2020 秋
教養教育科目	7.4%	4.4%	4.2%	4.9%
専門教育科目	—	—	7.9%	8.7%
言語教育科目	—	—	5.0%	5.2%
全体	7.2%	5.8%	5.6%	6.0%

アセスメント結果の概要

標記アセスメントのうち、以下3問について2019年度結果との比較分析を実施した。

- ・問10「授業満足度」のうち回答1～3（1 強くそう思う、2 そう思う、3 どちらかといえばそう思う）の構成比
- ・問11「授業外学修時間」のうち回答1～3（1：4時間以上、2：3～4時間、3：2～3時間以上）の構成比

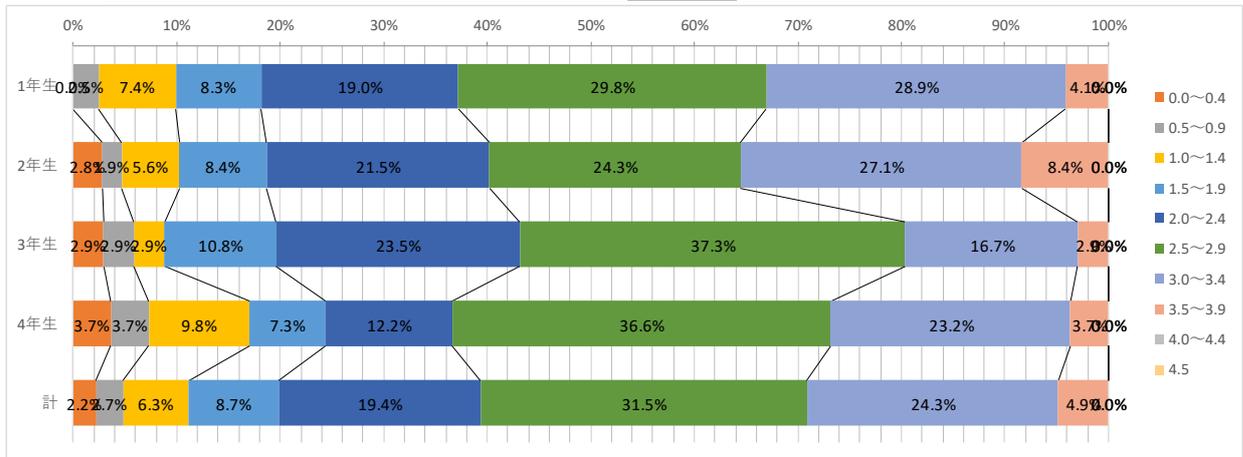
・問 11 「授業外学修時間」のうち回答 1 のみ（4 時間以上）の構成比
アセスメント結果から見える問題点
1) 授業満足度については春学期の満足度が秋学期より低い。また 2020 年度の結果から類推するに教養教育科目の満足度が低い
2) 望ましい授業外学修時間の確保に向けては依然として課題を残す。全体的に前年度比で更に減少しており、巷間言われているように、コロナ禍による遠隔授業実施が学修時間（学習行動の負担）の増加に繋がったとは本調査からは言えない
問題点に対する改善方策
1) について
・ 今後教養教育科目について集中的な分析を行った後、次年度以降に改めて結果を報告する
2) について
・ 授業外学修のための課題付与の際に、想定所要時間を学生に明示する等の工夫を行い、全体的な授業外学修時間増加に取り組む
・ 単位実質化の観点から各科目間の授業外学修時間の不均衡の是正を要する

【2-B-2】 学年進行に従い DP が求める学修成果が達成されているかの検証

2020年度学年別累積「f-GPA」人数表

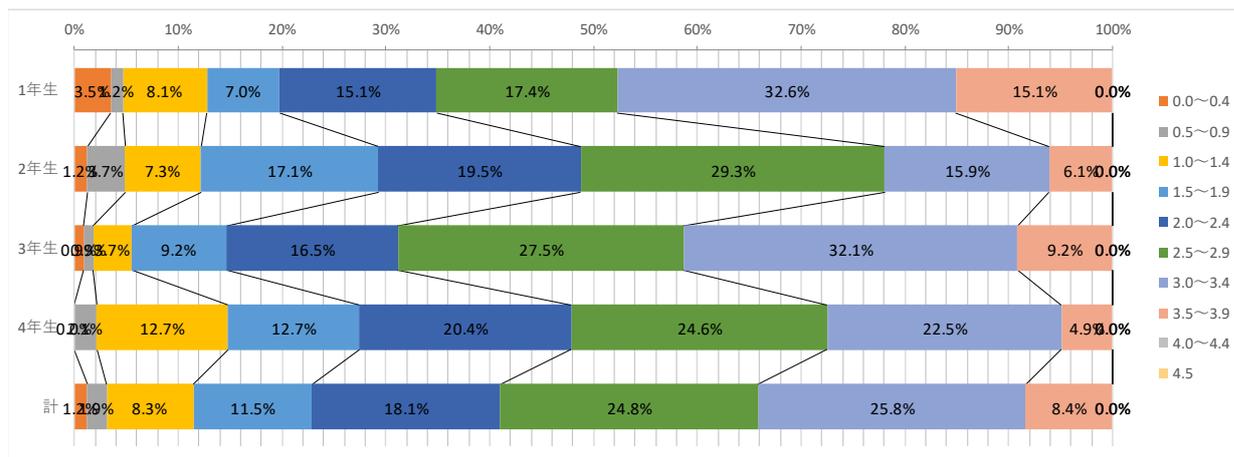
(現代英語学科)

学年	0.0~0.4	0.5~0.9	1.0~1.4	1.5~1.9	2.0~2.4	2.5~2.9	3.0~3.4	3.5~3.9	4.0~4.4	4.5	計人数
	0	3	9	10	23	36	35	5	0	0	121
1年生	0.0%	2.5%	7.4%	8.3%	19.0%	29.8%	28.9%	4.1%	0.0%	0.0%	100.0%
2年生	3	2	6	9	23	26	29	9	0	0	107
2年生	2.8%	1.9%	5.6%	8.4%	21.5%	24.3%	27.1%	8.4%	0.0%	0.0%	100.0%
3年生	3	3	3	11	24	38	17	3	0	0	102
3年生	2.9%	2.9%	2.9%	10.8%	23.5%	37.3%	16.7%	2.9%	0.0%	0.0%	100.0%
4年生	3	3	8	6	10	30	19	3	0	0	82
4年生	3.7%	3.7%	9.8%	7.3%	12.2%	36.6%	23.2%	3.7%	0.0%	0.0%	100.0%
計	9	11	26	36	81	131	101	20	0	0	415
計	2.2%	2.7%	6.3%	8.7%	19.4%	31.5%	24.3%	4.9%	0.0%	0.0%	100.0%



(国際コミュニケーション学科)

学年	0.0~0.4	0.5~0.9	1.0~1.4	1.5~1.9	2.0~2.4	2.5~2.9	3.0~3.4	3.5~3.9	4.0~4.4	4.5	計人数
	3	1	7	6	13	15	28	13	0	0	86
1年生	3.5%	1.2%	8.1%	7.0%	15.1%	17.4%	32.6%	15.1%	0.0%	0.0%	100.0%
	1	3	6	14	16	24	13	5	0	0	82
2年生	1.2%	3.7%	7.3%	17.1%	19.5%	29.3%	15.9%	6.1%	0.0%	0.0%	100.0%
	1	1	4	10	18	30	35	10	0	0	109
3年生	0.9%	0.9%	3.7%	9.2%	16.5%	27.5%	32.1%	9.2%	0.0%	0.0%	100.0%
	0	3	18	18	29	35	32	7	0	0	142
4年生	0.0%	2.1%	12.7%	12.7%	20.4%	24.6%	22.5%	4.9%	0.0%	0.0%	100.0%
	5	8	35	48	77	105	109	35	0	0	422
計	1.2%	1.9%	8.3%	11.5%	18.1%	24.8%	25.8%	8.4%	0.0%	0.0%	100.0%



2020年度学科別・学年次別DP汎用的能力に係る自己評価（2020年度後期実施分、5.0点満点）

●旧DP対象年次（3年次生・4年次生）

※旧DPの学修成果

A 知識を理解し取り組む力
B 論理的思考力・問題解決力
C 学習に取り組む態度・意欲
D コラボレーションとリーダーシップ
E 効果的なコミュニケーション力

A 知識を理解し取り組む力	3年次生	4年次生
現代英語学科	2.75	2.86
国際コミュニケーション学科	2.89	2.76

B 論理的思考力・問題解決力	3年次生	4年次生
現代英語学科	2.74	2.92
国際コミュニケーション学科	2.87	2.76

C 学習に取り組む態度・意欲	3年次生	4年次生
現代英語学科	2.94	3.05
国際コミュニケーション学科	3.14	2.83

D コラボレーションとリーダーシップ	3年次生	4年次生
現代英語学科	2.84	3.07
国際コミュニケーション学科	3.18	2.91

E 効果的なコミュニケーション力	3年次生	4年次生
現代英語学科	2.77	2.95
国際コミュニケーション学科	3.01	2.86

●現行DP対象年次（1年次生・2年次生）

※現行DPの学修成果

【学修成果1】建学の精神（キリスト教精神）及び歴史的長崎がもつ今日的意義を理解し、それらをふまえてグローバル化する現代社会の中でよく生きることについて、自分の考えを論じることができる
【学修成果2】高度の知的活動を行うために必要な5つの汎用的能力（知識獲得力、問題解決力、コミュニケーション力、自己実現力、組織的行動力）を身につけ、活用することができる
【学修成果3】自己や自己を取り巻く世界を人文・社会・自然分野の知識と関連付けるとともに、多様な視点から認識し、異なる思考方法や多様な価値観に理解を示すことができる
【学修成果4】専修外国語の高度な運用能力を身につけ、目的に応じて駆使することができる。
【学修成果5】専攻分野の専門知識を身につけ、その分野に固有の認識や思考方法について、その概要を説明することができる。
【学修成果6】自ら課題を発見し、その解決のためにこれまでに獲得した学修成果（知識・スキルや汎用的能力）を総合的に活用することができる

学修成果1	1年次生	2年次生
現代英語学科	3.48	3.46
国際コミュニケーション学科	3.26	3.25

学修成果2	1年次生	2年次生
現代英語学科	3.68	3.68
国際コミュニケーション学科	3.38	3.33

学修成果3	1年次生	2年次生
現代英語学科	3.72	3.5
国際コミュニケーション学科	3.42	3.29

学修成果4	1年次生	2年次生
現代英語学科	3.3	3.19
国際コミュニケーション学科	2.74	2.50

学修成果5	1年次生	2年次生
現代英語学科	3.11	3.33
国際コミュニケーション学科	2.71	2.71

学修成果6	1年次生	2年次生
現代英語学科	3.53	3.33
国際コミュニケーション学科	3.08	2.98

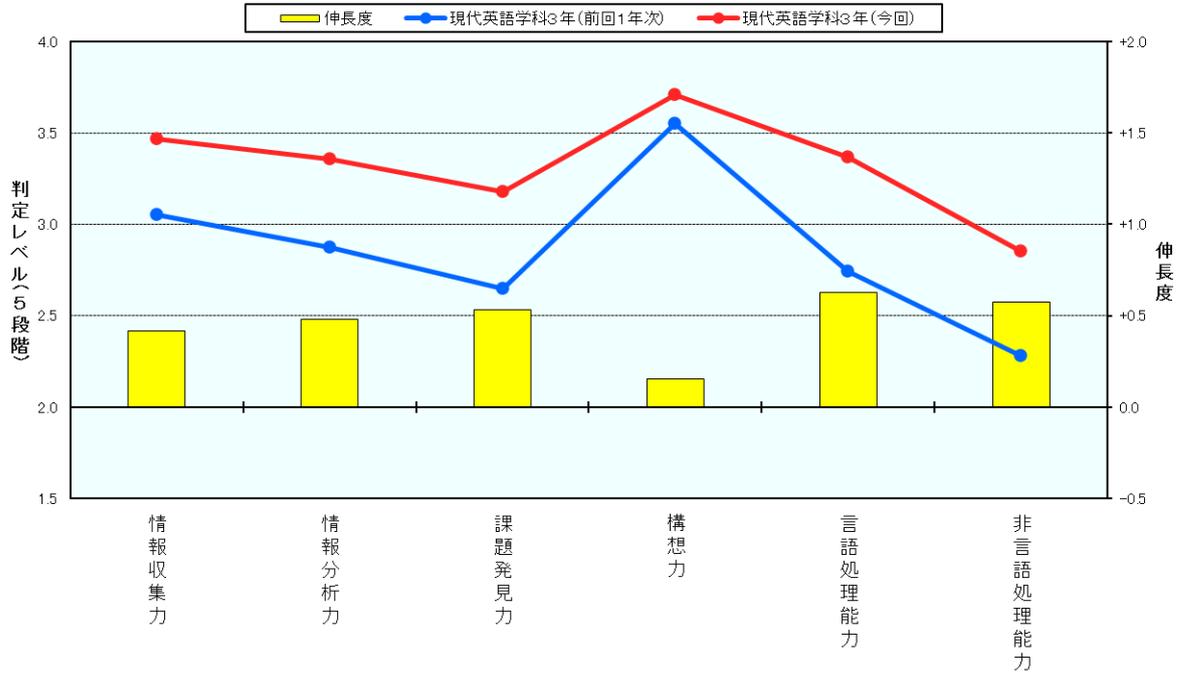
2020年度TOEIC L&R受検者数及び平均スコア(学科・学年次別)

学科		1年次	2年次	3年次	4年次	学科合計
現代英語学科	在籍者数(5/1時点)	117	112	107	88	424
	TOEIC受検者数	103	96	53	42	294
	受検率	88.0%	85.7%	49.5%	47.7%	69.3%
	平均スコア	355.8	393.6	478.6	487.7	409.1
国際コミュニケーション学科	在籍者数(5/1時点)	92	77	107	138	414
	TOEIC受検者数	69	45	26	44	184
	受検率	75.0%	58.4%	24.3%	31.9%	44.4%
	平均スコア	321.4	311.6	311.2	479.2	355.3
学部合計	在籍者数(5/1時点)	209	189	214	226	838
	TOEIC受検者数	172	141	79	86	478
	受検率	82.3%	74.6%	36.9%	38.1%	57.0%
	平均スコア	342.0	367.4	423.5	483.4	388.4

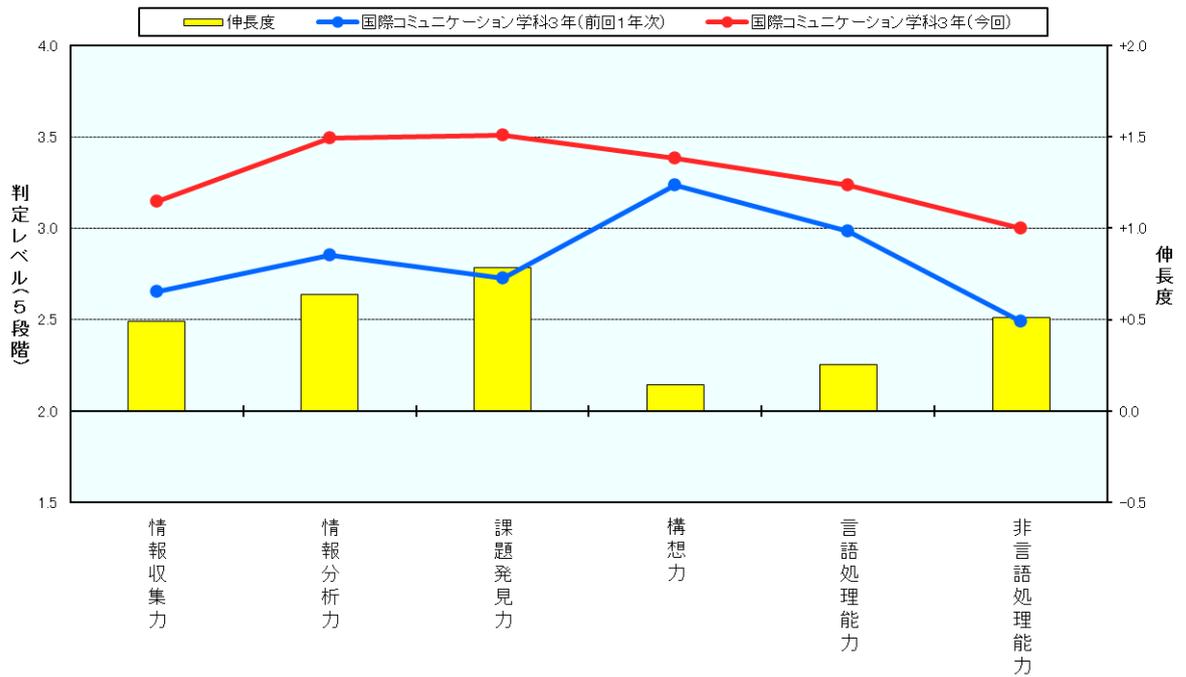
2020年度旅程管理研修合格者(学科・学年次別)

学科	1年次	2年次	3年次	4年次	合計
現代英語学科	1	4	8	3	16
国際コミュニケーション学科	1	1	12	0	14
合計	2	5	20	3	30

2020年度現代英語学科3年次生PROGテスト伸長度分析(リテラシー要素、2018年度受検1年次との比較)



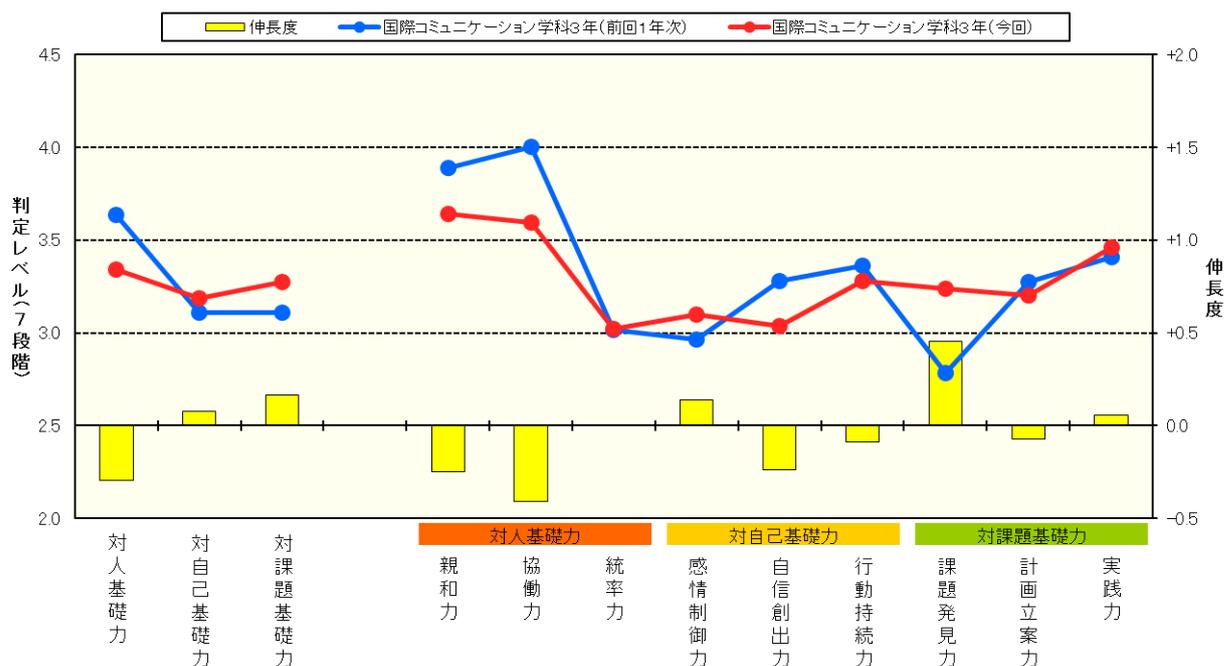
2020年度国際コミュニケーション学科3年次生PROGテスト伸長度分析(リテラシー要素、1年次との比較)



2020年度現代英語学科3年次生PROGテスト伸長度分析(コンピテンシー、1年次との比較)



2020年度国際コミュニケーション学科3年次生PROGテスト伸長度分析(コンピテンシー、1年次との比較)



アセスメント結果の概要

アセスメント・プランに基づき、以下のアセスメント結果に係る分析を実施した。

- 1)2020年度 学科別・学年次別 GPA 総平均に係る分析
- 2)2020年度 DP 到達度自己評価 (Assessmentor)
- 3)2020年度 TOEIC L&R 学科別・学年次別受検者数・受検率・平均スコア
- 4)2020年度3年次生対象 PROG テスト 学科別伸長度分析 (2018年度1年次受検結果との比較)
- 5)2020年度 学科別・学年次別旅程管理研修受講者(合格者)数一覧

アセスメント結果から見える問題点

- 1)GPA 分布については上記【2-A-1-1】でも言及した通り、総平均帯であるGPA2.5に満たない学生が占める割合において国際コミュニケーション学科3年次が31.2%と有意に少ない(現代英語学科3年次は43.1%)。

2) 2020 年度の Assessmentor を用いた DP 達成度自己評価を学科別及び学年次別に集計した。当該年度 3・4 年次生と 1・2 年次生では適用される DP が異なるため、同一要素に基づく分析とはなっていない。まず旧 DP (3・4 年次生) ではいずれの要素も現代英語学科が国際コミュニケーション学科を上回っており、この点は後掲【3-B】においても同様であった。一方、項目ごとの平均値では、カテゴリ A (知識・理解)、カテゴリ B (論理的思考力等) が総合的に低いという結果となり、これは【3-B】及び後掲【2-B-3】と同じ傾向を示している。現行 DP (1・2 年次生) においても現代英語学科有意の傾向は変わらない。項目ごとの平均値では「学修成果 4 (専修外国語の運用能力)」において両学科の懸隔が最大となるが、これは国際コミュニケーション学科が初修外国語を専攻するため、低年次学生において専修外国語の運用能力における自己評価が英語専修学生に比べて低いことによる。同一属性における項目ごとの平均値においては、両学科ともに 1 年次は「学修成果 5 (専門知識)」、2 年次では「学修成果 4」が最低となった。1 年次は専門教育科目を受講しないため、学修成果 5 の自己評価は低調とならざるを得ないが、当該科目群を受講した 2 年次で学修成果 5 の自己評価と逆転するのは興味深い。

3) TOEIC 受検率は両学科合計で 1 年次 82.3%、2 年次 74.6%から、3 年次以降では 4 割以下 (現代英語学科においても 5 割以下) に落ち込む。特に海外留学からの帰国直後 (3 年次秋学期) は語学力伸長度を測るうえで重要なタイミングでもあり、受検勸奨の強化が求められる。スコア伸長度については今後、当該学年次の年次進行ごとの学科別平均点を算出し、経年分析により伸長度を測定していくが、特に現代英語学科 3 年次・4 年次のスコアの低調さについて抜本的な改善が必要。

4) 2018 年度 1 年次受検時と比較すると、両学科ともにリテラシーレベルは全項目で伸びを示しており、学士課程教育の成果を一定程度看取することができる。但しこの中で両学科ともに「構想力」が伸長度としては最低となっている。構想力の意味するところは「解決策のアイデア出し」「解決策の絞り込み」「解決策の具体化」であり、本学の DP においては学修成果 2 の「B 問題解決力」における「論理的思考力・判断力」「PDCA 力」に当たる。複雑な事象の本質を整理し、分かりやすく構造化できる技術等と言い替えることができ、この点が本学の教育において伸ばし切れていない (元々 1 年次時点の評価が高いこともある)。

また両学科においてともに「非言語処理能力」のレベルが最も低い。学部特性上致し方なしとも考えるが、この点については (昨今の文科行政への対応の観点からも) 数理・データサイエンス教育へのテコ入れを現中中期計画にも記載し、必修科目「基礎演習Ⅲ」の授業内容への盛り込みを検討実施している等、改善に向けた動きは具体化している。

コンピテンシーレベルの伸長度は項目ごとにバラつきがあり、両学科とも 13 項目中 6 項目が 1 年次受検時よりも低くなっているが、この点は入学後の学生生活 (特に海外留学) の中で自身を客観視し、ある意味適正な自己評価を獲得した結果とも推察される (要因分析を今後も継続)。しかしリテラシーと比べるとコンピテンシーは全国平均水準を維持しており、その点は一定程度評価すべきである。

5) 特になし

問題点に対する改善方策

1) 本分析結果の更なる分析を進めていく前に、各科目の成績処理時における成績評価ガイドラインの遵守状況を詳細に確認精査する必要があり、フェーズ 2-C (授業科目レベル) の各担当部署においてその手法開発のための検討がなされることを希望する

2) 旧 DP における問題点はカテゴリ A 及びカテゴリ B の達成度が低い点であり、これについては別途のアセスメントである【2-B-3】において具体的改善策を策定済のため、当該項目の欄を参照されたい。現行 DP については学年次進行が道半ばであるため、現時点では明確な課題発見には至らないが、現行 DP 卒業 1 期生となる 2022 年度卒業予定者に係る経年分析結果の取り纏まりを待って、今後の対応を協議することとしたい。

3) 留学前後教育での語学検定試験の受検勸奨は既に担当部署にて実施中であるが、その手法改善について検討する。また学生個人個人の伸長度を Assessmentor 上で本人が可視化できる運用を開発し、これによりモチベーションの維持向上を図る。

4) 「構想力」の伸長に向けて、「基礎演習」等での構造化スキルの熟達を図る内容の増強を検討する。

【2-B-3】2020年度観点別就業力アンケート結果から見る教育課程の適切性の検証

選択肢	①何の指導がなくてもできる	②簡単な助言があればできる
	③綿密な指導があればできる	④どちらともいえない ⑤全くできない

各設問の構成比別一覧表（2020年度）

カテゴリ	観点別	2020 秋 (n=43)		2021 春 (n=123)	
		回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)
A 知識・理解	1 歴史・社会・自然	21	86	20	71
	2 専門知識	21	86	23	72
	3 進路選択への活用	21	86	30	76
B 論理・問題解決	4 情報分析	25	81	30	76
	5 論理的思考	30	84	28	76
	6 問題解決	28	76	32	77
C 態度・意欲	7 自律・積極性	28	76	53	86
	8 異文化理解	44	81	55	92
	9 社会への関与	44	81	46	87
D コラボ・リーダー	10 協調・協働	40	91	53	89
	11 リーダーシップ	35	88	51	87
E コミュ	12 日本語意思疎通	30	79	47	89
	13 外国語能力	42	86	40	82
	14 情報通信	40	86	37	78

(25%以下) (80%以下)

【参考：昨年度比】

カテゴリ	観点別	2020 春 (n=103)		【2021 - 2020】	
		回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)
C	7 自律・積極性	38	75	15	11
C	8 異文化理解	45	79	10	13
B	6 問題解決	22	70	10	7
D	11 リーダーシップ	42	77	9	10
C	9 社会への関与	38	79	8	8
E	13 外国語能力	33	76	7	6
D	10 協調・協働	47	79	6	10
E	12 日本語意思疎通	41	82	6	7
E	14 情報通信	31	72	6	6
A	2 専門知識	21	67	2	5
B	5 論理的思考	27	72	1	4
A	1 歴史・社会・自然	21	73	-1	-2
B	4 情報分析	32	71	-2	5
A	3 進路選択への活用	34	72	-4	4

アセスメント結果の概要

標記アセスメントは2020年度秋季卒業生（2020.9月卒）及び春季卒業生（2021.3月卒）を対象に実施、回答者数は前者がn=43、後者がn=123であった。DPに規定する諸能力について以下の選択肢より回答する設問において、選択肢1乃至2と回答した学生の割合を算出した。

選択肢 ①何の指導がなくてもできる ②簡単な助言があればできる
③綿密な指導があればできる ④どちらともいえない ⑤全くできない

アセスメント結果から見える問題点

カテゴリA「知識・理解」全般(1～3)、及びカテゴリBの4「情報分析」が弱い傾向にある

問題点に対する改善方策

- ・高年次履修語学教育科目の専門教育科目への転換
- ・「キャリアプランニング」の授業内容精査

【フェーズ2 在学中】進捗状況表
 ≪フェーズ2-C 授業科目レベル≫

項目	ASM	アセスメント実施者	点検・評価実施者	最終評価実施日 ・実施機関
		(データ作成担当)	(改善立案含む)	
1. シラバスで提示された授業設計・教授法の妥当性・有効性の検証				
○ODPとの整合性	○	各教員	シラバス改善委員会	22/6/13内部質保証 推進協議会 【2-C-1-1】
○シラバス記載内容	△			
○ティーチング・ポートフォリオ		各教員 (取り纏め：総務課)	外国語学部長 (学部運営会議)	T.P.運用方針の 改善検討につき 今年度分析不可 【2-C-1-2(2021欠)】
○授業評価アンケート		教育支援部	教員SD(FD)委員会	21/3/22大学協議会 5/24大学協議会 【2-C-1-3】
2. 授業科目の学修目標に対する評価の妥当性（客観的かつ厳格な成績評価）の検証				
○科目合格率・科目GPA・当該授業科目における成績分布を成績評価ガイドラインに照らして検証	○	教育支援部	教育支援委員会	22/6/13内部質保証 推進協議会 【2-C-2】

【2-C-1-1】2020年度シラバスの点検

アセスメント結果の概要
各開講科目のDPとの整合性はカリキュラム・マップにて担保されており、また2020（令和2）年度シラバス記載内容の適切性についてはアセスメント・プラン施行前から「シラバス改善委員会」において定時的な点検と改善に取り組んでいた。当該年度シラバスのチェックは2020（令和2）年2月18日の第2回委員会、同年10月8日の2020（令和2）年度第1回委員会において確認がなされている。
アセスメント結果から見える問題点
上記委員会議事録に基づくと、シラバスのチェックについてはシラバス記入方法に関するガイドラインを教育支援部が策定のうえ、作成手法の手引き・作成に係るチェックリスト・当該年度作成日程等について担当教員に案内している。また当該年度開始後においても不断の確認が行われており、チェックリストを基に各教員への修正指示がなされている。
問題点に対する改善方策
喫緊の改善点は現状見当たらないが、今後内部質保証推進協議会及び自己点検・評価委員会にてシラバス作成ガイドラインの内容等を確認するほか、非常勤講師含む授業担当教員の本学DP・CPの理解促進の取組み、カリキュラム・マップに基づくシラバス内容のチェックの厳格化等を検討する。

【2-C-1-3】2020年度授業評価アンケート結果から見る授業科目の適切性の検証

アセスメント結果の概要

本項目は上記【2-B-1-2】と同一のアセスメントを用いて授業科目レベルでの適切性検証を行うものである。授業評価アンケート結果については（アセスメント・プラン施行以前から）教育支援部で取り纏めの後に各教員にフィードバックされる仕組みとなっており、全科目のシラバスには「科目実施後の振り返り（授業評価アンケートへのコメントや改善項目を含む）」欄があり、各教員が当該アンケートのフィードバックを踏まえた改善方を記載することとなっている。

※結果に係る資料は大部なため掲載省略

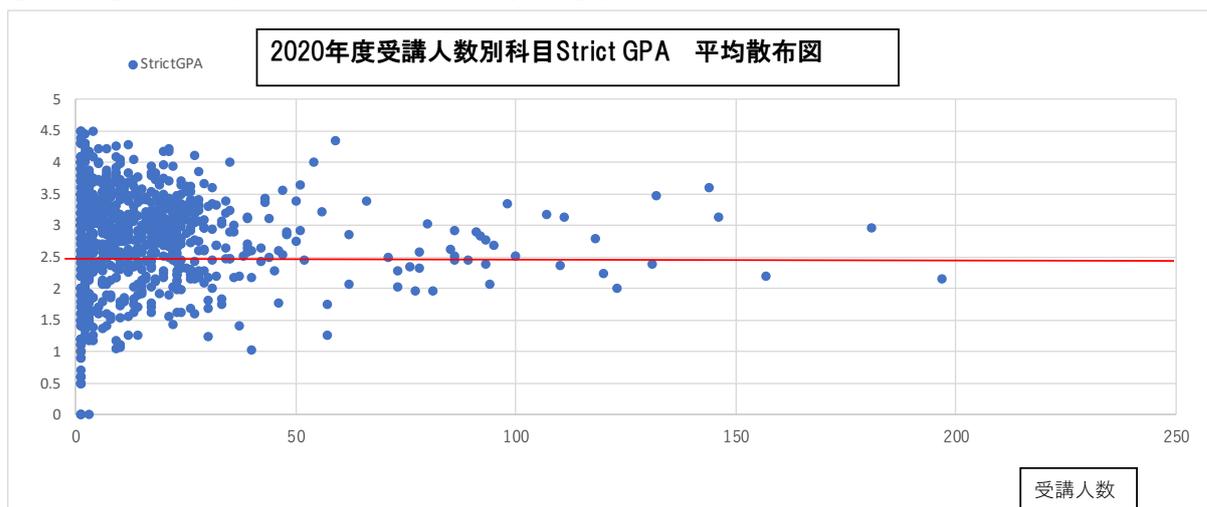
アセスメント結果から見える問題点

本アセスメントの結果は各教員のPDCA サイクルとして実施されており、春学期開講科目は当該学期の終了後に、秋学期開講科目については次年度シラバス作成時にそれぞれ実施され、シラバス改善委員会による点検ののち、教員SD(FD)委員会が確認を行っている。

問題点に対する改善方針

この他の項目も含めて、アセスメント・プランにおける授業科目レベル（2-C）の点検・評価は基本的に各授業担当教員が個々に実施するものとして担保すべきであり、自己点検・評価委員会、内部質保証推進協議会が行うのは各教員レベルの「個別の点検・評価手法等に対する点検・評価」となる。本項目に係る点検・評価手法は上記のとおりであるが、今後は当該アンケート結果・改善結果の担当部署以外への共有方法を検討する必要があるほか、改善コメント作成に係る必須記載事項を定める等の対応が求められる。

【2-C-2】科目合格率・科目GPA・成績分布の検証



受講人数	0～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～39	40～49	50～99	100～
科目数(n)	274	135	107	92	109	55	38	16	34	14
科目平均GP	2.78	2.93	2.85	2.89	2.90	2.94	2.64	2.62	2.68	2.73

アセスメント結果の概要

全ての授業科目において当該科目の受講人数と受講者平均GPを算出した。授業科目ごとのリストは長大になるため分布図と受講人数別平均GP表のみを上記に掲載している。

アセスメント結果から見える問題点

受講人数別平均GPを見ると、受講人数30名を画期として科目平均GPの落込みが見られる（受講人数0～29名は平均GP2.86に対して30名以上は2.66）。本学は語学教育科目の1クラス当たりの受講人数を基本的に20名以下に制限しており、また導入科目の「基礎演習Ⅰ/Ⅱ/Ⅲ」等においても20名を目安として分割開講措置が取られており、こういった少人数教育の成果が（獲得GPベースにおいては）ある程度は認められるものと考えられる。

一方で、科目平均GP散布図に明らかな通り、（特に受講人数が一定程度ある科目においても）科目平均GPに大きなバラつきがあるのは成績評価ガイドラインに基づいた評価がなされているのかについての

疑義に繋がるものであり、改善が必要と史料。
問題点に対する改善方策
<p>多数の学生が履修科目の分割開講（クラス分け）は現在でも一部科目において実施されているところではあるが、経営とのバランスを取りつつ、今後の更なる精度向上が求められる。一方で、今後は各科目にて（すなわち各担当教員ベースで）成績評価ガイドラインの遵守状況を確認して行く必要があり、その手法開発（ルーブリックの活用等）を担当部署で進めていく。</p> <p>また科目ごとの平均GPの懸隔の問題に対しては、現在教育支援部にて、Assessorに学生個人の語学能力をCEFR基準に基づいて評価し入力する施策を検討中であり、本取組みが実施された際に当該入力情報と科目GPのクロス分析により成績評価の妥当性を検証することとしたい。</p> <p>なお、本項目は本来、各科目ベースの合格率やGP分布を精査すべきものであるが、担当部署が所有するこれに係る膨大なデータを如何に共有し、如何にフィードバックし、如何に検証するかについて学内での継続的な検討を要するものと思料する。</p>

【フェーズ3 卒業時（卒業後）】進捗状況表
 ≪フェーズ3-A 大学全体レベル≫

項目	ASM	アセスメント実施者	点検・評価実施者	最終評価実施日 ・実施機関
		(データ作成担当)	(改善立案含む)	
○卒業生数・卒業率		学生支援部	教学IR委員会	3/14大学協議会 【3-A-1】
○学位授与数・授与率				
○大学院進学者数・進学率		キャリアセンター		
○就職状況・就職率				
○専門領域へ就業率				
○資格取得・国家試験合格実績	○	教職センター 旅程管理研修機関事務局 キャリアセンター		5/24大学協議会 【3-A-2】
○教員・公務員採用状況		キャリアセンター 教職センター		
○卒業時満足度調査	○	教育支援部		21/2/8大学協議会 21/3/8大学協議会 【3-A-3】
○卒業生のキャリア状況に関するアンケート ○就職先企業等アンケート		キャリアセンター		

【3-A-1】2020年度卒業生数、学位授与数、大学院進学者数、就職状況、資格取得・国家試験合格実績、教員・公務員採用状況

2020年度 進路決定状況

学部	学科	区分	卒業生数	就職希望者数 [A]	就職者数 [B]	進学者数	就職率 [B/A*100]
外国語	現代英語	日本人	67	54	51	0	94.4%
		留学生	2	0	0	0	—
		合計	69	54	51	0	94.4%
	国際コミュニケーション	日本人	54	43	42	0	97.7%
		留学生	69	36	30	2	83.3%
		合計	123	79	72	2	91.1%
	学部合計 (大学合計)	日本人	121	97	93	0	95.9%
		留学生	71	36	30	2	83.3%
		合計	192	133	123	2	92.5%

過去5年間の学位授与数

学部	学科	学位名称	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
外国語	現代英語	学士 (英語)	56	60	73	77	69
	国際コミュニケーション	学士 (国際コミュニケーション)	87	103	107	83	123
	合計		143	163	180	160	192

専門領域（業務で語学を活用する予定のある就業先）就職率

業種	専門領域就職者数
食料品、飲料、たばこ、飼料製造業	5
電気、ガス、熱供給、水道業	0
情報通信業	2
運輸業、郵便業	2
小売業、卸売業	3
不動産業、物品賃貸業	0
金融業、保険業	2
宿泊業、飲食サービス業	28
生活関連サービス業	1
学校教育、学習支援業	2
社会福祉、介護事業	0
複合サービス業	0
その他、宗教、サービス業	2
公務	1
専門領域就職者計 (A)	48
就職者 (B)	123
専門領域就職率 (A/B)	39.0%

2020年度卒業予定者(4年次生)TOEICスコアと過去比較

	2020年度4年次生		2015年度4年次生	
	実数	構成比	実数	構成比
在籍者(11/1)	215	100%	182	100%
730以上	6	2.8%	4	2.2%
600以上	23	10.7%	8	4.4%

旅程管理研修 受講者数と合格率

2020年度

全体

研修種類	総合	国内科目 免除	国内	合計	合格率
受講者数	-	-	53	53	100%
修了者数	-	-	53	53	

本学学生

研修種類	総合	国内科目 免除	国内	合計	合格率
受講者数	-	-	30	30	100%
修了者数	-	-	30	30	

卒業者の教員免許状の取得の状況、及び教員への就職の状況

英語教員免許状

年度	高一種 中一種	高一種 のみ	中一種 のみ	合計	教員採用数 (臨採を含む)
2016	3	0	0	3	2
2017	7	1	0	8	2
2018	5	1	0	6	6
2019	7	0	0	7	1
2020	1	0	0	1	1

アセスメント結果の概要
上表のとおり
アセスメント結果から見える問題点
<ul style="list-style-type: none"> 2020年度4年次生におけるTOEIC L&R600以上の者の割合は10.7%であり、2015年度当該年次学生(4.4%)に比して改善傾向が見られる。一方で本学が事業計画に掲げる数値目標(45%以上)には遠く及ばず、今後の改善が望まれる。
問題点に対する改善方策
<ul style="list-style-type: none"> 上記課題に対して2022年度事業計画(戦略4)所載の事項を確実に履行することが求められる。 構造的課題として、フェーズ3-Aのミッションは「特に社会の大学に対する期待やニーズを踏まえ、DPが大学の教育目的、人材育成目標に照らして適当かどうかを、学生の志望進路(中略)等から検証する」であるが、このミッションを達成するにあたって必要なアセスメント種別の再検討、手法開発、及び外部評価との連携等についても今後検討する必要があると思われる。

【3-A-2】2020年度卒業時満足度調査（卒業アンケート）結果から見る教育課程の適切性検証

- 選択肢 ①そう思う ②ある程度そう思う
 ③あまり思わない ④思わない ⑤分からない

Ⅱ-2. 卒業するにあたって、この4年間で十分な語学学習ができ、語学力が身についたと思いますか。【外国語能力】

設問	2019年度		2020年度			
	2020春 (n=103)		2020秋 (n=33)		2021春 (n=123)	
	回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)
Ⅱ-2. 外国語能力	43	87	42	94	47	90

Ⅱ-3. 社会で必要となる教養や専門知識など身に付けることができましたか。【知識教養】

設問	2019年度		2020年度			
	2020春 (n=103)		2020秋 (n=33)		2021春 (n=123)	
	回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)
Ⅱ-3. 知識教養	55	92	61	94	50	93

Ⅲ-5. 全体的に大学側のサポートは適切でしたか？【学生サービス満足度】

設問	2019年度		2020年度			
	2020春 (n=103)		2020秋 (n=33)		2021春 (n=123)	
	回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)	回答①(%)	①～②(%)
Ⅲ-5. 満足度	46	84	48	91	50	89

アセスメント結果の概要

標記アセスメントは2020年度秋季卒業生（2020.9月卒）及び春季卒業生（2021.3月卒）を対象に実施、サンプル数は前者が33、後者が123であった。集計結果のうち以下3問について2019年度結果との比較分析を実施した。

- Ⅱ-2. 卒業するにあたって、この4年間で十分な語学学習ができ、語学力が身についたと思いますか。
 Ⅱ-3. 社会で必要となる教養や専門知識など身に付けることができましたか。
 Ⅲ-5. 全体的に大学側のサポートは適切でしたか？

アセスメント結果から見える問題点

- 1) 「外国語能力」に係る成長実感が、「知識・教養」に係る成長実感に比して低い（Ⅱ-2、Ⅱ-3）
- 2) 学生サービス満足度の更なる向上（Ⅲ-5）

問題点に対する改善方策

- 1) について
 - ・語学目標達成指標の明示（語学能力関連DPループリックの周知拡大）
 - ・初修外国語においては卒業時にCEFR-B1レベル到達を目標として明示する
 - ・現代英語学科におけるTOEICスコア伸長度目標の周知強化（併せてTOEICの受験率等の目標達成）を求める
 - ・IR課にて引き続き学位プログラムレベルでの分析を実施し、追って結果を報告
- 2) について
 - ・IR課にて他の設問とのクロス集計分析を実施し、追って結果を報告する

【3-A-3】2020 年度就職先企業等アンケート、卒業生のキャリア状況に関するアンケートから見る教育の改善方策の立案

●2020 年度就職先企業等アンケート

調査目的：本学の卒業生が就職している事業所に対してアンケート調査を実施し、企業等の卒業生に対する評価に及ぼす大学教育の効果を明らかにすることを目的とした。

実施時期：2020 年 10 月 14 日～2020 年 10 月 30 日

調査対象：過去 5 年間（2016 年度～2020 年度）の卒業者を採用している国内企業 320 社

調査方法：調査票を各事業所に郵送、回収方法は FAX 並びに E-mail

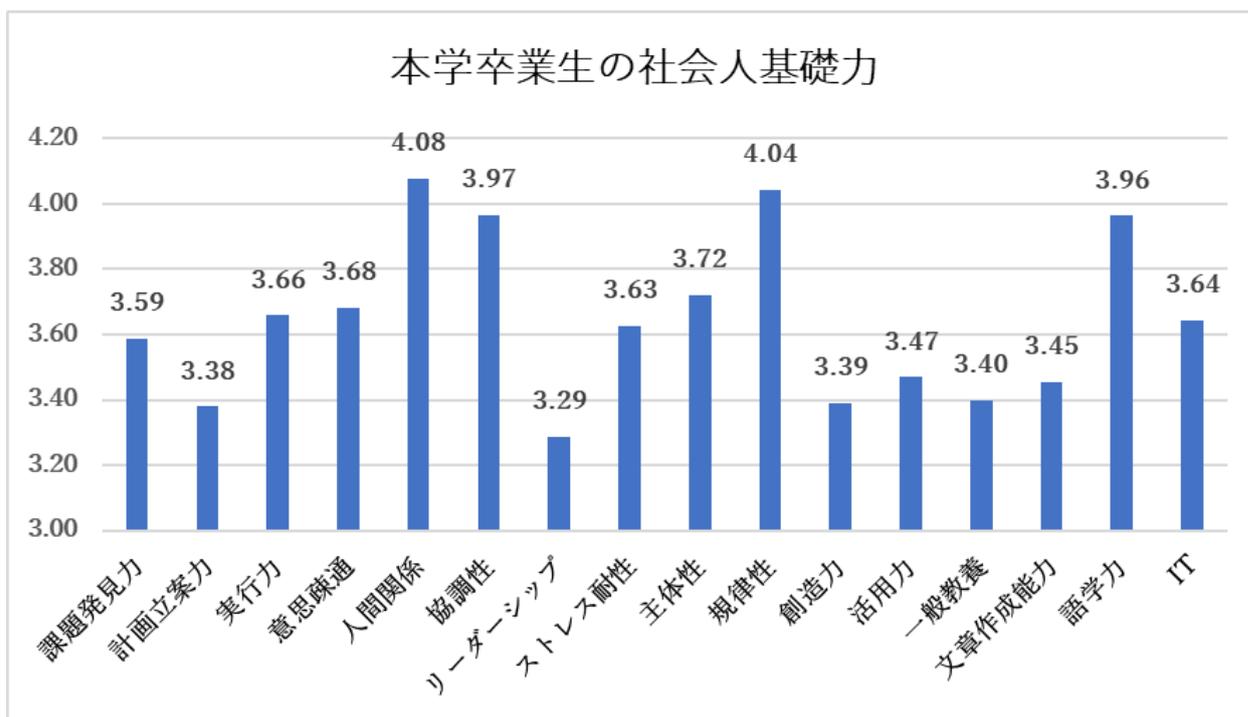
回 答 率：調査対象となった 320 事業所のうち 107 事業所より回答を得た（回答率 33.4%）

問 1 【社会人基礎力】働く上での能力について、本学卒業生はどのレベルに当てはまりますか

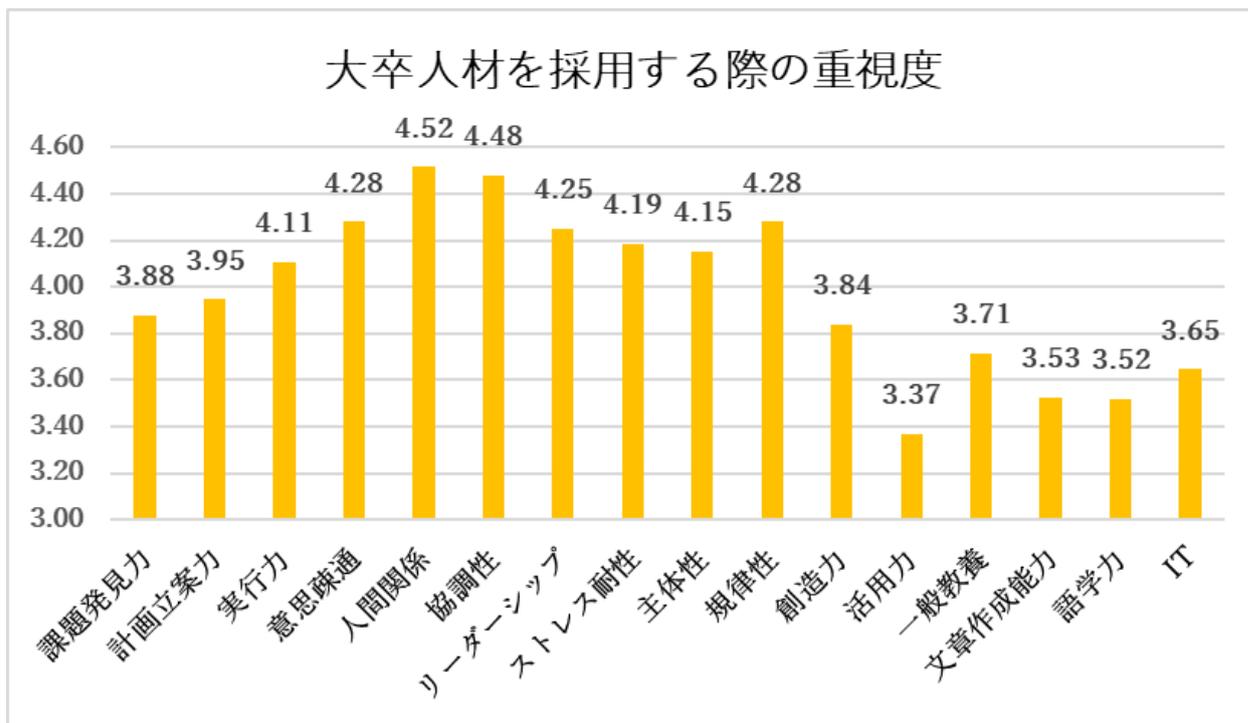
【カテゴリ】・情報の収集・分析による問題発見力

- ・問題解決のための計画立案力
- ・計画を確実に実践する実行力
- ・正確な意思疎通を図る力
- ・職場内外で円満な人間関係を築く力
- ・チームの中で仕事を進める協調性
- ・他者を巻き込むリーダーシップ
- ・感情の起伏を制御できるストレス耐性
- ・自立して物事に取り組む主体性
- ・社会・職場のルールを守る規律性
- ・新たなアイデアを生み出す創造力
- ・大学で学んだ専門分野に関する知識の活用力
- ・その他の一般的教養
- ・記録・資料・報告書等の文章作成能力
- ・外国語でのコミュニケーション力
- ・コンピュータやインターネットを活用する力

上記 16 個の能力について、本学卒業生の評価を「大いに優れている：5」、「やや優れている：4」、「変わらない：3」、「やや劣っている：2」、「劣っている：1」の 5 段階で回答するもの

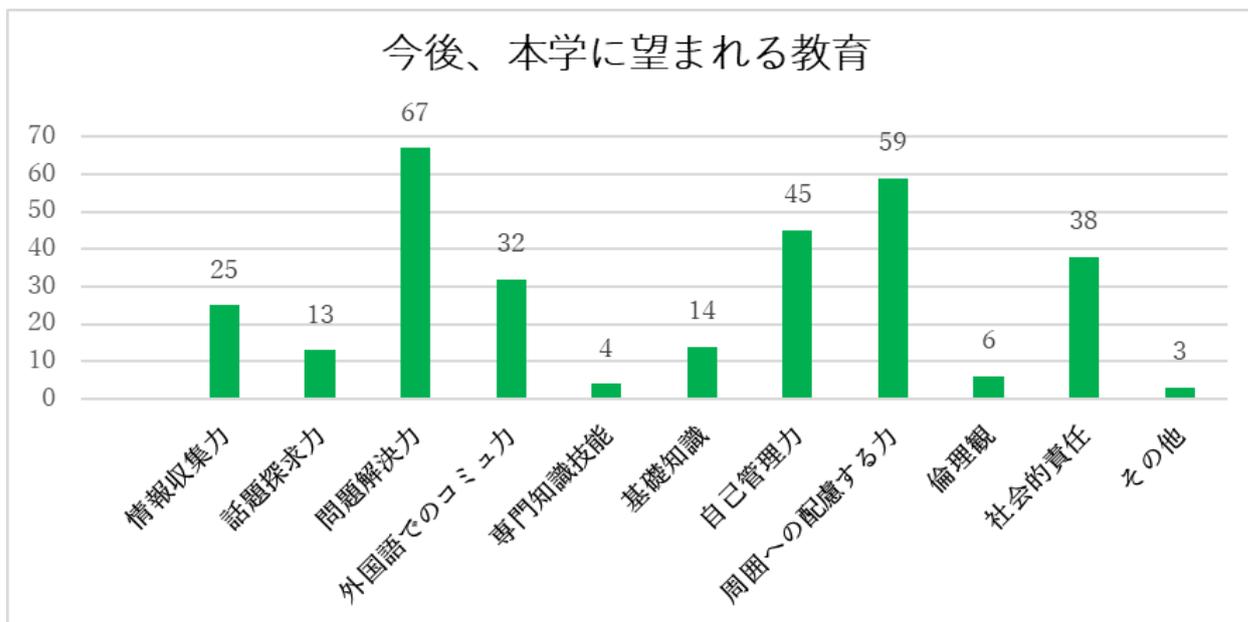


問2【大卒人材採用の際の重視度】貴社が大卒人材を採用するあたりどの程度重視していますか。問1と同様の16個の能力の重視度を、「非常に重視する：5」、「ある程度重視する：4」、「どちらでもない：3」、「あまり重視しない：2」、「まったく重視しない：1」の5段階で回答するもの



問3【今後、本学に望まれる教育】今後、本学の教育の中でどのような力の育成を望みますか。以下の項目より3つ選択してください。

- 【選択肢】 1. 情報収集力 2. 課題探求力 3. 問題解決力
 4. 外国語でのコミュニケーション力 5. 専門知識技能 6. 基礎的知識 7. 自己管理能力
 8. 周囲へ配慮する力 9. 倫理観 10. 社会的責任の態度 11. その他



●2020年度卒業生のキャリア状況に関するアンケート

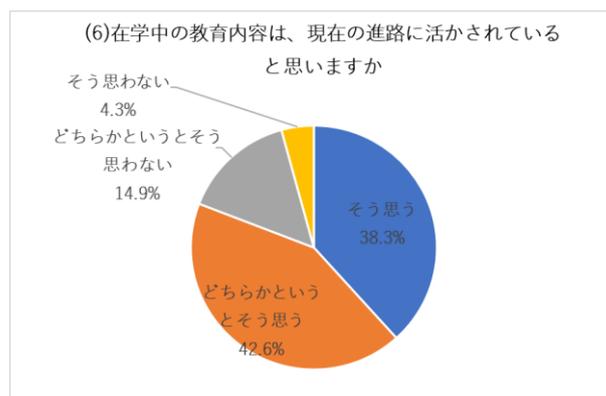
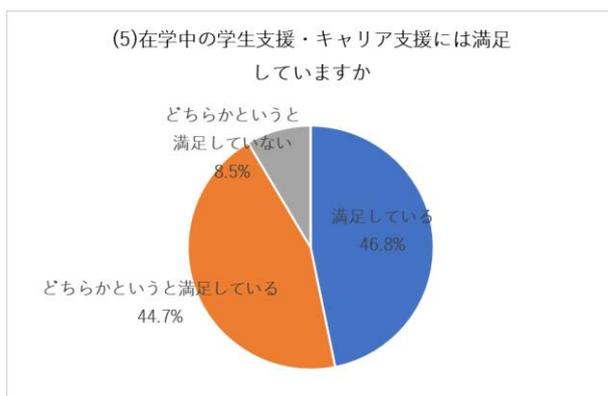
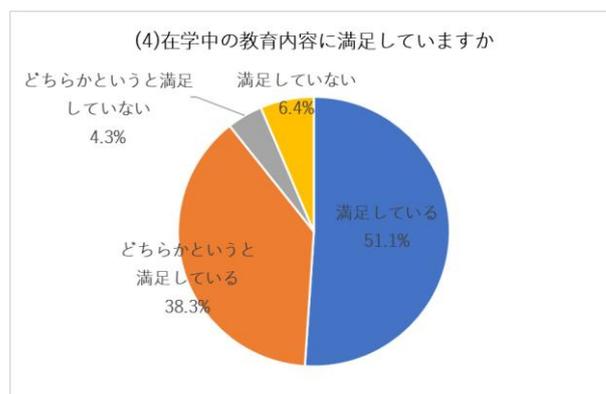
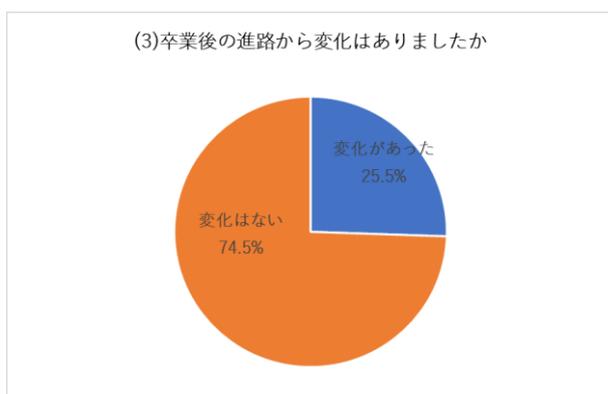
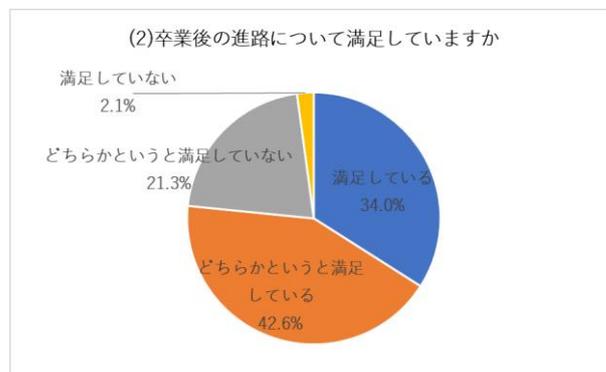
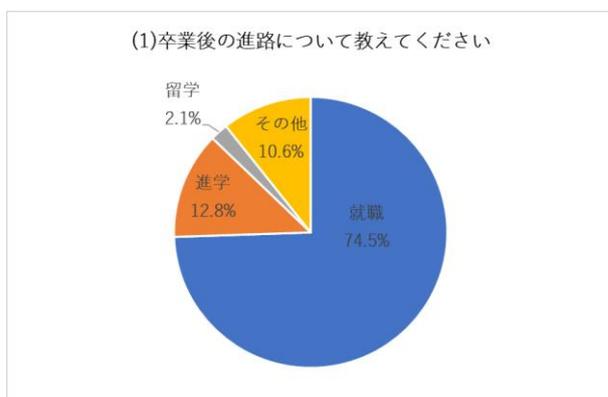
調査目的：本学を卒業した者を対象にアンケート調査を実施し、卒業後の進路についての意識調査を行い、大学教育の効果を明らかにすることを目的とした。

実施時期：2020年10月16日～2020年10月30日

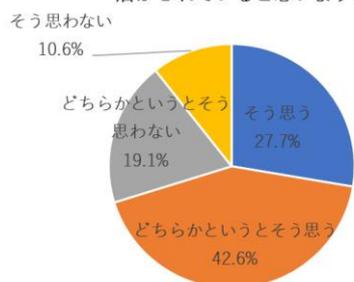
調査対象：2017年度、2018年度卒業生

調査方法：Google フォーム

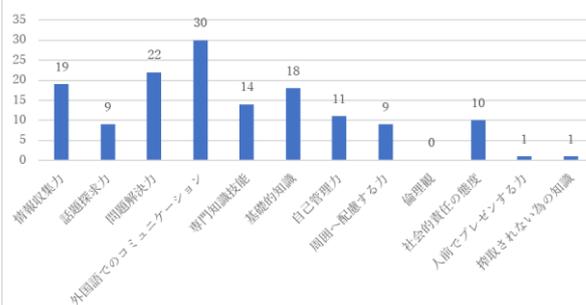
回答率：Eメールにて対象者256名へアンケートを依頼し、47名より回答を得た(回収率:18.4%)



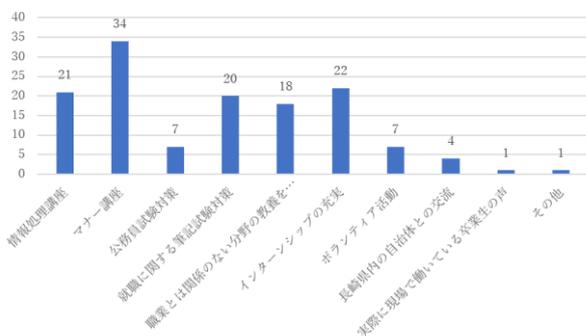
(7)在学中の学生支援・キャリア支援は、現在の進路に活かされていると思いますか



(8)今後本学の教育の中でどのような力の育成を望みますか (3つ選択)



(9)今後本学に望むカリキュラム (3つ選択)



アセスメント結果の概要

【企業】対象：2016～2020年度卒業生就職先企業等 320 事業所 (回答 107 事業所)
 設問：本学卒業生への評価・印象、採用に当たり重視する能力、等

【卒業生】対象：2017～2018年度卒業生 256 名 (回答 47 名)

設問：在学中のキャリア支援への満足度、本学教育内容の現在の職務における活用度合、等

アセスメント結果から見える問題点

1) 採用企業側が抱く本学卒業生のイメージとして、人間関係構築力・協調性・規律性・語学力が総じて高いと評価されている一方、企業が採用の際に大いに重視する要素の一つであるリーダーシップについてはやや弱い (2021年3月8日第34回大学協議会議事録)

問題点に対する改善方策

1) リーダーシップについては【2-B-3】(2020年度卒業時観点別就業力アンケート結果)において、DPのD-11の項目として設定されている。卒業時の学生の自己評価としては前14項目中4番目の高い評価となっているが、他学学生と比較したときの相対評価において、自己評価との乖離があるものと思われる。本問題点へのテコ入れとして2019年度以降入学生の「GAIDAIプログラム科目群必修化」に着手しており、特に2-B-3のアセスメントにおいて旧カリと新カリの画期となる2019年度入学生への集中的な分析が必要になるとと思われる。

【フェーズ3 卒業時（卒業後）】進捗状況表
 ≪フェーズ3-B 学位プログラムレベル（学部・学科レベル）≫

項目	ASM	アセスメント実施者	点検・評価実施者	最終評価実施日 ・実施機関
		(データ作成担当)	(改善立案含む)	
1. 学年進行に従って「卒業認定・学位授与の方針（DP）」で定められている学修成果・教育成果が達成されているかの検証				
○GPA、GPT	○	教育支援部	教学IR委員会 (現代英語学科) (国際コミュニケーション学科)	22/6/13内部質保証 推進協議会 【3-B】
○学生の自己評価、教員の評価	○	教育支援部		
○成績分布等大外プログラム（留学、インターンシップ、ボランティア、卒業研究等）の学修成果	○	教育支援部		
○外部語学力テスト	○	社会連携センター (学修支援センター)		
○汎用的能力テスト（PROG等）	○	教育支援部 (→キャリアセンター?)		
○資格取得状況	○	旅程管理研修機関事務局 キャリアセンター		

2020年度卒業生の学年次進行に応じたGPT平均の推移

	1年次	2年次	3年次	4年次
現代英語学科	104.37	181.00	242.93	265.45
国際コミュニケーション学科	91.10	163.76	166.85	231.78

2020年度卒業生のDP達成度自己評価推移

(旧DPに基づく、各年度後期実施分、満点5.0)

A 知識を理解し取り組む力	1年次	2年次	3年次	4年次
現代英語学科	2.38	2.55	2.54	2.86
国際コミュニケーション学科	2.09	2.33	2.63	2.76
学部総合	2.28	2.46	2.58	2.81

B 論理的思考力・問題解決力	1年次	2年次	3年次	4年次
現代英語学科	2.43	2.66	2.58	2.92
国際コミュニケーション学科	2.14	2.47	2.58	2.76
学部総合	2.33	2.58	2.58	2.84

C 学習に取り組む態度・意欲	1年次	2年次	3年次	4年次
現代英語学科	2.71	2.71	2.94	3.05
国際コミュニケーション学科	2.56	2.46	2.84	2.83
学部総合	2.66	2.61	2.89	2.94

D コラボレーションとリーダーシップ	1年次	2年次	3年次	4年次
現代英語学科	2.63	2.74	2.88	3.07
国際コミュニケーション学科	2.55	2.50	2.79	2.91
学部総合	2.61	2.64	2.83	2.99

E 効果的なコミュニケーション力	1年次	2年次	3年次	4年次
現代英語学科	2.33	2.51	2.66	2.95
国際コミュニケーション学科	2.09	2.29	2.68	2.86
学部総合	2.25	2.42	2.67	2.90

アセスメント結果の概要
<p>アセスメント・プランに基づき、以下のアセスメント結果に係る分析を実施した。</p> <p>1)2020年度卒業生 学科別 学年次進行によるGPT推移 (Assessmentor) ※GPAについては【2-B-2】参照</p> <p>2)2020年度卒業生 学科別 学年次進行によるDP達成度自己評価 (Assessmentor) (旧DPに依拠、【1-3】【2-A-1-2】【2-B-3】等も併せて参照のこと)</p> <p>3)2020年度卒業生 学科別 TOEIC L&R 平均スコア等【2-B-2 所掲表の4年次参照】</p> <p>4)2020年度卒業生 学科別 旅程管理研修受講者(合格者)数一覧【2-B-2 所掲表の4年次参照】</p> <p>※PROGテストは現時点で卒業年次に受検する運用となっていないため、フェーズ3(卒業時・卒業後)の分析に活用することはできない</p>
アセスメント結果から見える問題点
<p>1)Assessmentor を用いて学科別に GPT の平均値の学年次進行に応じた推移を見た。4年次終了時点のGPTは現代英語学科が30PT以上高くなっているが、これは教職課程の履修者に同学科の学生が多く、単位取得総数の学科平均が上昇することによる。両学科間の懸隔は3年次終了時点で最大(約76PT)となるが、これは前掲【2-B-1-1】にて言及の通り、国際コミュニケーション学科の学生の留学帰国後の留学先既修得単位の読替え認定が4年次にずれ込むことによる。</p> <p>2)Assessmentor を用いた集計結果であり、同種のアセスメントである【2-B-3】(紙媒体実施)とは設問のツール・形式が異なることもあり、数値の異同が大きい。しかし結果は上記アセスメントと同様カテゴリA(知識・理解)、カテゴリB(論理的思考力等)が低いという結果となり、調査の有効性はある程度裏付けられたか考える。</p> <p>3)【2-B-2】とはフェーズが「在学中」「卒業時」と異なるものの、結果の概要及び問題点、改善方策等は同一であり、上記項目を参照いただきたい。</p> <p>4)上記3)に同じ</p>
問題点に対する改善方策
<p>1) 分析のパイロットケースであり、今後経年変化を見つ、問題点の発見と改善方策の策定に努める。</p> <p>2) 【2-B-3】と同様、「高年次履修語学教育科目の専門教育科目への転換」、「キャリアプランニングの授業内容精査」に取り組む。</p> <p>3) 【2-B-2】に同じ。</p>

以上